

いづれも父の藝風を祖述せるに外ならずと雖も、尙ほ和事と荒事とを巧みに結合はせたる彼の助六の如きは、全く此の優によりて創められしなり。是を以つて、彼れが其の父と異なる點は、豪岩粗樸のほかにも、優柔艶麗の趣きを存せるにあるならん。彼の八百屋半兵衛もしくは紙屋治兵衛などの心中狂言さへ演せしが如きは、最も其の適例とすべきなり。之れを要するに、彼れは初世團十郎よりも其の技藝に於て多方面なりき。

又、彼れは「暫」のつらねの如き、艾賣の白の如き、及び「外郎賣」の言立ての如き、辯舌と聲調とを以て主とするものを得意としたりき。蓋し、此等の長白も尙ほ初世團十郎の藝風を祖述せるものなりと雖ども、彼れに至りて、愈口舌の上に其の技巧を弄する事となれり。左に初世團十郎が「暫」のつらねと二世團十郎が「外郎賣」の白とを掲げて讀者の對照に供せん。

石山源太荒王丸のセリふ

元禄十六年「源氏六十帖」。(初世團十郎)

夫れ法問につき鐘叩けば響く打てば鳴る申すばかりのだんざりも初段を臨めれば

首牛、あんごうからす月夜の釜、わけ／＼、嘘の川いたち、田鼠けしては鶴となり、赤貝ぶんにてうぶめをなる、ちぎやア一こふ樂音より長き此の世の夢を見る。跳ねるも舞ふもささんだん、眞行草の三つ四つ、五つ、つもの赤つつら、やさしく延べて顔見せの、舞をつん抜くやり梅が、眞一文字のなが刀、さいたら知にじんだな、踏む亂拍子つるその舞、名を掲げ幕を出づる日の、左右を拂つて雲を吐く、世界を呑んで掌心、おさまれた所が御寶前、かけ奉る御しうしん、諸願成就、こいの綱、いさら／＼、あいさらや、やつとこ取つては寒こほり、氷を割つて岩を抜く、山を飛ばす勢ひは、こんけいごらうに聲を吹く、石山源太荒王とて當世沙汰あるいき、樂平、三國無双のやま若衆、口脱かば本に靡く氣だ、惚れてがあらば奴ども、随分仲立ち仕れ、佛前、社頭橋の下、あなをつこづく古むじな、爺い、婆アの嫌ひなく、情けを掛けてやらさふと、一夜は抱いて捨り首、二度さはあはぬ毛さる松、こんばう機いて追ッ付けまい、おれは情けを掛けたいが、人が嫌がる除けの札、ふだらく、じだらく、かいらく、やらつおかなまかもしる作が、よつたか、いんにや、よはぬか、いんにや、いつも世界の色男、寛瀧くわつと、急地ッ張り、ふんぢかつたる阿吽の二字、日本もろこしあつ束れて、押いた所が大小不動、妙なりく、荒王が手並はかれて、これしうしやくかうきやう、我が胸に、取めた所が、大黒舞、ぼうく、眉に淨化、魁も十八番もへば、二九情いか又は可愛いか、すきにはかる眉つぶり沙汰はない事いつぞ

日本演劇史 第三編 寶曆期 第四章 二世團十郎

いへ、年は積もつて三十一川、二の樂花けふの悦び、めでたく叶ふとホ、つんでるこ
んだ。

外耶賣のセリふ

享保三年「若縁勢會我」二世圖十郎

拙者親方と申すは、御立合のうち、御存じの方もござりませうが、お江戸を立つて
二十里上方、相州小田原一しき町を御過ぎなされて、背物町を登りへ御出でなされる
ば、綱干橋、虎屋藤右衛門、只今は刺髪いたして圓齋となりのります。元日より大晦日
まで御手に入ります此の薬は、昔、ちんの國の唐人、うぬらうといふ人、わが朝へ來り、
帝へ参内の折から、此の薬を深く籠置き、用ゆる時は一粒づつ、冠のすき間より取出す。
依つて其名を帝より、頂透香と給はり、則ち文字には、いたゞきすく香と書て、さうちん
かうと申す。只今、此の薬、殊のほ、世上に弘まり、はうく、に似看板を出し、イヤ小田
原の灰俵の、さん俵の、炭俵の、さ、いろく、と申せども、平假名をもつてうからうを致し
たは、親方圓齋ばかり。もしや、お立合のうち、熱海、塔の澤へ湯治に出でなされる
るか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず門ちがひなされまするな御登りならば右の方、
お下りなれば左側、八方が八棟、ちもてが三つ棟、玉堂進り、破風には菊に柳のたうの御
紋を御紋免あつて、系圖正しき薬でござる。イヤ、最前より家名の自慢ばかり申して

も、御存じない方には、正身の胡椒の丸呑み、白川夜船。さらば一粒たべかけて、其の氣
味合を御目に掛けませう。先づ此の薬をかやうに一粒舌の上へのせまして、腹内へ
納めまするさ、イヤどうも言へぬわ。胃肝肺肝が健かになつて、蒸風咽より來り、口中
微涼を生ずるがござし。魚、島、木の子、種類の喰合せ、其のほが万病速功あるこぞ神の
ござし。扱、此の藥、第一の奇妙には舌のまはる事が、錢ごまがはだして逃げる。ひよ
つと舌が廻り出すさ、矢も擲もたまらぬちや。そりや、くくく。まはつて來た
わ、廻つてくるわ。あわや咽、さたらな舌にかけさしちん。たまの二つは唇の輕重開
合、爽やかに。あかきたなはまやらわ、をこそとのほしよるち。一ツ、ヒギへぎにへぎ
ほし、はじかみ、益まり、益ごめ、ほんごぼう。つみ、糞、つみ、豆、つみ、山椒、背、寫山の社、僧正。
こ、め、のなま、嘴、み、小米のなまがみ、こ、ん、小米のこなまがみ。繭子、ひじゆす、繭子、しゆ
ちん。親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親かへい、子嘉へい、子嘉兵衛、親かへい。ふる栗の木、の
ふる切り口。雨が、つばか、ばん、合羽か。袋、棟のきや、はんも皮、脚、牛、我等がきや、牛も皮
脚、牛、しつか、わ、袴のしつぽ、ころびを、三針はりなかにちよと縫ふて、ぬふて、ちよとふん
だせ。河原、撫子、野、石、竹。のら、如來、のら、如來、のら、如來、のら、如來、のら、如來、一寸のち小
佛に、ちけつ、ます、きや、る、な、細、溝に、ちちよ、よ、る、り。京のなま、鯉、奈、真、な、ま、ま、な、鯉、ちよ
と、四五、貫目。ち茶、たちよ、茶、たちよ、ちやつと、たちよ、茶、たちよ、音、竹、茶、笠、でも、茶、ちやと

五八八
 たちや。くるわ。何が来る、高野の山のまじけら小僧、狸百疋、響百せん、天目百ばい、
 棒八百はん。武器馬具ふくばく、三ぶくばく、合せて武器馬具六ぶくばく。菊栗きく
 くり、三きく栗、合せてむぎこみむむぎこみ。あのなげしの長なきなたは誰か長刀ぞ、
 向ふのこまがらは往の胡麻がらか真こま殻か、あれこそほんのま胡麻殻がら。ひい
 く風車、ちきやがれこぼし、ちきあがれこぼし、ゆんべもこぼして又こぼした。たあ
 ぶほ、たあぶほ、ちりからく、つたつたは、たほ。千輪落ちたら煮てくを、煮て
 も焼ても喰はれぬ物は、五徳籠きう、かな熊どうじに、石熊石持、虎熊、虎きす、中にも東寺
 の羅生門には、茨木童子が、うで栗五合つかんでをむしやる、かの頼光の膝元去らす。
 船、金村、椎井、定めてごたんな蕎麥切菜、温純か愚鈍な小新發知、小畑のこ下に小桶に
 こみそがにて有るぞ、小杓子こもつて、こすくてこよこせ。おつこがてんだ、心得たん
 はの、川崎、金川、程が谷、とつかわ走つて行けば、やいさを振りむく、三里ばかりの、藤澤平
 塚、大磯がしや、小磯の窟を七つ起きして、早天さうく、相州、小田原とうちん香、かくれ
 こざらぬ、黄賊群衆の花のち江戸の花うぬらう。あれ、あの花を見てお心を和らぎ
 やつさいふうぶ子、遣ふ子に至るまで、此の外郎の御評判、御存じないとは申され、まい
 くつぶり、角出せ梅だせ。ほうく原に、白杵、搦鉢ばちくぐわらくく、こはめ
 を外して今日御出での何れも様に、上げれば成らぬ賣らればならぬと思せい引つば

五九九
 加之、彼れは、不動の如き、愛染明
 王の如き、關羽の如き、活人書
 なる、即ち形象を以て専らとす
 るものをも演じて之れに成功
 したりき、是れ、其の口舌のはか
 風姿にも勝れたるを證明すべ
 く、而も、此等の特點は、初世團十
 郎が半ばを有し、且つ半ばを有
 せざるものなりき。蓋し斯の
 如く、彼れが、風姿に於て勝れた



二世團十郎の「暫」(「記代年姦舞歌」より)

五五〇

るは、ひさり其の天品のみにあらずして實に苦心經營の結果に他ならざりき。されば、彼れは又化粧及び服裝の上に於て熱心なる推敲を費し、且つ豊富なる意匠を貯へたりき。例へば、暫の如き、初世團十郎が演せし時は、具足、小手、脇當、素足にて三升の角錐つけたる大太刀を横たへ、頭を大童にして麻繩の鉢巻をなせりといひ、後には野郎頭に鉢巻をつけ、顔を赤く塗り、元祿十五年の「天地人筒守」よりは、紅の隈取をなせりと雖も、其の服裝は、烏帽子を冠り、大紋をつけ、長袴をはくか、或は侍烏帽子に龍神卷の衣裳をつけ、赦免状を持ちて、暫くと僅かに一聲をかけながら揚幕より出でたりといふ。然るに、二世團十郎が、正徳四年彼の「萬民大福帳」の鎌倉權五郎にて始めて之れを演せるや、角鬘に力紙をつけ、顔を筋隈に彫り、柿色の素袍に大太刀を横たへ「暫くく」と三たび聲をかけ、是れより此の扮装と科白とは永く今日に至るまで襲用せらるゝに至りき。而して其の筋隈は既に初世團十郎によりて創められたれど、彼れは更らに庭中の牡丹花を見て、其の筋をほかす事を工夫せりといひ、又彼れが自ら語る所によれば、廿一歳の時、能樂師寶生太夫の藏せる大慮といふ假面を見てより、眼のふちの隈取りを思付きたりといふ。尙ほ、初世團十郎の

時は、服裝の色も淺黄なりしを、餘りに柔弱に見ゆればとて、彼れが種々推敲せる結果、始め、柿色を選びきとぞ。此の他、曾我の五郎の服裝の如きも、彼れによりて頗る改良せられたりき。是れより先き、彼の中島勘左衛門もしくは松本小四郎等は、角髪を太元結にて結び、顔を赤くぬりて出でたりしが、二世團十郎に至り、其の前髪を左右に振分け、且つ顔を白づくりとなし、此の式は同じく今も典型として用ゐらるゝ所なり。而も彼れが三たび演じて三たびながら成功せりといふ、助六は、又其の服裝的の意匠を代表する一例ならん。茲に其の三度ながら服裝の變遷せる順序を掲げん。

最初の助六。(正徳三年) 衣服は黒袖、三升と牡丹とのふせ縞、巾廣の帯に柑子色なる木綿の鉢巻、紺足袋をはき、長き刀を一本さし。

二度めの助六。(正徳六年) 黒小袖に小き刀を挿し、黒絹の鉢巻をなせり。

三度めの助六。(寛延二年) 黒羽二重の小袖に紅絹の帯をつけ、魚葉牡丹を友誼に染めたる五つ所紋、下着は淺黄無垢の一つ前、綾織の帯、鼓輪一つ、印籠、紫縮緬の鉢巻。

此の最後の服裝は所謂「藏前風」と稱する當時の豪客の流行を模し、髪結びやう及

び履物に至るまで其の通りを寫せりといふ。而して彼の暫もしくは五郎と同じく、今日まで此の扮装が助六の典型として保存せらるゝを見て、如何に彼れが意匠の妙なりしかを知るべし。
斯くの如く、彼れの服装的意匠が「助六」によりて代表せらるゝ如く、其の化粧上の技巧は彼の「七つ面」によりて最も能く代表せられたり。「中古戲場説」に當時のさまを實見のまゝに記して曰く、

元文五年、市村座、春狂言、角田川に、柏薙、粟津六郎左衛門に、やつし面打元興寺赤右衛門となり、淺黄頭巾の上へ、かけ烏帽子、紫袴の下ばかりにて、榎の枝を肩にかけての山、腰元ども相手にシヤラクラセリ。東の方に面箱一つならべあり。吉田少將(座元)左衛門、こし所作ありて、症女(宝澤)才次郎に面を見せんと、先づ始めの箱を開くと、尉の面、まことの面と見え、皆我を折りたり。又暫して、櫻姫(龜中歌川)に面を見せんと、あけし處、今度は鹽吹別してよく似たり。其のつぎに、症女、櫻姫、顔深きゆゑ、異見の爲めに、齋若の面を見せんと、開きしに、懐いほど能く似たりし。其の次ぎは、緒の面、まひは武蔵の面あり、これは煤け色にて口をクワツト開きし處へ、久米の平内兵衛(丸)後、に四世團十郎、勅使太宰(藤)山次郎左衛門といふ中役者と一所に惡事を相談し、

みこりたる部島の一卷を出し、奥より足音するゆゑ、人に見せじ、と後に廻せば、件の面、巻物をくはへて引取る。是れはと振顧れば、面箱はシヤツト閉ぢ、押ししても引きても開かぬ所ありしなり。五つの面どれら、く、眉毛、唇など動かさしゆゑ、柏薙なりと知られたり。

されば、彼れが藝談のうちには、展化粧術の秘訣を説けり、今こゝに二三の例を示さん。

睨む前に眼を開きて、睨む時にひらけ、ハッキリとわかるなり。

隈どりは太きよし。地の白粉は隈どる時はムラがよし。紅は薄きよし。濃きは黒く見えるなり。紫は紅の藍がよし。生黄は毒なり。

顔の青さめるには、唇に白粉をつければ、青く見え、藍色は立派に見えるなり。口を窄めるほど、色青く見えるものなり。

睨むは、いつれの眼のふちにても、盛にてぬれば、左右開きても、向ふよりは、際に見えるなり。

彼れは又服装の秘訣をも語れり、曰く、

荒事の襟は淺黄紫のなびまで、又は紫のしごきがよし。背低きには、半切り長く仕立

て上へ引揚げる。自駄落に見え、ワキに強く見ゆるなり。素襦上平の下に下駄をはくがよし。下駄に際あり、裏に木綿へ綿を入れ縫付けるなり。尤も鼻緒はゆるくして然るべし。素袍の時も、荒事は胸當小手がよし、ひよわき生れつきは手太く見えスなり。胸當の上より襦袢を着るべし。襦袢は半袖がよし。略の時も、荒事は手甲股引がよし、略は單物あし、木綿に白衣の裏つき、袴がよし。略の下着は、緋無垢か紅緋金、中形がよし。

荒事は上下にても素足が強く見ゆるなり。年よりては病氣にさほるゆる、荒事には白足袋を用ひたり。白は弱きものなり。すべて、七つ八つの小供の眞似にて、俠者の眞似にては、グスばるなり。

眞直ぐに正面を向けば弱く見え、三角に踊り居れば強く見ゆ。兎角荒事は足を提出すがよし。

彼れは又いふ、なる役柄の解釋を試みて曰く、

角前髪ツノの荒事は娘の酒に酔ふたる氣持にてするがよし。

荒事のぬれ事は器量に惚れられる心にてはわるし、立派に惚れられるか、只あどけなきに惚れられる氣持にてするがよし。

曾我五郎の役に傳あり。工藤と對面の時、飛びかゝらんとするを朝比奈さめる、五郎

の心は工藤を敵と名のらせ、勝負せんと言はせるばかりにて、其の座にて殺す心にてはなし、敵討に兄弟揃へてする心、只言葉の契約せん急ぐ事ゆる、刀の柄には手をかけぬものなり。

若者は泣く氣持がよし。幽霊は氣合ひのあしき心持にてよし。亡魂は潔くするがよし。

武者の役にては、かしまつて候といふ是れ物誦の狂言にて、候は文文、體體なり。侍の役にては、かしまつて御座るといふ、即ち實語にて、是れ言葉俗語體なり。

仔細らしく、遅く、拍子なまり、物を言へば早く聞こえ、舌の廻るものなり。柔かに酔かに言へば、廻らぬものなり。役者も作者も開合を稽古すべきなり。

此の最後の一句に彼れが白廻しといふ事に注意を怠らざりしを見るべし。

斯くの如く、彼れは諸の役柄を解釋し、白廻しに注意し、又服装と化粧とに苦心せりと雖も、要するに、其の技藝の極致とする所は、餘りに非寫實的なりき。自然を摸し、もしくは實境を寫す等は殆ど彼が念頭に存せざりき。是れ、父圓十郎と共に通有せる長所にして、又其の弱點なりしなり。蓋し、京阪に於ては、既に彼の坂田藤十郎によりて自然主義の主張せられてより、寫實の傾向は次第に江戸にまで蔓延せし

が、而も彼れは其の中央に立ちて尙ほ金平的なる藝風を墨守せんとす、新時代の趣味は漸く彼れに倦みたりしならん。『影芝居』曰く、

柏庭、團十郎の時、曾我五郎の役にて、條の下より片手にて家をさし上げて出づる狂言あり。其の時、澤村訥子宗十郎がいふ、片手にて家をさし上げるさは、如何に大力の時致なりとて、餘りの事に思はる、兩手にて上げては如何に、と。團十郎いはく、如何なる大力の人にて、家をさし上げる事はなし、難くして詐なり、狂言なり、とて、雖に力の強き事を見するには、兩手より片手は殊に強く見ゆるなり、といひければ、訥子も大に感ぜしとぞ。今の見物かゝるとに承知すべきや。訥子は見物にあきらめられず、拍蕪は、己が小さき時より、狂言ウツナケにて面白からず、と人はいひけり。

所謂「ジャラケテ面白からず」といへるもの、即ち新時代の趣味もて彼れを観察したりし適評なるべし。

彼れが文筆の素養ありしことは、同じく父の遺傳なりしと共に其の技藝の上に及ぼせる影響も大なりしならん。彼れは、父團十郎の如く、作者として署名せざりしと雖も、其の演せし脚本は往々自家の意匠に出でたり。而して、初世團十郎が才磨

を師とせるが如く、彼れは蕉門の高弟晋其角に事へて俳諧を學び、尙ほ彼れが當意即妙の文才ありし事は種々の逸話によりて傳へられき。

堺町の六兵衛、近所の分限者より黄菊を頼まれしに、間違ひて白菊を切つて來りしゆゑ、團十郎に其の断りを書きて、をひければ、直ぐに筆とりて、

先師の句に、眞白に夜は黄菊の生にけり、かくあれば、黄菊を白も白を黄も、間違ひたるは此の人の罪にあらず。

白菊や夜は麻布の黄がしれぬ。

と書きて、其の菊に添へたりし、彼、彼の分限は却て悦びぬ。〔愚痴拾遺物語〕

團十郎、神田橋邊の膳俵に招かれ、御出入の醫師が若君の風をかきたるを見て居たりしに、若君に何ぞ書けといはれ、四枚つぎの紙の下へ、三升と己が俳名を記し、其上へ、
唐土には聖人の世に風を揚げしこや。

日本はしやれたまこなり、唐風

としければ、之れを御覽じて悦喜せられ、品々の物を賜はれりとぞ。〔我雜語集〕

一既には、寛文二年正月、大阪にて或る人より彼れが似顔粉の質をかきし大風を贈られしより、此の歌を答へしといふ。

が、而も彼れは其の中央に立ちて尙ほ金平的なる藝風を墨守せんとす、新時代の趣味は漸く彼れに倦みたりしならん。『影芝居』に曰く、

柏蓮、團十郎の時、曾我五郎の役に、椽の下より片手にて案をさし上げて出づる狂言あり。其の時、澤村訥子余十郎がいふ、片手にて案をさし上げることは、如何に大力の時致なりとて、餘りの事に思はる、兩手にて上げては如何に、と。團十郎いはく、如何なる大力の人にて、案をさし上げる事はなし、難くして許なり、狂言なり、とて、嘘に力の強き事を見するには、兩手より片手は殊に強く見ゆるなり、といひければ、訥子も大に感せしとぞ。今の見物かゝるとに承知すべきや。訥子は見物にあきらめられず、柏蓮は、己が小さき時より、狂言ツヤラケにて面白からず、と人はいひけり。

所謂ツヤラケ面白からず、といへるもの、即ち新時代の趣味もて彼れを觀察したりし適評なるべし。

彼れが文筆の素養ありしことは、同じく父の遺傳なりしと共に、其の技藝の上に及ぼせる影響も大なりしならん。彼れは、父團十郎の如く、作者として署名せざりと雖も、其の演せし脚本は、往々自家の意匠に出でたり。而して、初世團十郎が才磨

を師とせるが如く、彼れは蕉門の高弟、晋其角に事へて俳諧を學び、尙ほ彼れが當意即妙の文才ありし事は、種々の逸話によりて傳へられき。

堺町の六兵衛、近所の分限者より黄菊を頼まれしに、間違ひて白菊を切つて來りしゆ、と團十郎に其の斷りを書きて、とをひければ、直ぐに筆とりて、

先師の句に、眞白に夜は黄菊の生にけり、かくあれば、黄菊を白も、白を黄も、間違ひたるは此の人の罪にあらず。

白菊や夜は麻布の黄がしれぬ。

と書きて、其の菊に添へたりしかば、彼の分限は却て悦びぬ。〔『愚痴拾遺物語』〕

團十郎、神田橋邊の諸侯に招かれ、御出入の醫師が、若君の風をかきたるを見て、居たりしに、若君に何ぞ書けさいはれ、四枚つぎの紙の下へ、三升と已が俳名を記し、其上へ、

唐士には聖人の世に風を揚げしとがや。

日本はしやれたとこなり、諸風

さしければ、之れを御覽じて、悦喜せられ、品々の物を賜はれりとぞ。〔『我雜語集』〕

一説には、寛文二年正月、大阪にて、或る人より彼れが、似顔繪の習をかきし大風を贈られしより、此の歌を答へしともしいふ。

「とせ、母に仕へし下女さよ、至つて順村にして、柏進(團十郎)眼をかけ、自分が妹(娘?)にして、四代め團十郎、いまだ幸四郎といひし時、妻に送りしが、或る時、さよが髪に鼠つき、夜なく、苦められ、兎ひ所蔵も効なし。柏進これを見て、不肯ながら平素好める、腰折にて難を拂ふべし」とて

異國のたけき歌を繋ぎにし其の黒髪を亂しやはせん

と枕元へ書置きしに、其の夜より果して鼠つかざりしとぞ。(辨事俗言)

尙ほ、彼れが病める人を眼みて治したりといふ逸話は「中古戯物語」に二條を掲げたり、

文事には關係なけれど此れと一對の奇談なり。

大阪にて外郎賣をつさめし時、或る人のもさより、

吾妻にて藝の市川知られども三升さころがイカイげび職。

團十郎の返しに、

吾妻では伊勢の浪萩よしといふ浪花の人の口のおしきよ。

尙ほ、彼れが文才は斯かる下等なる談諧のみに止まらざりき。彼の「老の樂」の如きは確かに徳川時代に於ける日記文の上乗なるものとして見るを得べく、其の享保十九年の條下に曰く、

六月四日、朝曇り、時鳥こぼすほど暗く。五つ頃より晴天。

朝ぐしり聲を拾へやほととぎす

オ牛 (團十郎)

ほととぎすくさぞしるしけり

翠扇 (その妻)

時鳥ほんぞんかけたが日黒みち

錦女 (その女、當時十二歳)

花如の前に床を据ゑて、翠扇は錦女に白髪を抜かせ、予は茶をのみて樂む。

こは彼れが目黒の別荘に於ける實況なり。其の洒落なる風流と且つ平和なる家庭のさまとは眼に睹るが如し。又、類焼の後新宅の祝ひに其の家にて俳諧百韻を催し、條に、

床の掛物は其角が筆空や秋の一行ものにて、是れは元祖あやめの所蔵なりしを、大阪にて病死の前、形身に贈りしもの。遠樹、襖の繪、土佐の古筆、引手は破笠の細工なり。

柱かぐしは光琳の菊花瓶は芭蕉の米ひさご、文盃は黒塗にて時繪、薄に月、其角の白磁

「鬘」角文字や伊勢の野飼の花すゝき。

是れ、彼れが如何に美術的趣味に富めるかを知るに、如何に其の交遊の一代の藝術家に多かりしかを見るべし。何となれば、前にいへる如く、其角は其の師にして、且つ破笠とも相親近したればなり。加之、彼れは英一蝶をも識り、幼時、日本堤に

て左の手を其角にひかれ、右を一蝶にひかれたり、と、同く老の樂に自記せり。此等の嗜好と此等の交遊とは彼れが技藝に大なる影響を與へしならん。

かゝれば彼れが名聲は實に市井の間に高かりしのみならず、ひそかに將軍の御聞にまで達したりき。松浦靜山侯の「甲子夜話」に曰く、

徳廟(徳川吉宗)本所筋の御成りに、或る社頭を過らせ給へて、境内を徘徊せさせ給ふ時、社の傍にかけたる鞍馬を見、あれにある發句はよき句なり、何人かしたるぞ、名は柏庭とあるに、と問はせ給ふ。雇従の輩、誰に候や辨じ申さず、と答へ奉る。其の時、上意に、是れは當時名高き市川團十郎といふ役者よ、汝等は知らぬか、と仰せあり。左右、其の何事にも御詳知の御程を恐入りしこなり。

又「歌舞伎年代記」に、

或る僧のいはく、日本に市川團十郎(スウツエン、ドハンシラシ)といふ力者ありや、中華にて商船來往に真詣を傳來りて見はべり、と長崎よりの文通なり。これは此れ矢の根なるべし。

而して彼れは往々藝術の天才が放逸然らざれば偏僻の弊に陥るとは異りて、其の品行と世才に於ても勝れたり。「誹事俗言」にいはく、

俳優中村仲藏の「秀鶴日記」にも、

平常の行跡は賢者とも言ひつべし。されば、芝居道に規矩を立て、舞臺樂屋の取締は勿論芝居掛合ひのもの、席順張出し番附の甲乙等皆此の人より初まる。第一、母榮光に篤く仕へ、皆人感じけり。其のほかに、輕き役者、樂屋の者、仕切場の者、手代中登寛、火繩賣、木戸番、藤引、振風呂茨の者まで心付け、盆暮の仕着を出し、取立てしとぞ。

役者市川、二代團十郎、今祖師と崇め候事は、未だ九歳たりし時、父を杉山半六に殺され、敵は御上様にて御さり下され候へども、父を討たれしこも母もるとも無念に存じ候て、役者の祖師となり、父の名をあげなんものこ、成田不動尊に三七日、山に籠り、又學文第一になし、人に恭へ、我がまゝなば万事置み今日私なく、年々怠惰なく、つゞめ申され候なり。……夫婦禮義あり、親孝行なり。

云々として、彼れが妻さよの外には僅かに幼少より召使へし、しゆんを妾とせるのみなりしと、劇場の手代が訪問するに袴を着せざれば面會せざりしゆゑ自ら俳優の風儀の改まりしと、高貴に招かれて其の面前に少しも屈せず、且つ其の應答の流るゝが如くなりしと、婦人に聘せらるれば必ず之を辭せると、等を列記せり。而して、彼れが身を持せる事の謹嚴なると斯くの如くなりしに拘らず、其の生活の奢侈な

りしは、前に記せし家居のさまを見ても知り得べし。蓋し、そは彼れが親團十郎八百兩拙者は千二百七十兩といひし如く、一つは其の收入の饒多なりしにもよるべけれど、尙ほ別に一己の見識を持したればなり。彼れ自ら曰く、

役者は大層なるが第一なり。未だ出世前、若し姿つきあしければ、へまの上にへまに見ゆるなり。結構なる姿にて歩けば、へまにても何處やらよし、舞臺より地頭は皆あしき者なれば、團分人に見られぬやうにして、舞臺にて日本中の人々に見すべし。役者は心遣ひが案察なれば、内へ歸りて相應の樂みなし、他へ出ぬが養生の第一なり。他へ出れば打身も受けず、腹も立たず。役者は見ものなれば、不斷は團分結構奇麗にするがよし。若きうちには頭巾なし、中年より覆面頭巾、年よりては駕籠、身を大層にするは奢りにてはなく、見物をよく取る爲めにて、根つけに蒲團をつけて見せれば、其れだけによく見ゆること、皆太夫元への奉公なり。

これ、彼の坂田藤十郎が大阪にて京都より水を運ばしめたと同じ用意なりといふべし。

二世團十郎は前にいへる如く、妻の外に一妾を蓄へたりしも、男子なかりしをもつて、初世團十郎の門下たりし三升屋助十郎の子升五郎を養ひて三世團十郎となし、

三世が夭折するに及び、更に彼れが落胤なりと傳へらるゝ、松本幸四郎を養子として、四世團十郎の名を譲りき。又、門下生には、左團次、八百藏、團五郎、和十郎、金三郎、團太郎、門太郎、龍藏等あり。龍藏が嵐七五郎の子なりし、事は既に前章に記したり、且つ、八百藏は彼の道外方の名手松島茂平次の子なりき。然れども、此等いづれも中材にして甚しく世に顯はれざりき。

團十郎は、前に述べし如く、化粧に造匠を凝らし、と共、前はゆる「早廻り」といふ事を創めたりき。其は、享保十年の春、中村座にて真田與市より土風彌太郎に譲はれる即ちこれなり。

操りの淨瑠璃を歌舞伎に演ぜしは、江戸に於て彼れを最初とす。其は、享保二年五月の「國姓爺」して、蓋し、近松の原作が始めて大阪の竹本座に上擧せられしは同年二月なりき。團十郎は此れより後と、眞淨瑠璃の作を轉用し、翌々、享保四年は「曾根崎心中」、六年は「天網島」、七年は「八百屋心中」等すべて前に述べたる如し。

團十郎が身振の特色は、舌うつ事、腕を組みて腕む事、手を頬杖にして覗む事、鼻をつまむ事、手をひるげて鼻の先より握手にして、カ、さいひながら下す事、左に大太刀をさ

五十四
じあげ、右の手をひるげ、下へつぐばり、兩足一所に爪立て、ドツシリと足を据えて睨む
事及び、引臺に乗つて頭をふり、カツテン〜といふが癖なりきといふ。

第五章 澤村宗十郎

主なる役柄—多方面なる技藝—和事と實事—大岸宮内と忠臣
限—梅の由兵衛—露の五郎兵衛—油屋庄九郎と平の清盛—所
作事—彼れが競争者—團十郎との比較—彼等の交情—多才多
能—彼れが技藝の秘訣—誦讀と義侠

澤村宗十郎(翁子、元祿二—寶曆六)は京都の宮家に事へし三木若狹守(或ひは長門とも)といふ武士の三男にして、西上京に生まれ實名を藤五郎(或ひは藤之丞)といへり。壯時身を誤りて俳優澤村長十郎の家に寄食し、終に樂屋の書記たりしが、後長十郎に乞ひて俳優となり、染山喜十郎といひき。然れども、長十郎が澤村の姓を許さざるを恨みて隙を生じ、去つて民谷四郎五郎の門下に投じて、専ら地方を漂泊し、未だ純粹なる俳優たるを得ざりしゆゑ、囃子の笛を吹き、或ひは、偶舞臺へ出づるも只補助として端役をつとむるに止まりたり。而して、正徳五年の頃は伊勢古市の劇場に現れしが、彼の四郎五郎の和解によりて再び舊師長十郎の許に復するを得、享

保元年十一月、始めて長十郎が座元たりし澤村座の舞臺に現はれ、同時に改名して澤村善五郎といひき。當時、同座の狂言金の市藏に若殿鶴松多門之助に扮し、翌二年正月は國姓爺に大明王の役なりしが、恰も姉川新四郎が病氣となりしゆゑ、彼れは新四郎に代りて和藤内をつとめ、喝采を得たりき。

「名人忌辰録」その他に記されし致年によれば、彼れは、貞享二年の生れならざるべからず。茲には「役者論評魁」の說に隨ふ。

彼れは大阪の初舞臺に於て斯くの如く成功せるにも拘はらず、幾くもなく再び伊勢に轉じたり。然るに、當時、其處にありし、佐渡島長五郎が彼れの有望なる事を認め、頻りに江戸へ下るべきを忠告せしかば、享保三年十一月、坂東又十郎をたよりて始めて東下し、名を澤村宗十郎と改め、謂はゆる「中通り」と稱する下等の地位にて森田座へ現はれたり。當時の役は、前九年鎧競に藤原武則なりしが、評判記に「上」の部に彼れを擧げて、

奴取腰さやつし、大袖口、大脇差をさし、手桶を持ち、中間なひまこオドク、輕口さりとはいぞ。次ぎに、武道の詰開き、すこしなびら、受取りました。

といへり。これより以後の主なる役柄を左に列舉せん。

享保四年正月、森田座「縁會我」にまだらの源兵衛。十一月、同座「萬民太平記」に足利義直(曆のせりむ)

二世團十郎が雁金文七となりしは、實に此の「縁會我」の時にして、宗十郎の源兵衛は彼れに藍瓶の中へ投込まるゝ役なりしが、半身、藍になつての立廻りに頗る好評を博したり。

享保五年正月、森田座「縁會我」に大坊丸角前臺の寶憑

享保六年正月、市村座「鶴龜雜會我」に十郎翁役。十一月、同座「吉例今川狀」に源頼兼俊の和悉

此の十郎と頼兼とに愈々伎倆を認められて遂に「上上吉」に昇りき。始めて「中通り」にて江戸の舞臺へ現はれしより、僅に五年にして斯くの如く飛躍せるは異數なりき。

享保七年正月、市村座「難家壺會我」に頼朝慶せ眞田與市にて枕物狂。

享保八年正月、市村座「加増會我」に十郎。

享保九年正月、市村座「嫁入伊豆日記」に河津三郎と會我の太郎。十一月、中村座「太平阿彌陀佛」に細川勝元山下金作と風流三番叟。

享保十年正月、中村座、相伊豆日記に船經初役。三月、曾我の十郎。
 享保十一年正月、中村座、門松四天王に渡邊綱。三月、大櫻勢曾我に十郎(矣すゝの河東
 淨瑠璃)。七月、末廣名護屋に山三郎(草履打)。十一月、同座、頼通十二段に島海瀾三郎。
 享保十二年正月、市村座、探根元曾我に十郎(團十郎の五郎と島柴のせりふ)。三月、婚禮
 音羽流に清玄。四月、甲陽軍勢重に信玄。十一月、同座、八陣太平記に如六郎左衛門。
 享保十三年正月、中村座、曾我蓬萊山に十郎。十一月、同座、兜碁盤忠信に義經。
 享保十四年正月、中村座、弱惠方曾我に十郎。十一月、同座、梅曆婚禮名護屋に頼兼(傾城
 買の物語)。
 享保十五年七月、中村座、明月五人男に極印千右衛門。十一月、同座、入船姪小島に盛久
 (讀ひなびら舞)。
 享保十六年正月、中村座、傾城福引名護屋に山三郎。十一月、同座、和合一字太平記に如
 六郎左衛門と泣男佐兵衛。
 享保十七年正月、中村座、初曆商曾我に祐經と柴賣黒志。七月、大銀杏榮泉清に重忠。
 享保十八年春、中村座、馬船出入淡(錦川新四郎の)に列じ物喜兵衛。十一月、同座、柳葉旭
 源氏に頼朝。
 享保十九年正月、中村座、十八公今様曾我に京の次郎(狐の女郎買)。十一月、同座、京鹿子

雪中秋取に鎌足。

享保二十年正月、中村座、陸月連理の玉椿に金村屋おさんの母。三月、鉦樓教那錦(自作)に大岸宮内山其之助の最初。十一月、同座、殿造篠田斐に安部保成(遊行の所作)。此の時彼れは「橋上上吉」となり、團十郎の「總巻軸」たるに對して「總巻頭の地位に推されき。

元文元年正月、中村座、遊君鏡曾我に十郎、二番めに梅の山兵衛(最初)。五月、近江源氏軍功帳に玉屋新兵衛。九月、菅丞相錦額に菅丞相。十一月、市村座、伊勢源氏蓬萊樓に木村文藏。

就中、梅の由兵衛は「たび彼れによりて創められてより今に廢れず、詳くは後に言ふべし。而して、彼れは享保九年より此の年まで中村座に依然たること十三年なりしが、茲に於て市村座に轉せしを以て、彼の菅丞相の狂言に其の意を寓せ、即ち島渡りの愁嘆を演じたり。

元文二年正月、市村座、今昔備曾我に古郡新左衛門と十郎。五月、二番めに島の勘左衛門(島盡しのせりふ)。十一月、同座、源氏雲扇芝に栗田口東馬之丞、長谷部部長兵衛、曾我の太郎、伊東入道。

元文三年正月、市村座、有卦、祭万梅曾我に十郎、堀原源大、白梅茂左衛門。七月、仇討、藤流島(彦三郎)の武者之助に土佐の次郎。十一月、中村座、梅館、因幡松に給師、巨勢金岡。

元文四年正月、中村座、鎌倉新玉曾我に十郎、二番めに京の次郎、後に替同露の五郎兵衛、及び熊谷惣右衛門。十一月、同座、都築、兼鉢水に佐野源左衛門。

元文五年正月、中村座、經飾、錦曾我に近松門左衛門、實は京の次郎、國藏と曾我物部掛合。十一月、市村座、例今川狀に名護屋山三郎。

寛保元年正月、市村座、輝金入曾我に鬼王新左衛門。五月、百合若大臣、殿枕に百合若。

七月、四結、家督定に佐々木三郎。十一月、中村座、鹽治判官、故郷錦に鹽治判官。

寛保二年正月、中村座、娘曾我、凱陣八島に赤澤村の長十郎と伊東祐清。七月、女夫、星福名護屋に山三郎。十一月、同座、傾城、赤澤山に藤九郎、盛長、實は頼朝、二番めに町人七三七兵衛。

寛保三年春、中村座、門縁、常曾我に京の次郎と重忠、次ぎに梅の由兵衛。七月、天和唐合座に稻目大臣と浮瀬八郎兵衛。

此を江戸の名残として、彼れは廿六年ふりにて大阪へ上り、中村十藏座にて、十一月、二引錦、幔幕に足利頼兼、翌延享元年春、同座にて、大門口、鎧襲に油屋庄九郎、次いで、京

都、中村糸太郎座にて同じく庄九郎に扮し、冬に至りて江戸へ歸りたり。

延享元年十一月、市村座、殿造源兵十二段に盜賊今熊坂、實は伊勢の三郎。

延享二年正月、市村座、初層、曾我に油屋庄九郎、實は景清。十一月、同座、婦備、船越に

新田義貞、二番めに赤松則祐。

此の時、彼れは宗十郎の字を改めて惣十郎といひき。

延享三年正月、市村座、開、曾我物部に伊東九郎。五月、一宮、清和年代配、浦島七代配

の二十五番つき、津打治兵衛、作に安部晴明、彌平兵衛、三條信賢、浦島五郎。十月、兎櫻

考實記に小栗大部。

其の十一月、彼れは再び京都へ上り、中村糸太郎座にて、富館、鸚鵡辭に家老岩倉高右衛門、翌年六月、大矢數四十七本に、大岸宮内、是れ即ち假名手本忠臣藏の粉本となるものなり、此の事は下に言ふべし。更にこれより黒主及び關東小六を演じて、冬に至りて江戸へ歸り、同時に長十郎と改名せり。

延享四年十一月、中村座、伊豆平勢相撲錦に河津の三郎。

此の時、二世團十郎及び女方瀬川菊之丞と同座して、世に之れを三千兩の顔見せと

寛延元年正月、中村座「師銀鏡曾我」に重忠。七月、義経千木樓に橘太、忠信源九郎孤。十一月、同座、女文字平家物語に多田藏人、宇治通圓。
 寛延二年正月、中村座「男文字曾我物語」に夜番赤澤十内、實は小柴嘉門。七月、忠臣蔵に由良之助。十一月、同座、御能太平記に如六郎左衛門、諺釋師次口、實は備後の三郎。
 寛延三年正月、中村座「大師福曾我」に和田義盛と重忠、次ぎに梅の山兵衛。五月、沙流珠風折小町に大伴原主。七月、假名手本四十七字にも梅の母と山良之助。十一月、同座「若木梅平清盛」に鎌田兵衛、二番りに清盛の實憑。
 寶暦元年正月、中村座、伊豆小袖商内盛に鬼王庄司左衛門、二番りに八百屋久兵衛。七月、戀女房染分手綱に八藏の母。九月、福引名護屋に山三郎。十一月、同座、本領鉢木鏡に狩野法眼實は佐野源左衛門。
 寶暦二年正月、中村座、花街曲輪商曾我に祐經、二番りに花姿三福對に下人七兵衛。十一月、市村座、梅櫻仁曾我に小野道風。
 寶暦三年正月、市村座「春深いろは曾我」忠臣蔵と曾我に由良之助、次いで「ひらがな盛衰記」に橘四郎。七月、敵討巖流島に土佐次郎。十一月、森田座「將門故郷鎮」に將門の七役。

此の時より、彼れは更に改名して助高屋高助といひき。

寶暦四年正月、森田座「三隣傾城鑑」北條九代つゝきの狂言に北條時政と佐野源太。十一月、同座「鬼一法眼指南車」に鬼一法眼と鈴木の三郎。
 寶暦五年正月、森田座「其血規短明曾我」に胎經、河津の三郎、京の次郎、朝比奈の三郎、大友一法師、愛染明王、舞鶴屋傳三、手代七兵衛。十一月、同座「大伴原主東帶鑑」に原主、懸想文寶文藏、山賊平老波こよし。

彼れは是れを最後の藝として、翌寶暦六年正月三日、病死したりき。

宗十郎の技藝は圓十郎よりも多方面なりき。澤村家賀見に、

藝は武道、實事、濡事、位事、やつし、所作男、伊達太刀打、慈悲、又ある時は、實憑をかし、私仁方、花車方、何役にても出来ぬ云ふ事なく、

と言へるが如く、善悪、剛柔、哀歡、貴賤、老少、男女、此等あらゆるものを彼れは兼ね演せしなり。而も、其の長所の第一の謂はゆる和事若しくは實事にありし事は、既に述べたる如く、彼れが始めて東下したりし時、まだらの源兵衛又は犬坊九等の敵役を専らにせしにも拘らず、彼の曾我の十郎と頼兼之に扮してより、漸く聲名の揚れる

を以て知るべし。而して此の二つと共に屢彼れによりて演せられたる名古屋山三郎及び畠山重忠は孰れも其の和質の藝風を代表すべきものなれど、尙ほ一層の妙は彼の大岸宮内或は大星由良之助によりて發揮せられき。蓋し、赤穂義士を材とせしものは、元祿十六年、江戸中村座にて中村七三郎と宮崎傳吉とが會我狂言に、つゝり演ずること僅かに三日にして、官命により之れを撤せる事あり、ついで大阪にて寶永三年に近松が兼好法師物見車及び、碁盤太平記の淨瑠璃あり、又歌舞伎にては、寶永七年、篠塚次郎左衛門の、鬼鹿毛武藏鎧に、つゝいて、柳山小四郎、山村歌右衛門、小佐川十右衛門、山下京右衛門等、いづれも競ひて京阪の各座に之れを演じ、更に享保十八年には、並木宗輔が、忠臣金短冊の淨瑠璃出で、同二十年に至り、宗十郎が始めて彼の、鐘櫻故郷錦を自作して中村座に演じたりき。同年、更に市村座にては、津打治兵衛が作なる、忠臣いろは軍記出で、元文三年には、京都にて宇治加賀掾が、忠臣いろは夜討の淨瑠璃、寛保元年には、大阪の歌舞伎にて並木丈助が、粧武者いろは合戦あり、而して、始んと此れと同時に、江戸にては、宗十郎が再び、搦治判官故郷錦を演じたり。然れども、當時、彼れが、前年の如く、大岸宮内に扮せずして、搦治判官たりし



宗十郎の由良之助
(浄村家賀見より)

を見ても、其のころまでは、未だ得意の藝として、自も他も認めざりしならん。更に延享四年、彼れが京都にて、大矢數四十七本を出すに及び、始めて大鳴采を得たりしが、大阪に於ては、既に其の前年、角の芝居にて、東三八が作なる、大矢數四十七本あり、又是れより先き、長十郎、宗十郎の師、十藏、新四郎等も之れを演じたり。要するに、宗十郎が大矢數四十七本は、嘗て己が演せしものと、此等の諸作とを折衷せるならん。而して、宗十郎が之れを京都に演じ

舞臺の面影を寫し、殊に七段めの茶屋場は宗十郎が身振聲色までを其のまゝに擬せりといふ。忠臣藏に於ける型の變遷を記し、古今いろは評林に曰く、

此の場(七段目)は故澤村宗十郎、大岸宮内にてあてたるを、此の淨瑠璃によりて作り、故吉田冠子(父三郎)即ち宗十郎の型を以て人形を使ひしなり。さるによりて、竹本此大、夫掛合にて語りしも、昔の澤村長十郎(宗十郎)の面影にて、高海苔貫ふた禮に大アイ大、神樂打やうなもの、さも語り置きしなり。……洞庭の秋の月さまを拜み奉るの詞は故長十郎の面影をいづれも殘せり。

されば、宗十郎が藝風と役柄とは、忠臣藏によりて想像し得らるべし。〔役者大全に彼れが師長十郎と篠塚次郎左衛門と彼れとの此の役を比較して曰く、

故長十郎、名人なれども少しくそゝり過ぎ、色町の段、粹さ見えていかゞ。次郎左衛門は物頭くらゐさ見えて、而も落ち付き過ぎたり。今の長十郎(宗十郎)、証園町の段いかにし、それ程の位ありて、右二人の仕打より勝れり。

彼れは、斯くの如く歴史の且つ貴族的の人物に扮して成功せると共に、又現在の且つ平民的なる役柄に於ても成功したりき。即ち換言すれば、時代物と世話物とを

兼ねたり。後者は梅の由兵衛を以て最なる適例とす。前に述べたる如く、元文元年、彼れが中村座にて始めて此の俠客に扮せざるや、鶯と鳥とを備ひし白鬚子の片身代りなる衣裳、紫の鍔頭巾へ錠をおろし、宮川八郎左衛門(鳴見五郎四郎)を相手に男伊達、今を始めぬ旅衣、ヨイヤマカシヨ、と尻をからげ、頭巾をどれば、撥髪の髪ゆる見物ドツと褒むる聲芝居も崩るゝばかりなりきと。而して、此の鳥の模様と頭巾とは、今も尚ほ舞臺に襲用せられ、謂はゆる、宗十郎頭巾なる名詞をさへ生ずるに至りき。又元文四年、彼れが扮せし露の五郎兵衛も其の一例として見るべし。始め、京の次郎となり、友切丸を盗み、曾我兄弟へ渡し、仁田の四郎(二世七三郎)に見咎められ、兩眼を抉りぬき、露の五郎兵衛といふ盲目の太鼓持となり、曾我へ貢ぐ金の爲め、ほうとう丸を訴人して五郎(萩野伊三郎)に打擲され、愁嘆すといふ筋にして、後の評判記には之れを彼れが一生の當り狂言なりとさへいへり。

以上は立役としての彼れが藝なり。更に實惡としては、彼の油屋庄九郎及び平清盛など其の標本なるべし。庄九郎の役は、前に記せし如く、京阪にても、江戸にても演せしが、茲には、延享元年、大阪にて出だし、大門口鐘襲について其の概略をい

美濃國稻葉山の城主齋藤庄九郎なれど、柴田の家臣民部太郎と名を變へ、軍用金を集むる爲め色々の術をなし、又二番めに、浪人して万能藝指南をなすところ、大當り、四番めに、城主と云ふ、麗座頭のお資、太鼓持のしうち、次に、非人の繩付を預りしを、味方につけ、月代を測つてやまをかし、寄せ太鼓の音を聞きて、主人の城外山野を助けんと思ひ、捕人四方を取巻くま聞き、油桶より、駿東、長巻の下を取り出し、改めて、姫を表へ落とし、油把杓を持ちて、二階より砂の上へ、背見し垂井の水は、變らねど我が姿は、表へ降り、と、落行く先きを教ふるうち、二階は、セリ上げとなり、北條眞九郎守藤に出會ひ、頭巾を取り、糸髪になりて、齋藤山城入道龍興と名のり、大内義弘に召出されし油賣の物語ありて、荒次郎、綿川千蔵を殺し、重ねての見参、と十蔵と立別る。

次に、清盛は寛延三年に演せしものなり。

法、鉢の姿にて、佛御前に會ひて、蓋かしがり、後生心が、出たさいふ、折ふし、昔の悪心起り、佛御前に叱られて、思止まり、後、常盤御前が佛御前の下女おせきとなりて、来るを見て、腹中より常盤の繪姿を出だし、見合せて、惚るし、しうち、常盤が笑はぬを、氣の毒がりて、笑はさんとの落咄し、工藤金石が、意見するを、打擲し、常盤悦ぶゆゑ、後生をやめて、常盤

が、間につき、悪心を立てまほすと、ころ、殿の村玉の姿似を其のまゝ。それより、大佛樓藏に火をつかませ、敷使の陰謀をなし、馬の尾の鼠の陰謀を言付け、跡にて、近江の小森大鬼王庄左衛門が、名乗りを聞き、長田太郎が、首を斬り、此の度の敵役は、津打治兵衛(狂言作者といふ源氏方のみせもの)が、さす事とのせりふ。

此れに依りて、彼れが實惡の、山中平九郎もしくは、中山新九郎と異りて、一種、其の間に和らかみの分子ありし事を認め得べし。尙ほ、親仁方にては、實盛、白太夫、權四郎等あり、花車方にては、おかるの母、及び小よし等あり。而して、彼れは、武門より出でしだけに、能樂にも通せしゆゑに、や、盛久の如き、通圓の如き、能が、りのものを演せし事も、其の技藝の方面を多ならしめたる一つの理由ならん。只所作事のみは、彼れが短所なりき。享保十九年、彼の、今様會、我の大詰にて、菊之丞と共に、淺間嶽の淨瑠璃を演せし時、

淨瑠璃所作は、不得手ゆゑ、如何と見物し、評せしに、案に相違し、至つて大やうにて、ユツタリさせし所作の相手、却て大當り、

と、中古戲場説に記され、又、享保十一年、曾我の十郎にて演せし、疾するの淨瑠璃は、

長きものにて、所作もさのみなく、虎が十郎に突をすえてやるまでの事なり、
き、と後者昔物語にいへり。これ當時、所作事は女方の専務なりしにもよるべけれ
ど、宗十郎が此の種の技藝に長せざりしを見るべし。彼れ自身も、

拍子のよき役者はわるし。又拍子のなきは役にたらず。程拍子といふなり。拍子
よきは豆蔵なり、

といへり。されば、彼れは全く地藝を以て専門となし、なりけり。
彼れが競争者は實に二世團十郎なりき。而して、此の二人は享保以後に於ける江
戸の劇場に抽で、相對峙し、且つ其の藝風の互ひに反對せるは、猶ほ元祿時代に於
ける初世團十郎と七三郎との如くなりしなり。もし、二世團十郎を理想派なりと
せば、宗十郎は寫實派なりといふべく、彼れを技巧主義なりとせば、此れは自然主義
とも號くべかりき。例へば宗十郎が辯舌音吐のすぐれたりしは、尙ほ團十郎と同
じかりしも、彼れはツラ子又は口上によく、此れは事むづかしき言ひほどきに長じ
たりといひ、而して、宗十郎の白廻しは、不斷と變らざりしといひ、又彼の將門の七役
に、

さのみ恐ろしき顔にてもなく、すこし薄着き顔色、目の縁へ些し薄脂のあしちがば、
りなれども、實の將門も斯くやと思ふばかりなりし、

といふ、即ち、彼れは團十郎の如く化粧に甚だしき技巧を用ひず、又其の白をつとめ
て俗談平話體にいひたるなり。加之、其の動作に於ても、不自然誇大を忌みたりし
は、團十郎が彼の兩手にて家をさし上げし事を非難せるにても知らる。されば、公
平に之れを評せば、彼れの技藝は團十郎よりも近世的なるに於て優り、又多方面な
るに於て優りしなり。唯團十郎は其の江戸に土着せる人なりしと、且つ門閥の餘
光によりて俗衆より無上の愛顧を受けなれば、宗十郎の世間的地位は常に彼れ
が下にありたりき。役者論語魁に評判記に於ける、彼等が位付を比較して曰く、

元文の始め、極上上吉、市川海老蔵、極上上吉、澤村宗十郎、ならびしより、延享の始めま
で同位なりしが、延享三年、宗十郎、京都へ上り、大當りにて、極上上吉、二の替り、大々當り
にて無類となる。此の時、江戸にて海老蔵は、やはり極上上吉なりしが、宗十郎、翌年、長
十郎と改名して、江戸へ歸り、海老蔵と十六年ぶりの出會にて、古今の大當りなれども、
海老蔵は、江戸の名物ゆゑ、長十郎を無類とは罷されず、兩人引合にして、大極上上吉、小

番に、根生、海老藏、無類長十郎と記し、二の替り長十郎、又々大出来、大當りにて、此の時、無類なる、海老藏は大極上上吉なり。兩人同座のうち、海老藏は不當りなれども、江戸中が呑込んで、上になてれば、合點せぬ妙なる大立者ゆゑ、巻頭なれども、長十郎は無類とせしこと江戸中の風におほむ仕方の評判にて、翌年も同座にての顔見せ、海老藏大當りゆゑ、長十郎の無類をさりて海老藏につけ、無類の位、兩人にては有類といふものなれば、長十郎をば至極上上吉と記したり。然れども、兩人ながら無類の位に相違なければ、片落になるゆゑ、寶暦元年の顔見せより、海老藏の無類をさりて新たに大至極上上吉とし、長十郎を無極上上吉と記せり。又、位付のうちへ名人上手と書き入れし事もあり。其の後、長十郎は問もなく故人となりしゆゑ、又々海老藏を無類と書きのせたり。

此の文以て團十郎と宗十郎との眞價を知るべし。

宗十郎は斯くの如く團十郎と相驅逐したりしに拘はらず、彼等の交情の互に暖かなりしは藝園の美譚として誇るに足る。延享三年、彼の、大佛供養を演せし時、

承清に柏庭、重忠に駒子にて、駕籠かきのしうち、兩人、七兵衛、忠兵衛にて、娘方を駕籠に乗せ、對の袖なし羽織、淺黄頭巾、對の衣裳にて、淺間がりのなかしみ、坊さま、山路被れ

た表、ニ、ニ、ニ、四、イ、ヨ、く、く、と、續ぐしうち、其のつぎの幕、頼朝、大佛供養の場、景清が伯父、大目坊に三浦右衛門、景清を訴人せんと、駈出すを一刀に斬殺し、其の衣裳をすぐに舞臺にてゆるく、と替換へ、難刀か、いこみ、頭巾をかぶり、靜かに櫓がりの切幕へ行くと、後より駒子、重忠にて、烏帽子、素袍のかたく、なぬき、中巻を持ち、景清までと聲をかける。

といふ筋なりしが、初日の前夜、稽古せし時、五六たび仕直しても、此の呼びごめの呼吸合はざりしゆゑ、明日の舞臺にて兎も角もせんと、其日は別れたり。さて、翌日、其の條になり、景清は花道半ばまで行けど、後ろより呼止めざるゆゑ、心憤りて、足早に切幕の際まで行きし時、重忠、大音にて聲をかけしゆゑ、驚きて振顧り、其の腕みし勢、眞に逼れりとして、大喝采を得たりといふ。而して、團十郎は自ら語りて曰く、

一とせ、作者、春狂言に重忠になれといふ、重忠は三が津に駒子より外なし。われら味

に合はぬ事は人より先きへ知るものにて、合はぬ彼は出かして、しやくに立ぬ事なり。團十郎が斯くの如く彼れを推重せると共に、彼れは又團十郎の妙を頻りにたへへき。桑也といふ俳諧師彼れに問ひて、貴様藝は兎角柏庭よりは面白しと申す人多

し、何故、柏庭は貴様より上にて候や、と尋ねければ、

されば、武士、町人、百姓、宗匠、坊主、老人、若人、傾城、女房、娘、残らずの氣に入るやうに藝を致すこと、兜も居り候へども、私の藝は子供へは通り申さず。これゆゑ、柏庭は先きへ立ち申候。

といへり。謂はゆる、私の藝は子供に通じ申さずとは、又彼れが抱負を洩らせるならん。宗十郎は其の技藝の多方面なりしが如く、頗る多才多能なりき。彼れは茶に通じ、書を能くし、俳諧を詠じ、殊に狂言を自作して、彼の「鐘櫻故郷錦」など諸篇あり。又、晩年には作者として其の助高屋高助の名を署せり。もし、作者の興へたる脚本に條理不明なるところあれば、必ず注意して之を訂正せしめたるのみならず、下流の俳優まで、それ〴〵役を興ふるやうにせしゆゑ、一座盡く悦服せりといふ。自ら曰く、

作者より新狂言の相模ある時は、我が役割のみにかゝはらず、一鉢の筋合趣向をとく。と聞辨へ、當時のはやり、役者に似合はしき役が付き、世間の受取りも然るべしと、思ふ。狂言なれば、我が役廻りは必に落ちずとも、役不足をせず、見物によきさうなれば、其れ

に若くなしと思ひ狂言を納むるなり。

其の他彼れが説ける技藝の秘訣多し。

役者は嫌ひは一人もなし、狂言する事は皆すきなり。嫌ひなれば、役者になれずされば、皆上手になれさうなものなり。

へたさ言はるれば、最早上手の道、旅山の始めなり。へたさも上手とも始めは有はれぬものなり。

師匠は釣鐘の如し、弟子は撞木なり。小さき撞木にてはホンの音出でず、ホン撞木ほどに手練してつけば、山より里まで時を知らせるなり。

手木に取るには、我れよりわるき役者のうちにて上手なるものゝ真似するがよし。真似さし見えず、器量も其れよりすぐれなば、よき事に見えるなり。前を知らふにも、目印は下なれらひ、矢は的に中るなり。

中通りのうち、好き役ついで見物にほめられんとするは了簡速なり。無理に當りをさりては相手の邪覺になり、いやがるゝなり。先づ相手の立者の氣に入るやうにすれば、其の立者いつでも相手にして、役は段々よくなり、見物にも褒めらるゝなり。

舞臺へ始めて出る時、切落しにて褒める見物をひさり相手にて、一日狂言をすれば、よく出来るものなり。大勢は相手にならぬものなり。

此等彼れが實驗談として面白し。而して二世團十郎が詳しく化粧法を説けるが如く、彼れは頻りに動作及び表情について云々せり。是れ亦兩者が技藝觀の相違として趣味深からずや。彼れは曰く、

侍の役にて腹を立つと座はるがよし。口論の時刀へ手をかけぬがよし、かけては弱し。

町人は腹を立つと起つがよし。喧嘩の時は脇差をひれくる。そんならさいふ白は、町人より外なき言葉なり。

傾城置の時は提灯持より先きへ行く心にて歩くがよし、女郎に現を抜かれたるところなり。

可愛き者は眼をみれば可愛く見え惜き者は鼻を見れば憎う見えるなり。

生酔は壺を見て物言へばよし。生酔と氣遣は分れども、氣遣と醒は分かりかねるなり。

醒は首の氣持にて、耳を眼にすれば醒と見えるなり。

座頭は、ゆきだけ、裾の開かぬやうに心がけて出入すれば座頭と見えるなり。

吃はサシメソ、カキケケ、此の文字ばかり吃るなり。外の字を吃れば、せりふ聞こ

えかねるものなり。物を取出す時、先づ膝を立て、拍子をとるものなり。

敵は腰をかためて、よく見え、片膝を踏延ばしたる方へ力を入れ、片足を力なく歩けば、眞の敵に見ゆるなり。敵は隠す氣持がよし。

武士の老人は膝の折れぬやうにすれば老人なり。又、町人の親仁は腰をまげておれば親仁なり。

女方といふは先づ女の眞似をするが役なり。物騒なる處へ夜道せば腰の物より用心は程の新らしきのをするが第一、刺がれてもキレイに見ゆるなり。

頭へるには、片足にて立ち、片足爪立つれば自由に頭へるなり。

畜生の足は爪立ちであるがよし。脊の高い人は爪立ちては鈍に見えるゆゑ、踵にてあるきても同じやうに見えるなり。

「ムシ」刺める白も、重忠は謀ごとにて、胎經は威勢にてとめる。これにて別かるなり。曾我十郎の役に傳あり。敵討までは刀に手をかけぬものにて、抜くにも差添ばかり抜くものなり。鎌倉の大名には、何事にて勝たぬ氣持にて、あやまること第一、生酔のつきあひにでするなり。敵にあひし時は一分でもあやまる心なく、随分強くすべき事なり。

彼れは又團十郎が俳優は贅澤なれといへるに反して、質素寡欲を勧めたり。曰く、

立者にならば無儀にて手に下駄をさげあるがよし。心安く見ゆれば人が普羅を知らせるなり。又、着類なども寒暑一通りあれば済むものなり。衣裳は随分着たきものなり。騙りては芝居立行きかゝるものなり。長者になりて金持の名を残すが如く、上手の名を残すがよし、思案あるべき事なり。不斬若よりは衣裳を巻、金よりは藝を持つがよし。

斯くの如く、團十郎と性行の相違せるは、頓て舞臺の技藝にも現はれたり。傳言ふ、宗十郎の宅へ團十郎及び坂東彦三郎が集まりて、秋狂言の相談をなし、二階のものはしに涼み居たりしに、折ふし夕立の雲起り、雷連りに鳴動せしかば、團十郎は母が雷嫌ひなればとて急ぎ歸りけり。雷の愈烈しきゆゑ、彦三郎は法華經の自我偈を讀み、宗十郎ばかりは夕立のけしき心涼し、と召使を呼び、コレコレぶつかけ蕎麥を百が跳べて來いと命せしとぞ。これ、三人の特質をそれ々に代表せる佳話なりといふべし。

宗十郎に梯子蕎麥といふ事あり。梯子の敷ほど蕎麥を列べ置き、一段踏掛けるより最頂まで登るうち、七階にても九階にても落ちず食ひしまひたりといふ。又、彼れが

舞臺にての辭は、せりふを顔へて段々に強く、跡へ聲を張つていひ、且つ、何時も、口をすぼめ、兩手を左右へ振げて左の足を揚ぐる身振をなせり。

宗十郎は謹儉、其の身を持せりと雖も、義侠の爲めには費を惜まざりき。享保十八年十月、中村座に普請あり、三日より十八日まで晝夜工事を急ぎしも、十一月興行の間にあふべくもなかりしを、彼れは見て、急に千人の大工を集め、首尾能く十一月一日に開場する事を得せしめたり。又、彼れは頗る故舊に敦かりき。佐渡島長五郎が彼れを勵まして江戸へ下らしめし事は、已に前に述べたりしが、後年彼れが大立者となりて長五郎と一座せし時、其の失意時代の舊事を恥づる色なく人前にて高らかに語り、且つ懇ろに長五郎の厚意を謝せしこと、佐渡島日記に記され、

其の時、思ふに名を揚げる人は、丁節格別の事なり。多くの人、今よき身分になれば、禮を失ふものなるに、大勢のうちにて昔をあらはす人多からず、

と、大いに、宗十郎を褒揚せり。

彼れには實子なかりしにや、門人澤村春五郎を養ひ、其の長十郎と改名せる寛保四年に舊名たる惣十郎を之れに譲りしが、翌年に至りて死せしかば、更に門人四郎五

郎を養ひ之れを二世宗十郎とす。其の他門下生のうちにては、澤村淀五郎最も顯はれき。

五九〇

第六章 其の他の江戸に於ける立役

四天王と獨武者——市川團藏——大谷廣次——セリ出しと引抜き——

其の當り藝——坂東彦三郎——敵討殿流島——大森彦七——由良之助——

——彼れが粗所と長所——實事の秘訣——八世市村羽左衛門——津打——

門三郎——二世七三郎——彼れが藝風——

團十郎、宗十郎のほか、大谷廣次及び坂東彦三郎あり。此の四人を當時の「四天王」といひ、又此等よりは稍先輩たりしものに市川團藏あり。これを四天王に對して「獨武者」といひき。

市川團藏、市川元文五は、俳優松本四郎三郎の子にして、元祿八年、初世團十郎の門に入りて市川團之助といひ、更に元祿十一年十一月、中村座にて團藏と改名し、若衆方たりしが、寶永五年十一月、森田座にて始めて立役となり、最も荒事と敵役とを得意とせり。正徳五年十一月、森田座にて、早咲女島原に荒獅子男之助たりしとき、先師の子、二世團十郎と隙を生じ、是れより師家と絶縁して、市川氏の紋章たる三



(り)「全大顔似」[哲]の藏圓

飛に扮せり、而して元文五年春中村座の「姫飾錦會我」に俠客日の出の五郎八實は景清にて、宗十郎と會我物語の掛合を演ぜしうち病死したりき。彼れは荒事、敵役のほか又實事にも妙を得。

悲嘆が得手ゆゑ主人に諫言の仕うちなど、狂言と思はれず。一體古風にて堅き藝ゆ

み格別の大當りといふ事はなけれども、藝風大やうにして、人品にロレあり、些しもこせつがす

して根元江戸風の俳優なりきといふ。彼れに團三郎といふ實子あり、彼れが死後、直ちに二世團藏となりしが、幾くもなく其の年に死せるを以て、門人二世團三郎三世團藏たり。後半期に名優たりき。

大谷廣次(千町元祿十二—延享四)は大谷廣右衛門の實子なり。元祿十四年冬より森田座へ子役として現はれ、寶永七年冬山村座にて角前髪の敵役(公卿惡)に扮し、後正徳三年十一月、中村座にて始めて實事をつとめ、篠塚伊賀守に名を揚げ、是れより次第に累進したり。享保八年春同座にて二世團十郎の五郎に朝比奈となり、帯引のしうちに大當りをとり、其の冬、大阪の風座へ上り、更に京都に轉じて、享保十二年冬にいたり、江戸へ歸り、中村座の「八陣太平記」に大森彦七に扮し、團十郎の大塔宮と卒塔婆引きの荒事を演じたり。江戸の劇場に「セリ出し」といふこの行はれしは此れを嚆矢とす。又享保十六年春、中村座の「傾城福引名護屋」に由井が濱の忠雪に扮せし時、傾城葛城瀬川菊之丞と兄弟の名乗りをする處にて、世話狂言の姿より時代の

花やかなる衣裳に變る仕打竹田の機關人形より意匠をとり立廻りのうち肌を脱げば、忽ち服装の變はるやうにしつらひたり。蓋し今の引拔きなるもの、始めにして想ふに、彼れが京阪の舞臺より輸入せるならん。元文二年冬再び京都へ赴き、寛保元年市村座へ歸りしが、數年ならずして死せり。彼れは大兵肥満なりしのみならず、



(りよ「全大顔似」)「丸王松」の次廣

藝風大やうにして、しうち大きく舞臺一ぱいなりきといふ。其の當り戲には、東金茂右衛門、百姓十作、黒船忠右衛門、由井が濱忠雪、大森彦七、鬼王などあり、而して所作は彼れが得意とする所にあらざりき。彼れが語れる藝談に曰く、

藝は日向でする心にて習ふがよし。日陰でするやうではあし。狂言の仕打一日出ても、よろしき役といふは、煙艸一服のむうちを強めらるゝなり。役の多きは出来さぬものにて、よき事まで手問どるは皆あしきなり。役者は、ふだん羽織をきれば年より見えゆるゆゑ、大島の小袖、結構なるさげ物などよし。些く氣おひに見ゆるがよし。下手のうちには侮らるゝなり。役者に智ふのあるは殊の外わるし。智ふなきが第一。役者は太夫元にてても、費への詮議はわるし。費の詮議をすれば、役者が費なり。彼れには女子數人あり。其の一は萩野伊三郎の妻となり、後更に尾上菊五郎へ嫁したり。又、二世廣次の名は門人にして、且つ養子たりし大谷鬼次によりて繼がれき。

廣次が身振は、たがみ手にして、右の手を中ひらきに擴げる癖あり。又、白をいふに、舌にて吸取りていへりといふ。

坂東彦三郎(新水)寶曆元が篠塚次郎左衛門の甥たりし事は前にいへり。一説には、城州伏見なる武士の子にして、次郎左衛門は、只其の師なりともいふ。幼名を篠塚菊松と稱し、寶永四年冬、次郎左衛門が江戸より歸阪せし時、己が子庄松と共に始

めて彼れを舞臺へ紹介せり。同五年の冬より坂東彦三郎と改名し、正徳元年冬始
めて京都へ上り、龜屋座に現はれしが、同四年冬、大阪の嵐三十郎座へ下り、翌五年春、
大經師の茂兵衛に扮して大當りをとり、此の茂兵衛は實に彼れが出世藝なりき。
次いで享保元年冬、再び上京して布袋屋座へ出で、是れより大かた京都に在りしが、
享保十四年冬、江戸の市村座へ下り、斯くて、元文元年より一年毎に大阪と江戸とを
去來し、就中、同三年七月、市村座にて、敵討、巖流島の日本武者之助に扮し、大喝采を博
しき。是れ彦三郎が一代の當り藝なれば、左に梗概を記さん。

一番め、彦三郎は志田の左衛門にて、巖流二世幸四郎之れを殺し、提灯に我が名を書き
て立退く。二番め、月本武者之助にて、巖流と途中に出會ひ、御前試合に勝負を譲りくれ
よと頼まる。次ぎに巖流をねらふ女兄弟母、共にかくまひし處へ、巖流、上使に成り、我
が手練を高ぶり、枕を投げつけるを扇にて見事に打返し、更に切つてかゝる拔又を打
落し、相手を取つて伏す、其の手練の早さ瞬く間もなきほど。大切は敵討の後見
を爲すといふ筋なりき。元文五年は大阪にて更に之れを演じ、又京都にても之れ
を繰返しき。而して、此の後の彼れが當り藝は、延享二年十一月、市村座にて芳澤あ

やめが女楠の時につとめし、大森彦七なりき。

舞臺に震動電雷するに、切幕の内より大音にて、推參なり正成、此の盛長が催す猿樂に、



坂東彦三郎の「我嘗十郎」(似大顔全)

障羅をなさんなど片腹痛し、か
なほぬ事、及ばぬ事、卑怯な、透け
る、引かへして勝負をせむ、
さ呼はり、立烏帽子、素袍の、刃の
ぎ、片手に拔又、片手に小鼓を持
ちて、空中をにらみての出は實
に空に相手のあるやうに思は
れて、見物皆々屋根を見上げた
り。二番めも彦七にて、菊水あ
やめの女楠を相手の實事武道、

にして、此の時、主人公たりしあやめは不當りなりしも、彦三郎の好評なりし爲め大
入をとりきといふ。次いで、寛延二年五月、江戸三座競争の「忠臣藏」に、彼れは市村座

に於て由良之助をつとめたり。當時中村座にては宗十郎が之れを演じたればにや、彼れは一たび辭退せしも、興行主に強ひられて漸く之れを諾したりといふ。而して四段目の扮装は、

五九八

上下大小爽やかに、高股だちをさり、三里紙におて、後ろに馬糞をさし、樂屋にしらせを待てるを、如何といひし人もありたれど、先づ受取り候からは任せよ、とて頓て出で花道、切幕を出づるより、鞭をすて、股だちを引下げ、馬より飛下りすぐに駈付けし體にて、付舞臺の口まで走行き、大小を抜捨て、遙か下つて平伏

し、又主君の遺言を聞くところ、無言にて只顔を打守り、短刀を納むる時、其の血を手に浸して甜めたり。而して七段めはあまりに堅く見えて不評なりきといふ。要するに、彼れが短所と長所とは共に其の質實に過ぐるにありたり。役者大全く月旦して曰く、

小がらなれども頼あり。宗老にしては天晴にて、太刀打、立入、落付いた事、此上に和みがあり、又この上はあるまじ。微塵もこじつけて當てられし事なし。と。「中古戯場説」にも、

全體場當りを好まの性、大器量にて、こせつかつかぬ藝風なり。武道太刀打は他に似せ手のなき名人なり。

といへり。曾て三世坂田藤十郎が實事の秘訣を問ひたるに、彼れは答へて曰く、御自分の藝、實事師の家老様さいふ心にて出納とは見ゆれども、一體が我れ我れより器量過ぎ、こせつかつかぬなり。それゆゑ、太平記ならば、恩地左近にはよけれども、楠は相懸せず、曾我なれば本田の次郎には打つてつけなれども、重忠にはならず、近江小藤太はよけれども、結經には及ばず。されば作者も役をつけず。さりとは惜き事なり、工夫あれ。

藤十郎は是れより發憤して苦心せしが、遂に實事は己が天品にあちざるを悟りしにや、實惡に轉じて成功したり。而して此の言、以て彦三郎が藝に謂はゆる幅あることの偶然ならざるを知るべし。彼れ又曰く、

侍の役の時は樂屋へ入りても、脇差を離さぬ事なり。殿にほれ、遅く出でし時、うらたへても、腰のあかぬが武士なり。又若き時、出かせし役は、戦も同じ事にて、年よりてまで永らへ居れば、若き時の手柄末代までも忘れぬものにて、後の人話し傳へても、手柄

なり。兎角のたれ死しても藝をする心にて下手も上手も役者はやめられぬものなり。役者の身上よくなるも、金より先づ衣裳が溜まればよくなるなり。

と。ある時、團十郎の宅へ、宗十郎、廣次及び彼れが集りて、雑談の序に、宗十郎曰く、すべて立者となりて、あまりにこせくとして狂言毎に當らんと心がくれば程なく老込み、評判薄くなるものなり、一狂言大いに當れば三四年も其れにて持つべし、そのうち又工夫して重ねての當りを心懸けるがよからん、といひしを團十郎聞きて、そこが立者の極意なり、さりながら、大方は、一つ當ると、最早上手形氣になり氣が緩みたがる、ゆるめば一生朽果つると知るべし、又藝の風にもよるべし、足下薪水彦三郎我れわれなどは其の心得にて随分よし、十町廣次などはすぐれて大場なる藝ゆゑ、些し斟酌もあるべきか、といひしに十町我れとても是れまで當り藝は六七度ならでなし、それに、今以て人が上手と噂するを思へば、大幅の藝なりとて同じからんといふ。彦三郎聞きて、

いかに、我等も若年の昔、大經師の茂兵衛が當りしが出世の始なり。今思へば耻かしく、よくは、あの如き藝をしたるよき、我ながら思ふなり。其の後、嚴流島は大坂にて

藤川中三郎を相手にし、京都さもに兩度まで當りし。尤も、京都にては些し工夫したれど、第一は中三郎が極情ていゆゑに、當りしなり。只今、駒子の言はるゝ如く、其の當りにて、四年ほど何も當られど、而も褒められたりしなり

といへりと。一代の名優が膝を交へて、技藝を談せし熱心と、且つ彦三郎が眞率なる口吻とは、殆ど此の逸話のうちに躍動せり。

二世彦三郎の名は彼れが實子菊松によりて繼がれしが、早世せるを以て顯はれず、而して、三世彦三郎は、實に文化文政の劇壇に雄視せる半柳庵樂善たりき。樂善の事は後にいふべし。

彦三郎の身振の癖は、刀にツリをうち、左の手に持ちて突き出し、右の手を巻きて小脇にしつゝ、舞勢をするにありきといふ。

八世市村羽左衛門(何江元禄十二—寶暦十三)も亦此等の四天王につげる名優なりき。彼れは實に市村座第八世の太夫元にして且つ俳優を兼ねたる者なり。是れより先き、四世の太夫元たりし宇左衛門は俳優として頗る聲名ありしが、延寶中剃髮して佛門に歸し、(第一編第八章を看よ。)次いで、五世、六世、七世、孰れも幼にして死せし

かは、未だ俳優として舞臺に現はれず、且つ太夫元といふも元より其の名ありて其の實なかりしに、今や八世に至りて大に俳優として其の伎倆を揮ひたりしなり。彼れは七世字左衛門の實弟にして、且つ市村家の親戚たる、崩屋善兵衛の三男たり。元祿十一年七世が僅かに十八歳にて死せるや、其の後繼なきを以て、太夫元の名義の暫く中絶したりしが、元祿十六年に至り、彼れは五歳にして入りて市村座の太夫元となり、名を竹之丞といひき。而して寶永六年、十一歳にして始めて俳優として舞臺に現はれ、次いで元文二年冬、字左衛門と改名せしが、寶延元年、其の「字」の字を更めて羽左衛門といひ、太夫元をつとむること六十年、又俳優たること五十五年なりき。彼れが技藝の長所は其の多方面なるにありたり。寶永八年の「役者初火桶」に彼れを評して曰く、

若衆方より女方へ役がへ、女方より立役さかばり、敵役より實事師になり、それく其の身の勝手打を見たり、其の役者々々を指南して出世させる事、この何江に至極せり。兼ねるは何江より始まる、

と。即ち、彼れは、若衆方、若女方、實事師、敵役等のすべてを兼ねたるなり。

二世團十郎の「老の樂」に、彼れが容姿にして人を憐まざるを罵れる條あり。其の人格に於ては、缺點ありしならん。

津打門三郎(松香、元祿十六—寶曆三)は幼時に大谷六藏といひ、狂言作者津打治兵衛に養はれて始めて津打門三郎と號したり。享保十九年、市村座に現はれ、立役、荒事師にて僅かに「上」たりしが、元文三年冬、大阪へ上り、ついで、寛保二年冬、京都へ赴き、斯くの如く、京阪に往來してより次第に地位を高め、終に「上上吉」に至りしなり。寛延二年より暫く實悪に轉じ、又寶曆元年に津山友藏と改名したり。「役者大全」に曰は

門三郎男はよし押立は天晴三が津を縫ひまはりし糸の如く、京大阪からも引つぱりて欲しいが、

と。されば、彼れは最も風采に於いて勝れしと見ゆ。

二世中村七三郎(少長、元祿十六—安永三)は門三郎と同年に生れたれど、長壽なりしをもて此の期の後半たる四世團十郎時代に跨りて榮えたりき。彼れは初世七三郎が妻の甥(或は弟とも)たる明石清三郎の實子にして、正徳元年正月、中村座へ初めて

現はれてより累進し、明和七年冬、七三郎の名を孫七之助に譲り、自ら俳名の少長を藝名となし、安永二年九月、中村座にて菅丞相を其の一生一代として舞臺を退きしが、翌年九月三日、終に歿しき。彼れが最も得意なる藝は曾我の十郎にして、享保廿一年春、初めて之れに扮せるより、一代に十郎をつとむること實に二十六度、此の役の和事となれるは彼れに始まれり。「役者大全」に評して曰はく、

今、江戸色事師の第一、曾我の十郎役の第一なり。惣じて、仕打にカミのあるはあしき事なれども、此の人ばかりには少しカミが進ぜたいまで。女方の仕打に扮れぬ工夫さへ致されなば、養父に劣らぬ名をさるべし。

と。されば彼れが、蕨風は算る柔らかなみに過ぎたりしと想はる。明和八年出版の「役者綱目」には曰はく、

養父の藝を受つぎて和事の上手、殊に十郎役の一の筆なりしが、寶曆九卯の春までつとめ、今は若手へ譲り、實事はかり。年功ほどあつて、氣持又は衣裳の好みなど格別なり。位事よく、中にも菅原傳授の菅丞相は他に比するものなし。

と。此は彼れが晩年に於ける月旦なり。要するに、彼れは和事に能く、又品格の高

かりしなり。中村秀鶴の「雪月花寐物語」に彼れが逸話を記して、

これまで名言を申し候こゝ段々身にこたへ申し候。其のうち、二代中村七三郎殿、病氣のいまはの時に、悴三代め七三郎幼少なり、二階に居りて側へ寄せ申す候。我れ六十路を越して候なり、髪形も變り候なり、家は色事師なり、我が有様を見れば、幼少にも愛想つき申すべく候なり。されば、藝道はげみ候には大番にて候なり。我れ幾くなり候ても、必ず後をば見すべからずと、愛憐を藝道にかへて合ひ給はず、みまかり給ふ。誠に其の職に至りては跡々こそ大事なれ、名言と存じ候、

といへり。七三郎が平生の用意を知るべし。彼れは又趨支の門に入りて丹青を學び、「蝶風の繪をよくせり。彼れが妻は六世中村勘三郎の女にしておらんといひ、夫婦の間に生れたるが即ち三世七三郎にして、後に九世勘三郎となり、中村座の太夫元たり、而しておらんの弟は二世傳九郎たりしのみならず、七三郎の實弟も狂言作者として中村清三郎といへり。

以上は二世團十郎及び宗十郎と同時代に現はれたる江戸の主なる立役なり、而して尙ほ彼れ等と後れて、四世團十郎、二世廣次及び中村助五郎の出づるあり、此の三

人は同時代の後半期を代表せるものともいふべければ、次に章を更めて説かん。

六〇六

第七章 四世團十郎

第二の四天王——彼れが素性につきての兩説——主なる演藝——風折多き團歴——晩成せる大器——二世團十郎との比較——彼れが長所の第一——京清——「修行譚」——彼れが妻

寶曆時代の前半期に於ける江戸の劇壇が、謂はゆる四天王たる二世團十郎及び宗十郎等によりて代表せられし如く、又、その後半期は、四世團十郎、萩野伊三郎、二世廣次及び中村助五郎等によりて代表せられたり。されば、之れを第二の四天王といへり。此のうち、伊三郎は其の出身の京阪にありて、江戸に於ける生活の久しからざりしを以て、已に前章に略叙したれば、茲に之れを省き、他の三人を順次にいはん。四世團十郎、金・穀・正・徳・元——安永・セは其の素性につきて、兩説あり。狂言作者津打治兵衛が子なりといふもの、其の一なり、又、二世團十郎が堺町の芝居茶屋たる袋屋源七の女に通じて之れを生みたるを、市川家の親戚たりし和泉屋勘十郎が己れの二男として養ひたりといふもの、其の二なり。想ふに、第一説は彼の治兵衛の養子たり

し津打門三郎が四世團十郎と義兄弟の縁を結びしより訛傳せるものか。余は寧ろ後の落胤説を探らんとす。彼れが幼時より松本幸四郎の養子となりて松本七藏といひ、享保四年が其の初舞臺なりといふ事だけは諸書のいふところ大かた一致せり。先づ例によりて彼れが演せし主なるものを年表的に左に示さん。

享保四年十一月、森田座、傾城紫手綱に分身荒阿。(兼子折の中より出で、鎌鼬の荒事初舞臺。)

享保九年秋、中村座、入船隅田川に松若の妹花侍。

此の娘役を最初として、是れより彼れは女方を専らにしたりき。

享保十六年春、中村座、けいせい福引曾我に傾城葛城の妹花鏡。

蓋し、此の前年、養父幸四郎が死せるを以て、其の追善に之れを演じ、市川升五郎の不破伴作と出會ふ條ありしが、當時既に彼れは二世團十郎の實子にして升五郎と同胞なりといふ風聞頻りなりきといふ。以て落胤説の益根據あるを知るべし。

享保十九年正月、市村座、七草若湯曾我に頼朝。

此れ、彼れが元服して立役となれる初めにして、大庭と梶原とが詮義を免れん爲め

女妾にて銀杏の洞へ隠れ、洞の内にて元服し、初めて男の姿を現はすといふ筋なり。

享保二十年五月、市村座、杜若十二段に參州風來寺の元龍實は今考。

こは、淨瑠璃姫籠中歌川に愛慕し、姫の指を食切るといふ筋にして、即ち謂はゆる色悪の役柄なりしが、非常なる大當りなりきといふ。而して其の十一月、二世團十郎が海老藏と改名して、其の子升五郎を三世團十郎となし、と同時に彼れも亦養父の名をつぎて初めて二世幸四郎と號し、根元七小町に釣殿の后に扮したり。

元文元年十一月、河原崎座、神風太平記に長崎次郎。

元文三年春、市村座、有井紫菀梅曾我に鬼王。秋、敵時巖流島に佐々木岸柳。十一月、同座、貸船太平記に足利直義。

此の巖流島は彦三郎が出世藝なりしと共に、又、彼れが出世藝なりき。それまで、彼れが二年の給金は三百兩なりしが、其の次の顔見せより五百兩に上されき。

元文四年春、市村座、初誓通曾我に工藤。十一月、同座、彌太太平記に大塔宮。

元文五年二月、市村座、姿觀隅田川に久米平内。六月、阿彌陀池妹背鏡に矢田の藤平。

十一月、同座、吉例今川狀に仁木彈正。
 寛保元年春、市村座、早瀬入替我に工藤。十一月、中村座、鹽治判官故郷錦に師直。
 寛保二年正月、中村座、娘曾我凱陣八島に工藤と土左衛門傳吉、俠客夢の市耶兵衛實は
 京の小次郎。七月、女夫屋福名殿屋に不破伴左衛門。十一月、同座、傾城赤澤山に伊東
 入道。
 寛保三年春、市村座、門幕常盤曾我に伊東入道亡魂と工藤。五月、天和唐合鑑に守屋大
 臣の靈と守屋の娘笠縫市女。七月、吉例佐々木鑑に承嗣。十一月、市村座、石居太平記
 に長崎勘解由左衛門。
 延享元年春、市村座、七草編曾我に祐經の奥方辰夜又御前。七月、開關今川狀に山名宗
 全、後日、淨るり坂幼仇討に敵廣瀬勘左衛門。十一月、森田座、藤高代移徒に太宰小次と
 不破伴左衛門。
 延享二年春、森田座、春霞曾我に坂東太郎。十一月、同座、乳兄弟伊豆日記に伊東入道
 と景清。
 延享三年春、森田座、御所殿子十二段に熊坂長範。十一月、森田座、大島居五十四郎に尾
 公と貞任。
 延享四年春、森田座、江戸紫根元曾我に蒲の冠者と土左衛門傳吉。十一月、市村座、出世

紅葉狩に鎮西八郎。

寛延元年春、市村座、紋盡名殿屋曾我に不破伴左衛門。七月、敵討殿流島に佐々木岸柳
 二度り。八月、三代染耶問答に柴刈福藏實は陸島廣文二番りに清幸。十一月、同座、故
 下僧弓勢鉢木に赤星太郎、二番りに紅屋庄兵衛。
 寛延二年正月、市村座、葉早黄鞍馬源氏に熊坂長範と腕の喜三太、阿房の役。夏、假名手
 本忠臣藏に定九郎と本藏。秋、曾我後日難波と直助福兵衛。十一月、中村座、小野
 太平記に足利尊氏と相模入道の亡魂。
 寛延三年春、中村座、沙漏珠風折小町に山廻りの佐四郎。十一月、同座、若木藤平清盛に
 爲朝と冷酒の權九。寛保元年春、中村座、伊豆小袖商賣鑑に義平の亡魂と土左衛門傳
 吉。秋、戀女房染分手綱に入藏。九月、扇引名殿屋に女街手の夏八兵衛實は由井の濱
 忠雪。十一月、同座、本領鉢木染に秋田城之介。
 寶暦二年春、市村座、花街曲輪商曾我に鬼王、二番り、花姿三幅對に幡隨長兵衛。秋、新撰
 奥州に安部貞任。十一月、市村座、梅櫻仁輝丸に千壽太郎。
 寶暦三年春、市村座、出匠いろは曾我に工藤。五月、清玄。六月、ひらがな盛衰記に船頭
 松右衛門。七月、敵討殿流島に岸柳、三度り。十一月、同座、冠競和黒主に鹽梅よしや清
 兵衛實は三輪王せいり。

寶曆四年春市村座、常需曾我橋に工藤と下男長五郎實は駿河の次郎。三月、千本樓に源九郎孤。五月、三代源氏六條通に藤原廣文。八月、山内千軒坂鬼淡に人買山岡太夫と三庄太夫。十一月、中村座、三浦大助武門蓋に岡崎源四郎(曾と五郎破り)。

此の時、彼れは四世團十郎となり、己が實子幸藏を以て三世幸四郎となせり。蓋し、二世團十郎の養女たる彼れが妻は當時既に死せりと雖も、團十郎の名を襲がんとは彼れの素願なりしを以て、菩提所道照院に請ひて始めて其の意を遂げたるなり。而して、是れより先き、寶曆元年の八藏、及び二年の秋田城之介など、漸く敵役より實役に轉せんとしたりし彼れは、團十郎たるに及びて全くの實事師となりたり。

寶曆五年春、中村座、若綠錦曾我に京の次郎後に鳴神上人。六月、江戸鹿子松竹梅に土左衛門傳吉。秋、信田長者柱に小山の判官と阿房杵禰。十一月、同座、塩弓勢源氏に衛士又四郎實は爲朝。

寶曆六年二月、中村座、藤三升曾我不破伴左衛門。四月、長生殿常櫻に大堂寺田端之助後に花川戸助六。七月、月英英雄鑑に和藤内。八月、菅原に松王丸。十一月、同座、將門裝束櫻に加藤兵衛(曾)、金貨道徳婆、藤原忠文、炭賣五郎八實は將門などの七役。寶曆七年春、中村座、日本題難音曾我に物くさ太郎實は景清、實工藤實は宇佐美の三郎、

渡間の淨瑠璃に清玄の骸骨。七月、安部泰成忌替に泰成と三庄太夫、實は後藤兵衛。十一月、同座、女武者轟陣八島にあかんべいのど人。

寶曆八年春、中村座、時津風入船曾我に工藤、二番めに景清と油屋九平次。秋、小野道風音柳視に道風。十一月、同座、木毎花相生鉢木に伊賀三郎と佐野源左衛門。

寶曆九年春、中村座、初賀和田宴に景清と工藤、二番めに荒五郎茂兵衛(鏡男)。十一月、市村座、阿國築出世舞臺に荒獅子男之助(曾)、町人あたけ甚兵衛、渡部長部。

寶曆十年春、市村座、振分髪末廣曾我に宗清と俠客團十郎團七。四月、曾我萬年柱に市川屋三光。十一月、同座、梅紅葉伊達大關に鎌倉權の順と三浦國妙。

寶曆十一年春、市村座、江戸紫根元曾我に葛飾十内三番めに白酒實(龜藏の助)。八月、鹿大和文章に久米彈正と三笠村助作。十一月、中村座、日本花判官鼻頁に廣公病實は船頭大津次郎、源八兵衛、ささん婆、知盛の幽霊實は百合の八郎、景清、等の七役。

寶曆十二年春、中村座、曾我鼻頁二本樓に八幡の三郎實は京の次郎(傀儡師の所作)。秋、玉藻前桂葉に芦屋道滿。十一月、同座、柳葉伊豆鏡に銀四八郎(曾)、遠藤武者、波切不動。

寶曆十三年春、中村座、百千島大磯海通に四國順禮實は景清と大江廣元。五月、高野山蛇柳に丹波助太郎(道外方)。十一月、同座、大丈夫高館實紀に臈病者三浦文藏。

明和元年春、中村座、人來島春曾我に鎌々賣長兵衛實は景清。二月、菅原に松王丸と

雷神。六月「大塔宮」に齋藤太郎左衛門。九月、久米寺彈正の毛抜き。十一月、同座「吾妻花相馬内裡」に茨木長兵衛實は將門。

明和二年春、中村座「天津風」年曆曾我に日置實は景清。五月「忠臣藏」に平右衛門と本藏。八月「けいせい」福引名護屋に女街手の妻八兵衛實は山井が濱忠雪。十一月、同座「神樂歌雨乞小町」に紀の名虎。

明和三年春、中村座「街道一伊豆春駒」に澁谷金王と丹波與作(座頭殺し)。七月、石川五右衛門。九月「太平記菊水巻」に宇治常悦。十一月、同座「金花凱陣荒武者」に三浦國外。

明和四年春、中村座「初商大見世曾我」に鈴賣七兵衛實は景清、三番めに粟津の六郎梅若殺し。五月「千本櫻」に銀平と覺鏡。秋、其名月色人に下部雪平と鳴神上人。十一月、同座「太平記殿女振袖」に煎茶賣實は如六郎左衛門。

明和五年正月、中村座「筆初曾我」に工藤梅、澤小五郎兵衛實は上總の五郎兵衛、及び景清。夏「忠臣藏」に平右衛門。「信仰記」に大膳。秋「天竺徳兵衛故郷取楯」に徳兵衛。十一月、同座「今於盛末廣源氏」に宗清と喜三太(阿房)の役。

明和六年春、中村座「曾我愛護若松」に景清と前髮左平。秋「念力樸葉鑑」に浮島彈正。十一月、同座「常花榮鉢水」に三庄太夫實は佐野源藤太。

明和七年春、中村座「鏡池傳曾我」に粟津の六郎、景清、信正坊。六月「敵討忠孝鑑」に淺利與

市。七月、後日に古金買八兵衛、播谷蓮生坊。十一月、同座「福壽一陽的」に植藤窟の五郎藏實は長田太郎玉、漢前實は九尾の白狐。

此の時、彼れは幸四郎の舊名に復して、其の子三世幸四郎を五世團十郎となしき。

明和八年春、中村座「堺町曾我年代記」に愛染明王の像と河津の靈魂、二番めに景清の七役。夏「忠臣藏」に師直と平右衛門。十一月、同座「倭花小野五文字」に大伴山主、五代三郎、秦の大膳(舟前奴)。

安永元年春、中村座「曾我隠草紙」に近江八幡之助實は景清。秋「花御所根元舞臺」(非人仇討)に大友多々良之助。十一月、同座「大鍛海老扇篠塚」に新田四天王の四役。

此の時、彼れは再び改名して二世市川海老藏といへり。

安永二年正月、中村座「和田酒盛榮華鑑」に義盛と三浦大助の鏡、二番めに景清。五月「大日本伊勢神風」に七草四郎實は和藤内。七月、けいせい片岡山に飛彈内匠。「菅原」に雷神。十一月、同座「御旗勤進帳」に辨慶と結輪の平次。

安永三年春、中村座「御旗曾我難形」に爲朝。是れより舞臺へ出でざること殆んど二年。

安永四年十一月、市村座「現船太平記」に如六郎左衛門と篠塚伊賀守。

安永五年正月市村座「冠首葉曾我由緒」に工藤と景清。七月「菅原」に松王と雷神。

彼れは此の松王を一世一代として、十月の舞納めの日、忽然剃髮して家に歸りしかば、家人も其の意外なるに驚きしといふ。是れより全く梨園の外に退隠し、安永七年二月十五日に歿したり。

彼れが俳優としての閱歴は比較的屈折多かりき。前に述べたる如く、初めは女方より出で、敵役となり、而して、養父幸四郎は彼れが二十歳の時既に歿し、僅に二世團十郎が庇護の下に成長したりしといふ。又其の落胤説の果して事實なりしといふへ、尙ほ、表面に於ては、何等門地の頼みあるなく、加ふるに、其の藝風の實に過ぎて華に乏しかりしを以て、早く世衆に其の伎倆を認めらるゝを得ざりき。されば、當時の劇評家と雖も、彼れが晩年の大成功を豫想し難かりしにや、其の幸四郎たりし敵役時代には、漸く市川宗三郎の匹儔として之れを品騰し、寛延二年の「役者花双六」には彼等を並び評して、

幸四郎、思ふ國へ賽が参つたならば、如何にも山中平九郎に三笠城右衛門をいれたる所ある。

べしと冷評せり。加之、彼れが團十郎を襲名せるに及びては、此等の輕侮のほか、其の技藝の市川風に適はざるを非難し、甚きに至りては、却て團十郎の名を辱むる



(りよ「集代八今古」)「清景」の那十團世四

者なりとさへ攻撃せられたりしが、何時しか次第に其の名望と聲價とを高めて終に一代の泰斗として尊重せらるゝに至りき。蓋し要するに彼れは晩成せる大器なりしなり。而も其の始め非難を受けたる理由の一つなりし如く、彼れが技藝の其の養家たる市川風に適はざりし

二世團十郎と彼れが相違せる點の最も著きは、其の生理的の狀態、即ち容貌と體格とにありたり。二世團十郎が小兵なりし事は既に前にいへり、而して四世は之れに反して軀幹長大なりしと傳へらる。又似顔繪に於て兩者を比較せんに、彼れは眞々圓く、此れはおも長く、彼れはふくらかに、此れはトガトガしく、彼れは多血質に近く、此れは神經質に類したり。而して、二世團十郎が京都の劇場に於て演藝中に半疊を投げかけられたりし如く、四世團十郎が寛延元年中古戲場説に延享三年とあるは誤れり。彼の赤星太郎を演せし時、其の頃ありし顔見せ初日の習慣とて、地廻りのもの大勢役者の出づる毎に手を拍ちたりしが、彼れが初めて舞臺へ現はるゝや、一同静まりかへりて手を拍たんとせす、土間も舞臺も白けて見えたり。斯くの如き侮辱を受けたる彼れが果して如何なる態度を取りしか。彼れは二世が莞爾として却て其の謝辭を述べたりしに反し、何時しか次ぎの幕の赤星太郎が悪事現はれて對決すといふ場に至り、

秋田城之介の彦三郎及び背抵左衛門の廣次に對ひ、暫く待つて給はるべしとて、さて舞臺の真中へ正面にすはり、顔見世は此の方ども孰れも身祝ひの事はすまも承知

なるべし然るに、拙者一人に限リ手を拍たれぬは遺憾ありと見えたり、さらば少しも苦しからず、何人なりとも只今此處へ上り、心次第に致さるべし、さりながら此處は役者さいひ、見物方の邪究なれば、拙宅へ幾人にも來られよ、少しも逃隠るゝ我れにあらす、随分相手になるべし、いかゞ、と大音にいひしかども、ロツツとして一首の返答するものなかりしかば、さらば何も言分はなきや、と二三度繰返し、然らば齒にかゝり申すべしと改めて見物へ狂言を中止せし斷りをいひ、尙ほ彦三郎廣次に向ひて、さらば齒にかゝるべしとぞ御兩所にも御意風なりしならん、と再び狂言をつさめ、斯くて、地廻りの者とは、表方の仲裁にて、其の夜、自宅にて和解せりといふ。彼れは忽ちに笑ひ、此れは徐ろに憤る、著き反對にあらずや。又二世が、享保十八年六月三日、宗十郎の店先へきおひども踏込み、かけやにて店を打毀し、堺町大騒ぎの由を聞きて、

古四行は元暦の亂をさけ、兼好は建武の亂をさけ、世を安んぜり。余は目黒に身をいさうて、駒子が騒ぎを知らず。アラ樂しの目黒や、アラ心島の田舎住居や。
くづさささう水草流し江月だより

と郊外の別墅に悠々たりしと反して、寶曆十年二月二日、市村座にて

傳馬町の若い者が少しの間遊より大勢徒黨して芝居へ押寄せ來り、木戸口を打毀し、既に中へ入らんせざる時、單身群がる人の前面に進み出で、當芝居は御上より御免を蒙りし芝居なり、其れを自儘に打破らんとするは何事ぞ、御身たちの爲めあしがるべし、速かに引退き候へ、もし聽入れずば吾等相手さならん、と脇差の柄に手をかけ、只一打と構へたる有様に、亂暴人の荒膽を挫

きしは四世團十郎なりき。彼れは文筆を好んで俳人詞客と交はり、此れは氣節を負ひて遊俠浮浪と親くす。俳優を尊稱して「親方」といふは四世團十郎に始まりといふ。尙ほ實子たる三世團十郎を失ひて、三年伺ふたきりくすの句を詠じて自若たりし二世と異りて、四世團十郎が其の一世一代の松王丸を扮せし時、孫の桃太郎が死せるや、

其の節舞臺を退き申すべく候やうにも存じ候が、一世一代仕り、孫を殺し、因果人なることの悲しさに、仕舞ひまで動め申候。誠に力も御座なく候。……松王の白のうち、にけなげや八つ九つで、申す時は胸が裂けるやうで御座る。其の時の市川海老藏なら、泣きは致さぬ、坊主になりたれば大事もあるまい、

とて、退隠後、訪問し來れる中村仲藏の面前にて、大聲出だして泣出で、雨散の身とな

りたれば、今日は出やう、明日は出やうと言ひながら、往來にて子供を見る事のつらしとして、終に死するまで外出せざりきといふ。即ち、彼れは磊落洒脱、此れは多情多恨、彼れは溫柔なり、此れは剛毅なり、斯くの如く、生理上の相違は頓て性行の上にも及べると共に、又その技藝にまで現はれ、彼れは飽くまで輕佻なる元祿時代の氣風を承けて、快調なる荒事に能く、此れは寧ろ沈重なる近世的思想を表して、慘刻なる實惡實事に長じ、彼れは賑やかに、此れは淋しく、彼れはハデに、此れはシミなりき。されば、寶曆十四年の「役者初庚申」に、

上下ごこに、かけては柏薙(二世團十郎)に負けも劣りも御座りませぬ。荒事にかけては柏薙ほどじまりが御座りませぬ。

と「頭取」が評せるを、更に芝居功者が駁して、

成程、われがいふ通り、荒事化身事は物によりて柏薙より劣つた事もあるべいが、吾々どもが眼には荒事、見え事の劣つただけ、結局名人。畢竟、荒事化身事は初心な事だわ

といへる適中せり。

斯くの如く、市川家傳來の藝風とは異りたる四世團十郎が長所の第一は言ふまでもなく實惡にありき。彼れが一生の當り藝と稱するものうち、景清、工藤、岸柳、爲朝、師直、熊坂、久米平内、由井忠雪の如き、孰れも是れに屬せり。就中、景清は最も彼れが得意とせるものにして、一生に之れを演せし事幾度といふを知らず、其の服装と役柄とは今日まで彼れを興れり。而して、其は父二世團十郎と山中平九郎との式を彼れが折衷せるものなる事は、彼れが實子たりし五世團十郎の談話に見ゆ。

景清は山中平九郎、是れは綱頼、是れはハレン、丸くけの帯、太刀をさし、背高く、百日器にて、顔は白く、眼の縁へ少し紅をつけ、小鼻より額へ、鬘の髪あッばれ、袷く見え、これにてタテをしたりとなり。祖父柏庭二世團十郎の景清は、背餘り高くなきゆゑ、小手懸當に紅の綿入袴、いかにも見事なる廣袖の大巾切、丸くけ、大太刀にて、家の筋限にて致し候由。親五粒四世團十郎は、顔の隈取りを、家の筋限に、平九郎が、盛限の髪を用ひ、兩名人採込みの景清をつまめしゆゑ、御見物の評判、景清は四代目木場の團十郎に止まる、と御ひいき有之候由。それゆゑ、私も未熟ながら其の面影を寫し、度々相勤め申候事、誠に先祖の御陰を存するなり。

と。而して、役者大全に彼れが實惡を評して、

ちこ子細らしきこそしる人あれど、實惡は子細らしきが體なり。それに小手の働くを用さす。此の體用二つを以て名人も上手とも呼ぶ事なれば、此の人の子細らしく見ゆるは、先づ實惡の體は備はりしといふもの。然し、是れに助五郎ほどの用が備はらば、又とあるまじ。助五郎は其の用備はりて、體は全く幸四郎に及ばず、

といへり。こは彼れが未だ團十郎たらざりし壯時をいへるなれば、其の後、數段の進歩をなせるならんも、謂はゆる體の備はれるとは、其の品位、風采、及び氣韻等に於て勝れたるをいひしならん。而して、實事に於ても、彼の秋田城之介を首めとして、甲賀三郎、熊谷次郎、松王丸等の當り藝あり。就中、此の後の二つは操りの淨瑠璃を演じて成功せしなるが、今の寺子屋の松王は、服装動作、大かた彼れによりて創められきといふ。其の他、俠客には、夢の市郎兵衛、荒五郎、茂兵衛等あり、女人に扮せるは、八ッ橋の亡魂、辰夜叉御前等あり、痴漢に扮せる道外方には、百姓杵藏、丹波助太郎等あり。多方面は二世團十郎に及ぶべからずと雖も、而も彼れが技藝は單調なりといふ可らず。

舞臺に熱心なりし彼れは常に技藝の意匠に心を碎き、時々、其の木場の居宅へ部下

の俳優を集めて各自の工夫を闘はしめ之れを修行講といひき。五世團十郎の談話に曰く、

六二四

私親團十郎木場に罷在り候時芝居より宿へ歸りても唯藝の事を心かけ仲藏、錦江(四世幸四郎)、中車(八百蔵)などを集めて修行講と名づけ、會日を定め、何の役が来た時はどうする、此の役は思入れがあらうか、互に工夫魂膽を論じ合ひたるゆゑ、孰れも上手の名を取り候。私は唯酒を呑み、俳諧などを樂しみ居り候ゆゑ、親申し候は、此の席へも出で少しは藝の修行も致せ、と申され候間、ある時親に向ひ申候は、亦松律師則祐に武藏坊辨慶の死霊のつきし狂言は如何致し候はん、と申候へば、親笑ひながら、其のやうな狂言は本讀みを聞いてせぬがよいと申し候。

と。又後の編にいふべき中村仲藏の定九郎は其の席上にヒントを得たるなりといふ。されば、讀者は近代の寫實主義が此の修行講の席上より躍起せることを忘るべからず。彼れは又成功の秘訣を説きて曰く、

段々脚外よく出世する時は、だまへば梯子を上るやうなものにて、一段々々上るがよし。二三段も飛越してあがらんとするはあぶなし、踏外すま落ちて腰折がするな

り、一段々々上るに若くはなし。モウ少しにて上り詰めやうとする一二の所が役者の花盛り、ひびきの多い最中なり。二階まで上り詰めると私が身の上にて、是れからは仕方なく、段々下へ下るより他はこれなし。

文筆は彼れ養父に及ばざりきと雖も、俳名を五粒といひ、中ごろ海丸と改め、尙は柏庭、夜雨庵等の別號あり。彼の一世一代を演じて退隠せし時の狂句に、

今よりは變はらで歸つれし

たが三升も老を海老腰。

退隠後は法名を隨念といひ、其の辭世に、

極樂と歌舞の太鼓にあけがらす

今より四の芝居へぞ行く。

彼れが妻は二世團十郎が婢にして、後に養女たりしおさよなりし事は前章に記せしが、或は二世團十郎が姪にしておいぬといへりともいふ。五世團十郎は即ち此の夫婦の間に生れたりしなるが、産婦は幾くもなく歿して、彼れは暫く鎌居せる間に若衆方佐野川小吉を寵しき。後、岩井半四郎の女にして、たゞ瀬川菊次郎に嫁

し、菊次郎の死してより寡婦たりしおもと、いふを作者金井三笑の媒介によりて娶りたり。尙ほ初世及び二世ともに京阪の舞臺を踏みしに拘はらず、彼れが終生江戸の外に出でざりしは一奇なりといふべし。

第八章 其の他の江戸に於ける立役

二世廣次——興行年表——容貌と風采——大森彦七——河津俣野の相撲——彼れが得意——中村助五郎——多方面なる技藝——暇むべき場當り——尾上菊五郎——幸四郎との隙——「女色方」——前例なき異敷——
——武道實事——彼れが缺點——「性根」——二世宗十郎——三世團藏——二世傳九郎——六世勘彌——九世羽左衛門

●二世大谷廣次平町——寶曆セは操りの人形つかひ辰松武左衛門の子にして、文七といひ、初めは父と同じく操り芝居に出で、辰松八郎兵衛の足つかひたりしが、初世廣次の門に入り、大谷文藏と號して俳優となり、享保二十年十一月、市村座へ現はれき。後故ありて師の門を去り、元文元年十一月、更めて市村羽左衛門の弟子となり、坂東又太郎と號し、是れより久しく市村座に出で、就中、元文四年、二世團十郎が彼の累殺しの與右衛門を演せし時、彼れは、監物太郎ほうとう丸に扮し、後に井へ入り、富澤門太郎に槍にて突かれ、互ひに名乗り合ひて愁嘆のくだり、舊師廣次の面影に似たり。

さて見物より大谷々々を聲をかけられ、是れより次第に地位を高め、年毎に朝比奈に扮して好評を得、尙ほ同年十一月は、同座の瑞樹太平記に大森彦七に扮せり。蓋し彦七の役は是れより先き初世廣次が當り藝たりしものなり。此れより以後主なる興行の年表を左に擧げん。

元文五年二月、市村座、姿瀨隅田川(國十郎の七つ面)に近江源五郎。六月、阿彌陀池妹背鏡に早見八力。十一月、同座、吉例今川狀に渡部民部。

寛保元年正月、市村座、舞鏡入會我に朝比奈。十一月、同座、姿給女樂平に大膳竹とら。

寛保二年正月、市村座、富士見里榮會我に朝比奈。九月、「舞風流太平記」に栗生左衛門。

十一月、同座、振袖信田妻に鎌倉權五郎。

寛保三年正月、市村座、春曙源會我に朝比奈。十一月、中村座、船貫太平記に大森彦七(初世廣次の尊氏)。

此の時、彼れは再び齋師廣次の門下に歸して大谷鬼次と改名し、市村座より久しぶりに中村座へ轉じ、且つ師の當り藝たりし彦七に再び扮せるなり。

延享元年正月、中村座、蘭末廣源氏に股野五郎。十一月、同座、花鳥太平記に長崎次郎假りに斐鹿孫三郎。

延享二年正月、中村座、羽衣壽會我に朝比奈。十一月、同座、扇伊豆日記に鬼若丸と鬼王(乳貫)。

是れまで、彼れが演せしもの殆んどとして喝采を博せざるはなかりしが、就中、此の鬼若と鬼王とに大當りを取り、此の時より始めて、上上吉の位に昇りたり。

延享三年正月、中村座、富士雪年會我に五郎と一寸徳兵衛。十一月、同座、天地太平記に大森彦七。

延享四年正月、中村座、書初和會我に、佐野屋次郎左衛門。三月、菅原傳授手習鑑に松王。十一月、市村座、出世紅葉狩に依藤太。

寛延元年正月、市村座、紋盛名懸屋會我に朝比奈。八月、三代染耶問答に竹原大和之助、實は千原文。十一月、同座、放下僧弓勢鉢木に背砥左衛門。

此の時、始めて二世廣次と改名せり。蓋し前年、彼れが師たる初世廣次が歿せるを以てなり。

寛延二年正月、市村座、葉初寅鞍馬源氏に鷲尾三郎假に俠客長吉。三月、忠臣蔵に天川屋儀平。十一月、同座、頼朝軍配鑑に河津三郎と澁谷金丸。

當時、中村助五郎が股野五郎に扮し、兩人まことの裸にて相撲の取組を見せ、大好評

を得たりしかば、是れより後も兩人にて此の狂言を屢演じたりき。

六三〇

寛延三年正月、市村座「出入湊」に黒船忠右衛門(助五郎の獄門庄兵衛)。十一月、同座「亂陣
太平記」に大森彦七。

寶曆元年正月、市村座「初花隅田川」に山田民部左衛門。七月、佐々木三郎藤戸日記に荒
阿源太助五郎の板額八郎と力説。十一月、同座「神迎賑源氏」に工藤金石、實は遠藤武
考。

河津股野以來、同座して喝采を得たりし助五郎は茲に至り暫く彼れと分離して中
村座へ赴きたり。

寶曆二年正月、市村座「標姿見會我」に鬼王。十一月、中村座「赤澤山相撲日記」に河津の三
耶助五郎の股野と仁王。

此の時、彼れは始めて座頭となり、且つ助五郎と再び同座せるなり。

寶曆三年正月、中村座「男伊達初買會我」に鬼王、二番めに梅の由兵衛。七月、信田代嗣座「
に千原左近、二番めに月本武者之助助五郎の佐々木殿流」。十一月、同座「百萬騎兵太平
記」に長崎勘解由左衛門、假りに片桐彌七。

寶曆四年正月、市村座「百千鳥曲輪會我」に隆慶源五兵衛、實は鬼王助五郎の三五兵衛。

五月、根元阿國歌舞伎に埋忠徳兵衛。十一月、市村座「三浦大助武門壽」に泰河崎と源夫
流成。

寶曆五年正月、市村座「秘愛隨會我」に工藤の足輕八幡之助、實は鬼王、力士瀧髮長五郎、實
は手塚太郎。五月、築縮助助島に木津勘助。七月、菅丞相「辨釋」に菅丞相。十一月、同座、
「櫻梅吉例相撲」に河津の三耶と遊谷金玉丸。

寶曆六年三月、市村座「梅若菜二葉會我」に布袋市右衛門、實は鬼王。(五人男の對面と隆
慶無間)。十一月、同座「蹄花金玉櫻」に宗清と張飛。

寶曆七年正月、市村座「桑手綱初午會我」に鬼王、後に瓜の井新左衛門(菊之丞の女馬士自
然生おさん)。

其の六月二日に至りて身歿りき。死因は心太を食せるなり。當時の落首に曰く、

こころてん、いかに十町くふたとて

あたるさいふはホンのホもの。

彼れと共に河津股野を演じて屢喝采を得たりし助五郎は、其の七月、彼れが位牌を
持ちて獨相撲を演じ、以て追悼の意を表せりとぞ。

彼れは、人形つかひより出身せるだけに、操りの藝風を歌舞伎に移せるならん。中

古劇場説に男ぶり大柄にして、しかも美男なりといひ、役者大全にも第一男大柄にしてきれいな口跡師匠に似ていへる如く、彼れは容貌と風采と共に勝れて、且つ其の藝風は初世廣次に酷似せりと見ゆ。寛延二年の役者花雙六にも

男つきは十町に美男の二字を添へた男仕内はむかし歌仙十郎兵衛に、小野川宇源次の立役になりそめられし時をかれたるは自然なるべし。十町にはそぶりさ風がそのまゝ



(りよ「全大顔似」)「耶三津河」の次廣世二

といへり。又故松本小四郎(初世幸四郎)の面影を存せりといふ事、彼れが壯時の評に屢見えたり。而して、彼れが斯くの如く其の師廣次をあまりに摸倣せるを非難

せる評をも往々評判記に載せられたり。延享四年の「役者矢的詞」に彼れが大森彦七を評して、

廣次どの、物まれが聞きたくば、此の人く。自分の持前が見えぬはなんたる事だんべい、

など罵れり。而も、此の大森彦七は初世廣次の當り藝たりしと共に、又彼れが一代の當り藝なりき。初め、其の坂東又九郎といひし時代には、大かた敵役を専らとせしが、鬼次と更めしと同時に、此の彦七の實事に於いて大いに成功し、是れより専ら敵役もしくは荒事を得意とせるなり。こゝに、最初に演せられし彦七の梗概を記さん。

住吉にて、瀬邊伊賀守が天皇と宮をめぐりて首をさらんとする時、御所車の内より出でし之れを助け、次ぎに、尊氏大塔宮に琴をのぞむを、宮の御一分立てんきて、赤つらに上下の肌抜きて、自ら琴を調べて人々を逃がし、次ぎに馬のくつを取つて、尊氏へ意見し、手討にならんさいひ、五關破りの場にて再び尊氏を誅む、

といふ筋なりき。彦七については、菅原の松王丸を當り藝とす。而も前にいへる

如く、展助五郎と共に演じたる河津股野の相撲最も著名なり。其の最初に演せられし寛延二年のについて左に梗概を語らん。

六三四

友若の乳母月さまを北條の姫と悟り、頼朝の爲めにラザ月さまに色をしかけ、懐中せし文と起腫を取りて陣鉦へ隠し、次ぎに赤澤山にて相撲の手合せありて呼びに來り、出行かんとするを滿江が只管止むるに心付き、日さしの我が影のうつらざるを見て、大願成就と喜びて出行き、股野との相撲は裸にて眞の相撲の通り、股野が刀先の傷ほころびしを見て怪み、次ぎに、流矢二つにて落馬し、祐借と鼠田とに介抱せられて後の事を頼み、我が敵は工藤金石なりと告げて死す。

要するに、彼れが得意とせるは、武道實事なりしなり。而も、尙ほ俠客に扮しては、一寸徳兵衛、黒船忠、右衛門、梅の由兵衛、天川屋儀平、など孰れも當り藝なりき。廣次の門下に、大谷春次あり、後に三世廣次となりて次期の名優なりき。

中村助五郎（魚樂正徳元一寶曆十三）は道外方仙石彦助の子にして、初世中村七三郎の門に入り、中村龜太郎といひ、又仙石龜太郎ともいふ。享保十年十一月森田座へ若衆方として現はれたり。其の後、女方岩井喜代松に引立てられ、地方を興行して女

方を兼ねしが、元文元年十一月廿六歲、河原崎座にて仙石助五郎と改め翌二年十一月、同座の閏月仁景清に源範頼となり、謀叛現はれて井場十藏坂、田藤十郎に足を切られ、無念の仕打を演じ、同四年十一月、更に中村座にて中村助五郎と改名し、而も、當時は尙ほ僅かに實惡の部に「上上」として其の名を擧げられたるのみなりしも、同年、中村座にて二階堂城之介に扮せる時、さしたる仕打もなきに、汗を流して舞臺を勵みたるを或る人の見て、此の役者やがて上手になるべしといひきとぞ。

寛保元年十一月、中村座、鹽治判官故郷館に足利直義。

寛保二年正月、中村座、娘曾我凱陣八島に近江の源五。七月、女夫星福名驛屋に鍛冶源晋左衛門。十一月、同座、傾城赤澤山に山木判官。

寛保三年正月、中村座、門縁常磐曾我に範頼。七月、吉例佐々木館に比企判官。十一月、市村座、石居太平館に高時家來須田次郎左衛門。

此の比企判官にて、廣庭の立廻りに大當りを取りてより次第に昇進したり。

延享元年正月、市村座、七福編曾我に俠客鎌屋の武兵衛。七月、開闢今川狀に力士八角八藏。十二月、同座、殿造源氏十二段に矢羽大太郎。

延享二年正月、市村座、初曆藤曾我に榎原と乞食坊主ごんさい。十一月、同座、婿楠祝粧

日本演劇史 第三編 寶曆期 第八章 其の他の江戸に於ける立役

六三五

如く、屢助五郎と共に演じたる河津股野の相撲最も著名なり。其の最初に演せられし寛延二年のついで左に梗概を語らん。

六三四

友若の乳母月さまを北條の娘と替り、頼朝の爲めにマザさまに色なしかけ、憤中せし文と起腫さを取りて陣鉦へ懸し、次ぎに赤澤山にて相撲の手合せありて呼びに來り、出行かんとするを滿江が只管止むるに心付き、日さしの我が影のうつらざるを見て、大願成就と喜びて出行き、股野との相撲は裸にて眞の相撲の通り、股野が肩先の傷ほこるびしを見て怪み、次ぎに、流矢二つにて落馬し、祐信と眞田とに介抱せられて後の事を頼み、我が敵は工藤金石なりと告げて死す。

要するに、彼れが得意とせるは武道實事なりしなり。而も、尙ほ俠客に扮しては、一寸徳兵衛、黒船忠、右衛門梅の由兵衛、天川屋儀平など、孰れも當り敷なりき。廣次の門下に、天谷春次あり、後に三世廣次となりて次期の名優なりき。廣次の中村助五郎（魚樂正徳元一寶曆十三年は道外方仙石彦助の子にして、初世中村七三郎の門に入り、中村龜太郎といひ、又仙石龜太郎ともいふ）享保十年十一月森田座へ若衆方として現はれたり。其の後、女方岩井喜代松に引立てられ、地方を興行して女

方を兼ねしが、元文元年十一月廿六歲、河原崎座にて仙石助五郎と改め、翌二年十一月同座の「間月仁景清」に源範頼となり、謀叛現はれて井場十藏、坂田藤十郎に足を切られ、無念の仕打を演じ、同四年十一月、更に中村座にて中村助五郎と改名し、而も、當時は尙ほ僅かに質惡の部に「上」として其の名を擧げられたるのみなりしも、同五年、中村座にて二階堂城之介に扮せる時、さしたる仕打もなきに、汗を流して舞臺を屬みたるを或る人の見て、此の役者やがて上手になるべしといひきとぞ。

寛保元年十一月、中村座「鹽治判官故郷館」に足利直義。

寛保二年正月、中村座「娘曾我郎陣八島」に近江の源五。七月、「女夫屋」名隠屋に鍛冶源

晋左衛門。十一月、同座「傾城赤澤山」に山木判官。

寛保三年正月、中村座「門線常磐曾我」に範頼。七月、「吉例佐々木」に比企判官。十一月、

市村座「石居太平記」に高時家來須田次郎左衛門。

此の比企判官にて、廣庭の立廻りに大當りを取りてより次第に昇進したり。

延享元年正月、市村座「七種編曾我」に俠客鎌屋の武兵衛。七月、「開關今川」に力士八角

八藏。十一月、同座「殿道源兵十二段」に矢削大太郎。

延享二年正月、市村座「初層藤曾我」に榎原と乞食坊主ごんさい。十一月、同座「掃榻祝儀

鏡に大館彈正。

延享三年正月、市村座、附伴普曾我物部に近江小藤太。七月、見櫻織實記に大道寺田畑之助、二番めに四瓜實三平、三番り、丹波典作に八藏。十一月、同座、附伊豆日記に伊東入道と榎原。

延享四年正月、市村座、玉櫛鞋曾我に工藤。五月、菅原に松王丸。八月、蒲月小栗樓に横山郡領。十一月、同座、出世紅葉書に教經。

此の時より彼れは實惡の上上吉に昇れり。

寛延元年正月、市村座、教經名護屋曾我に國三郎。八月、三代染井問答に奴がん助實は浮島時文。十一月、市村座、放下僧弓勢鉢木に放下師、實は敵戸根彈正。

寛延二年正月、市村座、葉早實鞍馬源氏に伊藤次郎と鈴木家來伴内。五月、忠臣藏に師直と九太夫。十一月、同座、頼朝平亂に近江の小藤太と股野五郎。

此の股野は前にいへる如く、二世廣次との當り藝なりき。

寛延三年正月、市村座、出入後に黙門庄兵衛。十一月、同座、凱陣太平記に淵邊伊賀守。寶曆元年正月、市村座、初花隅田川に久米平内と幣同時平、實は麻生松若。五月、女俠東難形に濡髪のおしづ。七月、佐々木三郎藤戸日記に板垣八郎。十一月、中村座、本領鉢

木染に法華長兵衛。

寶曆二年正月、中村座、花街曲輪南曾我に京の次郎と鳴神坊二番り、花姿三幅對に鐵壁武兵衛。七月、附傑奥州に宗任。十一月、同座、赤澤山相撲日記に股野五郎と北條三郎。

寶曆三年正月、中村座、男伊達初實曾我に祐經と八幡の三郎、二番めにうばの源兵衛。

七月、信田代綱鑑に指島兵庫、二番めに佐々木藤流。十一月、同座、百萬騎兵太平記に大森彦七。

此の彦七は純然たる武道實事の役なり。是れより後、彼れは次第に實惡よりも寧ろ實事を専門とするに至れり。

寶曆四年正月、中村座、百千鳥曲輪曾我に京の次郎血途磨の狂言、三尾の谷三番めに男道成寺。根元阿國歌舞伎に松永彈正。十一月、三浦大助武門秘に加藤荒次郎、二番めに曾我祐信の足輕官兵衛實は鬼王庄司。

寶曆五年正月、中村座、若綠錦曾我に和藤内と義經の家來大内次郎、假りに俠客あしだ兵衛。七月、信田長者柱に目録傳兵衛。十一月、同座、槍弓勢源氏に股野五郎、二番めに飛脚早藏。

寶曆六年十一月市村座、歸花金平櫻に遊藤武者と呂布。
寶曆七年正月、市村座、染手綱初午曾我に團三郎。十一月、同座、松若阪磨麻下須磨の兵衛實は淡路總督。

彼れが好敵手たりし二世廣次の死せるは實に此の年なりき。

寶曆八年正月、市村座、九十三騎大寄曾我に京の次郎、假に工藤の家來池上太左衛門、二番めに東金茂右衛門。三月、懸染隅田川に敵淺間次郎と久米平内。十一月、森田座、赤澤源兵衛に股野五郎、二番めに曾我の下人太申、實は宇佐美十内。

蓋し、太申といふは當時の豪商にして、虚名を賣らんが爲め、己が名を狂言の役名に用ひしめたるなりき。

寶曆九年正月、森田座、菜花隅田川に粟津の六郎と釣鐘彌左衛門。十一月、中村座、生葉市、頗見世祭に大樽冠家臣力士、二番めに釣針屋五郎助。

寶曆十年七月、中村座、在原系團に關平。十一月、森田座、聖在弓勢鑑に長谷部信連。

此の春は、同座の焼失せる爲め興行を休みしなり。
寶曆十一年正月、森田座、遊俠明鏡粧曾我に股野五郎。十一月、市村座、壯士故郷錦に刀鍛冶才藏と齋藤五郎。

寶曆十二年正月、市村座、殘雪深曾我に米屋七兵衛、實は景清。七月、花江月秩父巡禮に二人金時。十一月、森田座、東西我國梅屋敷に魚賣鎌倉屋權五郎、實は宗任。
寶曆十三年二月、森田座、奥州安達原に宗任と黒塚の婆。



(り)「全大顔似」 門衛右忠船黒の耶五助村中

此の年、七月十三日、遂に病死したりき。

彼れは、男ぶりよく、愛嬌ありしと傳へらる。而して其の技藝も多方面なりき。蓋し、彼れが實父彦助は道外方の俳優にして、且つ音曲に通せしのみならず、脚本にも筆を執りたれば、家庭の薫陶は彼れをして多藝たらしめたる

一の原因ならん。彼れは前にも述べたる如く、若衆方より出で、女方を兼ね、壯時、

若立役より敵役に轉じ、即ち實悪は其の名をなせし所以なりしが、晩年には立役に轉じて實事を専らとなせり。而も二世廣次と相待ちて益其の妙を發揮したりき。彼れが實悪は、鋭い内に折々可笑しみありて一流の風をなせりといふ、即ち憎みの内に愛嬌あるを失はざりしなり。而して其の愛嬌あることをつとむるや、ま、賤むべき場當りに陥りき。寛延三年、彼の淵邊伊賀守に扮せし時なりき。

舞臺にて口上をいひ、くると時、頭巾を覆面に冠りたる男、切落しより出て、舞臺へ入らんとする故、口上音ひ、咎めて支ふるを捕へて絞殺し、頭巾をなれば中村助五郎にて、其の時、紅の器を出だし、左の手に鏡を持ち、顔を眞赤にぬり、口上音ひの上下を割きて着し、死骸を幕の内へ押しやり、其の口上音を取りて、役人替名の次第を讀み、市川海老蔵といふに至りて、なめら三寶と頭をかきたり

と。此等、場當りの最も甚しきものといふべし。而して、彼れが實悪も亦二世廣次と相待ちて愈其の妙を發揮せられしが、寛延三年の「役者新詠合」に廣次を評して、昔、早川傳五郎と前の幸四郎と出合はるゝと、相狂言にて、何時もあてられ、上方にて前の嵐三五郎と今の片岡仁左衛門と、藤川中三郎といひし時、いつでも二人よれば大

入りを取られし。其の通りにて、當時助五郎と此の人、廣次が相繼にて二人出づれば、踏見物の喜び大方ならず、

といへり。されば廣次が死してより助五郎の氣焰も亦甚だ揚らず、且つ幾くもな

くして其の跡を追ひて死せりき。多能なる彼れは又所作事を能くしたりき。彼れが始めて敵役たりし時、

所作事よく、女方になれやうかと思ひの外の敵役

と評せられしが、寶曆四年に至り、彼の「男道成寺」に其の伎倆を示して大喝采を博したり。蓋し、未だ分業法の餘りに亂れざりし當時にありて、女方の専務なりし所作事を實悪よりつとめしは異數なりしを以て、其の翌年の「役者刪家系」にはいたく彼れを非難せりと雖も、斯くの如く、立役若しくは敵役が所作事を兼ねることは、次期の中村仲藏に至り、愈盛んとなり、助五郎は即ち其の嚆矢たるものなりしなり。助五郎の實弟も亦俳優となりて仙國佐十郎といへり、而して實子を仙國助十といひ、二代め助五郎の名は之れによりてつがれたり。廣次と助五郎と孰れも晩成にして且つ、早死せるは惜むべし。

尾上菊五郎梅堂享保二十一年天明三が父は京都宮川町なる音羽屋半平とて、都萬太夫座の出方たりき。菊五郎は幼にして女方尾上左門の門に入り、享保十五年初めて若衆方として京都柳山座へ現はれたり。

左門の師を尾上右近といひ、又右近の師を尾上多賀之丞といひ、多賀之丞の父は宮川町に住せる丹波屋左衛門といふものなりき。而して、多賀之丞の弟子に、右近、袖之助の二人あり。右近の門下、左門を出だし、左門の門下更に菊三郎と菊五郎とを出せしが、菊三郎は半ばにして俳優をやめたり。

元文の始めより女方に轉じ、元文三年十一月、京都姉川座にて初瀬の前といふに扮し、父なし兒のいひわけする仕打、兎角色深く見え、仕打おもしろしとの評を得たりしが、元文五年十一月、大阪中村富十郎座へ轉じ、翌寛保元年十一月、佐渡島長五郎座へ二世團十郎が來りし時、之れと同座し、翌二年正月、例の鳴神に彼れば雲の絶間に扮して大當を取り、同年十一月、遂に團十郎と共に江戸へ下りたり。

寛保二年十一月、市村座、袖振信田妻に、白拍子羅波津と葛の葉狐の所作、及び女快麗金のふみ。

寛保三年正月、市村座、春曙廓曾我に、傾城吉野、二番めに齋藤五國、武翁之丞の女鳴神に若衆の絶間。七月、假名番東鑑に、致盛妻。九月、忠臣いろは軍談に、原藤右衛門妻廣糸。十一月、同座、石居太平記に、隈岐の判官が娘早咲、假に針賣糸。

延享元年正月、市村座、七草編曾我に、五郎と三浦屋小柴及び小姓吉三。七月、開關今川狀に、祇園のまこち、淨るり坂幼敵討に、近藤早人の妻圓まき。十一月、殿造十二段に、常磐御前。

延享二年正月、市村座、初曆壽曾我に、阿古屋二番めに女俵提灯の菊、佐渡通富士見四行の二番めに八沙の前と刀屋半七。十一月、同座、繪桶親柱鏡に、勾當内侍。

延享三年十一月、森田座、大島居五十四郡に、樞の大夫妻も照。

延享四年十一月、中村座、伊豆軍勢相撲錦に、女八幡。

寛延元年正月、中村座、飾殿燈曾我に、五郎。五月、千本櫻に、典侍の局。十一月、市村座、放下尙弓勢鉢木に、横野左衛門の娘まつよ。

寛延二年正月、市村座、葉早寅鞍馬源兵に、鈴木妻年王。五月、忠臣蔵に、勘平と石も圓。十一月、同座、頼朝軍配鑑に、常盤。

寛延三年十一月、市村座、蹴陣太平記に、楠の妻菊水。

寶曆元年正月、市村座、初花隅田川の二番めに雲の絶間、二世團十郎の鳴神。十一月、同

日本演劇史 第三編 寶曆期 第八章 其の他の江戸に於ける立役 六四三

座「神遊源兵」に河津の後家滿江。

寶曆二年正月、市村座「櫻委見曾我」に大磯のさし。十一月、同座「梅櫻仁輝丸」に千壽次郎。是れまで彼れは女方にして前髪の若衆方を兼ね、又寛延二年の勘平の如く、稀れには立役さへ兼ねたりしが、茲に於いて、全く女方を廢して純然たる立役となれり。

寶曆三年正月、市村座「忠臣」は曾我に鹽治判官さ曾我五郎。「ひらがな盛衰記」に重忠。七月、敵討嚴流島に信田左衛門と月本武者之助。十一月「冠就和黒主」に小野頼風。

寶曆四年正月、市村座「草薙曾我」の二番めに糸屋佐七、寶は京の次郎。五月「三代源氏六條通」に平井保昌。十二月、同座「契情淺草」に五位之介竹成。

寶曆五年正月、市村座「狂愛隨曾我」に工藤。五月「築船勘助島」に岡田喜内と奴友平。十一月、同座「櫻櫻峠吉例相撲」に曾我の次郎。

寶曆六年三月、市村座「梅若菜嫩曾我」に京の次郎。十一月、中村座「將門變東櫻」に佐藤次郎。寶曆七年正月、中村座「日本婦雞音曾我」に非人の工藤二番めに佐野次郎左衛門。十一月、同座「女武者凱陣八島」に頼朝。

寶曆八年正月、中村座「時津風船入曾我」に八幡三郎、寶は京の徳兵衛、二番めに平野屋徳兵衛。十一月、市村座「顔見世機數」に秋田城之介、寶は佐野常世、梅玉と櫻丸。

寶曆九年正月、市村座「二十山蓬萊曾我」に工藤と吃の又平。九月「蘆屋道滿大内盛」に道滿。十一月、同座「阿國染出世舞臺」に細川勝元。

寶曆十年春、市村座「振分登末廣源兵」に重盛、二番めに平野屋徳兵衛。十一月、同座「梅紅葉伊達大關」に義家の臣勝田次郎。

寶曆十一年十一月、市村座「壯士故郷錦」に柄巻師の光もり、寶は光もりの妹近江のちね。

寶曆十二年正月、市村座「殘雪源曾我」に河津の亡魂と鬼王、及び佐々木盛綱。十一月、同座「競歌榮小松」に眞宗宗貞。

寶曆十三年正月、市村座「封文榮曾我」に八幡三郎、寶は京の次郎、及び祐經。十一月、市村座「梅水仙伊豆入船」に梶原平三、物狂ひの所作。

明和元年二月、市村座「誰袖粧曾我」に十郎、二番めに曾我の老母。十一月、市村座「若木花須磨初雪」に花籠の與市兵衛、寶は岡田三郎。

明和二年正月、市村座「色上戸三組曾我」に祐經と小栗十郎、及び常陸小萩（久しぶりの女方）二番めに松井源水。秋、女夫屋遠世小町に黒走。十一月、同座「降就花」に二代源兵衛、占者安部、活兵衛、寶は三條の小銀治。

明和三年二月、市村座「咲増花相生源兵」に鬼王。七月「見櫻機近江八景」に荒木左衛門。

日本演劇史 第三編 寶曆期 第八章 其の他の江戸に於ける立役

座「神迎眼源氏」に河津の後家滿江。

六四四

寶曆二年正月、市村座「標委見曾我」に大磯のまら。十一月、同座「梅櫻七郎丸」に千壽次耶。是れまで彼れは女方にして前髪（シヅメ）の若衆方を兼ね、又寛延二年の勘平の如く、稀れには立役さへ兼ねたりしが、茲に於いて、全く女方を廢して純然たる立役となれり。

寶曆三年正月、市村座「忠臣」は曾我に鹽治判官と曾我五耶。「ひらがな盛衰記」に重忠。七月、敵討嚴流島に信田左衛門と日本武者之助。十一月、源義和黒主に小野頼風。

寶曆四年正月、市村座「草薙曾我」の二番めに糸屋佐七、實は京の次耶。五月、三代源氏六條通に平井保昌。十一月、同座「契情淺草鐘」に五位之介竹成。

寶曆五年正月、市村座「猛愛護曾我」に工藤。五月、築館勸助島に岡田喜内と奴友平。十一月、同座「櫻散時吉例相撲」に曾我の太耶。

寶曆六年三月、市村座「梅若菜嫩曾我」に京の次耶。十一月、中村座「將門裝束」に後藤太。

寶曆七年正月、中村座「日本舞難音曾我」に非人の工藤二番めに佐野次耶左衛門。十一月、同座「女武者助陣八島」に頼朝。

寶曆八年正月、中村座「時津風船入曾我」に八幡三耶、實は京の徳兵衛、二番めに平野屋龜兵衛。十一月、市村座「顔見世機敷」に秋田城之介、實は佐野常世、梅王と櫻丸。

寶曆九年正月、市村座「二十山蓬聚曾我」に工藤と吃の又平。九月、蘆屋道滿大内監に道滿。十一月、同座「阿國染出世舞臺」に細川勝元。

寶曆十年春、市村座「振分盛末廣源氏」に重盛、二番めに平野屋徳兵衛。十一月、同座「梅紅葉伊達大關」に義家の巨勝田次耶。

寶曆十一年十一月、市村座「壯士故郷錦」に柳卷師の光もり、實は光もりの妹近江のちね。

寶曆十二年正月、市村座「殘雪聚曾我」に河津の亡魂と鬼王、及び佐々木盛綱。十一月、同座「競歌榮小松」に眞琴宗貞。

寶曆十三年正月、市村座「封文榮曾我」に八幡三耶、實は京の次耶及び祐經。十一月、森田座「梅水仙伊豆入船」に梶原平三（物狂ひの所作）。

明和元年二月、森田座「睡靴鞋曾我」に十耶、二番めに曾我の老母。十一月、市村座「若木花須磨初雪」に花籠の與市兵衛、實は岡田三耶。

明和二年正月、市村座「色上月三組曾我」に祐經と小栗十耶、及び常陸小萩（久しぶりの女）二番めに松井源水。秋、女夫星達世小町に黒走。十一月、同座「降積花」に二代源氏に占者安部の清兵衛、實は三條の小銀治。

明和三年二月、市村座「咲増花相生源氏」に鬼王。七月、見機機近江八景に荒木左衛門。

日本演劇史 第三編 寶曆期 第八章 其の他の江戸に於ける立役

六四五

九月、忠臣藏に由良之助と月無瀬。十一月、京都山下座、霜降入船東海に倭武者之助。彼れは二十五年ぶりにて、此の時、京都へ上りしなり。蓋し、江戸に於て、彼れは堺町に油店を出だし、音羽屋吉右衛門といひしが、此の年の二月廿九日、其の工場より自火を發して、中村及び市村の兩座をも類焼せしめ、これより世上に憎まれしかば、終に上京に決心せりといふ。

明和四年正月、京都、山下座、傾城大内櫻に山名家來竹垣勇助と山名左京大夫。三月、一の谷に岡部六彌太。九月、楠正行平略卷に正行後に宇治常悅。「出入渡」に八木孫三郎。十一月、市山座、大黒天に名護屋山三。
明和五年正月、京都、市山座、傾城節用集に渡部源次兵衛と細川義元、歌右衛門の天一坊。三月、忠臣藏に由良之助と月無瀬。七月、敵討冥加松梅、天神利生に柳生頼母之介。八月、千本櫻に忠信と源九郎孤と梶原。九月、北條時頼に時頼。十月、巖流島に武者之助。十一月、尾上座、蹄花操太平記に土岐藏人。
明和六年正月、京都、尾上座、傾城麻金花山に今川男之助、油屋庄九郎、羅盤に岡部兵衛と地蔵の五平次。三月、菅原に菅相丞と松王丸。五月、桂川血沙丸太橋に帶屋長右衛門。七月、南來傳授軍法繼に宇部宮公綱と吃の奴。八月、布引の寶盛。九月、身がはりに花舞

樂に求馬の母と秋田城之介。十一月、江戸、市村座、梅顔見勢に和泉の三郎と六十六部實は佐藤忠信。

彼れは、其の故郷たる京都に止まること三年、非常なる喝采と名譽とを擔ひて再び江戸へ下りしなり。

明和七年正月、市村座、富士雪會稽會我に大友常陸之介。六月、一の谷に熊谷。七月、相馬紋日に中將直方と浮島源正。十一月、同座、女夫菊伊豆若綿に伊藤祐清と伊藤九郎、二番めに北條時政。
明和八年正月、市村座、和田酒宴納三組に工藤祐經と吉田の家來熊谷彌惣左衛門。十一月、同座、梅世嗣に音砥藤綱、二番めに佐野源左衛門。安永元年正月、市村座、菅原に菅丞相。十一月、同座、江戸、登橋曳綱坂に渡邊の綱。
安永二年正月、市村座、江戸春名所會我に工藤と重忠と十郎。三月、堀河夜討に忠信。
八月、四天王寺、佛供養に泰の河、藤。九月、忠臣藏に由良之助と勘平と月無瀬。十一月、大阪、嵐座、大常むかで山に立花半人。十二月、忠臣藏に由良之介と月無瀬。

此の時、彼れは大阪へ上りたりしなり。

安永三年正月、大阪、嵐座に油屋庄九郎。三月、近江源氏の佐々木、心中莊實の醫師梅内

左一、「殿流島」の武者之介。九月、「菅原」の菅丞相と松王。十一月、京都、藤川座、「廻廻金山」に津守常陸之介。十二月、「鳴神」（「羅助」）に久米寺彈正。
 安永四年二月、京都、藤川座、傾城鐘鳴波に筑地多門守と七草四郎。夏宮島へ行き、歸りて、「殿流島」の武者之介、「菅原」の菅丞相、「双蝶々」の南與兵衛とせき。十一月、同座、「梅繁盛」鉢木に佐野源左衛門。十二月、「霞浦」に永清。
 安永五年正月、京都、藤川座、傾城柳鶴明にかけや儀三郎と細川勝元。十一月、大阪、角の芝居、「惠寶藏海山名物」に東儀要之助。
 安永六年正月、大阪、角の芝居、「新源雪物語」に園部兵衛と正宗、筑摩祭に田上三左衛門と同弟十内、千本樓に義經と程原。十一月、大入歌舞伎期日に胡粉寶五郎作、實は恩地左近。十二月、日本在赤城鹽籠に由良之助とみかつ。
 安永七年四月、大阪、角の芝居、「金門五三桐」に此村大炊之助と久吉。十一月、江戸、市村座、「開梅梅樹樂」に安達左衛門。
 安永八年正月、市村座、「潤色江戸紫」に安盛。二月、螺千島若菜曾我に工藤と十郎と二條藏人。秋、「湯雪」に園部兵衛と正宗。十一月、「吾嬬森榮楠」に備後三郎と諸葛孔明。
 安永九年正月、市村座、「梅屋隠曾我」に工藤祐經と曾我老母。五月、出入漢に八木孫三郎。
 此の時、彼れは黒船忠右衛門に扮せる四世幸四郎と隙を生じ、中途より部下の俳優

二十六人を率ゐて退座し、直ちに上京せんとせるを、五世團十郎が止めて中村座に其の名残狂言を演せしめ、即ち、

九月、中村座、「忠臣蔵」に由良之助と月無瀬。

此の「忠臣蔵」に大當りを取りて、彼れは得々として其の故郷に歸るを得たりき。今、其の幸四郎と隙を生せし顛末を示さん爲め、劇場年表の一節を抄出せん。

安永九年五月、市村座、女伊達姫花雛子に黙門庄兵衛、友右衛門、奴小万三代め菊之丞、黒船忠右衛門、四代め幸四郎、八木孫三郎、翁代菊五郎、此の興行中、幸四郎、菊五郎、兎角折合悪しく、或は出勤或は不動して、樂屋も二派と成り、遂に、同廿日、菊五郎、孫三郎にて、幸四郎の黒船へ財布を打付け、其れより見物へ向ひ、菊五郎口上を以て、幸四郎儀不實者にて、我が儘を仕り、其上、菊之丞、友右衛門なども私世話を以て、御當地へ下り、御ひいき御取立に預かり、追々立身仕候處、兩人共、幸四郎方へ附離ひ、何事も加担仕り、私一人突出しものに致候段、いかにも殘念至極に存じまする、さて既に眞劍にて幸四郎を刺らんことをし、大勢の者にて取止め、樂屋に運來り、見物へは役者病氣と申して打出し、扱幸四郎は宅へ脇差を取りに遣し、此の仕返しをせんと願立つ、友右衛門、路者も是非返報なさん、と其の騒動いはん方なし、漸く取纏め、其より菊五郎退座して芝居興行も休み

と成り後人々取扱ひしかど、双方とも聞入れず。梅幸是非とも上京せんと支度せし故、御手切りと成りしに、爰に五代り團十郎梅幸に種々異見して、名殘狂言興行の上にて登るべしと首ひしに、強情の梅幸も我を折り、先々代二世團十郎御上取の折、厚く御世話の上、同道にて御當地へ下り、其れより種々心配をうけ、尙更先代四世の恩、其の意しだし難く、仰せに隨ひ、名殘興行の上、歸京可仕、さりながら、後殿御同座被下候は、此の上もなき身の仕合、且つは外聞と申し、此の儀聞届られ、御承知願ひ候と申す。白猿五世團十郎の一座も極まり、九月九日より、中村座にて名殘忠臣殿。さなせ、由良之助、二役。判官、本藏、二役、座頭團十郎。梅幸、ひいき連へ摺物を配り、其の發吟に、
小六月取上られし扇説。

又、二段め濟みて、團十郎、菊五郎名残りの口上ありて、日々、狂歌一首づゝ詠じ、其の二三、取持ちは江戸市川の曾我ひいき團十郎と菊五郎かな
會稽の忠臣ぐらは大あたり、朝の六つから五いや判官
隣町菊之丞座もござれども、ち自慢の菊五郎じろ
見物は喉かけて鳴きわたる尾上の鐘のひやく音羽屋
當狂言、殊の外、大入にて、此の時、羅漢座の前にさうい捷敷といへるを新規に拵へ、道具の置場もなき租の大入なり。云々。(別に、此の争論の始末を記せしもの「神代杉目論」)

及び舞臺意氣難あり。前者は版本、後者は寫本として傳へらる。(斯くの如くして、京都へ上りたる彼れは、)

同年十一月、山下座「其味菊旗揚」に楠正成。
天明元年正月、同座「都濱萩」に細川隆元。「赤穂鹽竈」に由良之助とあみつ。「和田合戦」に淺利興市。「非人仇討」に高市武右衛門。七月、筑摩榮に田上平左衛門と増田十内。「平假名」に延壽と重忠。十一月、同座「新館富貴石」に尾子左衛門。
天明二年正月、同座「殿下茶屋」に早瀬佐島と幸右衛門。十一月、大阪、嵐座「圖乘多萬國渡海」に伊東祐清。
天明三年二月、大阪、嵐座「忠臣蔵」に由良之助と義平。三月、「伊勢物語」に森嶋藤太と紀有常。「非人仇討」に春藤次郎左衛門。「布引瀧」に義賢。「鬼一法眼」に鬼一と大藏卿。「秋葉權現」に玉島逸當。十一月、同座「蘭菊女夫狐」に菅藤實、實は白桃仙人。十二月、「平假名」に延壽と重忠。

此の興行半ばにして、十二月晦日死せりき。
彼れは頗る美貌なりきといへり。而して、女方時代には所謂「色女方」と稱して、艶冶なる科白を尤も得意とせり。「器量」といひ、和らかな仕打といひ、申分はなき筈、若し

くは、色女方にて、第一愛あり、其の上、任内よく、當世にかなひたる上手と評判記にいへるが如く、和かみ又は戀愛を表はすに長じ、即ち、鳴神の雲の絶間の如きは最も其の適例たり。而して、所作事は甚だ巧みならざりきといふ。

前にいへる如く、女方にして若衆方を兼ね、遂に専門の立役に轉じて之れに成功せるは實に前例に見ざりし、異數の事なり。彼の早川初瀬の如き、芳澤あやめの如き、玉澤林彌の如き、藤村半太夫の如き、又、山下金作の如き、いづれも女方より立役に轉じたりしも、其の結果は失敗に歸して再び女方に復したりしに、彼れは即ち然らず、而も、色女方の藝とは全く相反對せる武道實事に於て成功せり。彼れが立役に轉じたる翌年、巖流島の武者之介に扮せるより察するも、彼れは其の岳父たりし坂東彦三郎に私淑せるものゝ如し。而して、彼れが如何に武道實事に重きを置きしかは、其の自身の藝談によりて知らる。

狂言により幾役も勤むるうち、下駄役のは其の衣裳がたちにて其れぞ見え、任内とてもなり易く、言損ひも耳だぬものなり。只々心を用ひ候事の第一は、露上なる役、武道ほどむつかしきものはなし。侍は同じ侍のうちにて、其の身分のほど、其れ其

れに見える任内は、臍の下より其の心持第一にて、行儀作法正しくする事、特に御江戸は武家方多き申なれば、尙以て工夫第一なり、

といへり。尙ほ、其の後の當り藝を見るも、由良之助の如き、佐野源左衛門の如き、秋田城之介の如き、大かた此の種なるのみならず此の以外に於ては往々失敗に歸するを免れざりき。寶曆十一年の役者初白粉に曰

梅幸のくせと申さば、或は中

日本演劇史 第三編 寶曆期 第八章 其の他の江戸に於ける立役



（リ）「物語言生且」助之其由の耶五菊

道が、つた事、或は荒事等を勤められしが玉に産。既に近ごろ荒事を勤められしが、元より上手の上なれば、透いた所は見えれども、たゞ堅い實事にて、古舞水(彦三郎)の面影がよし。

而して、同書の評者は更に彼れに對する希望を述べて曰く、

舞臺も長くなく、さらばと睨んで、三味線の合方にて入られしは、どうもモソット舞臺に居られたらば、と見物の思ふほどにありたし。

と。然れば彼れが缺點は餘りに技藝に熱心なる爲め、往々見物をして倦ましむる事になりきと見ゆ。且つ、其の動作の綿密にして餘りに技巧に走れる爲め、藝風のセ、細しくなれるも亦彼れが弊なりき。安永五年の役者大通鑑に之れを指摘して曰く、

成ほど、いつでも衣裳の物ずきはキツミよいぞ。……と、かく些細な事に心をこめずとも、大手にサク／＼としてもらひたい。……當時梅幸ほどの和實の仕内、他にする者しなきに、残念は、せりふに腹切といふことあれば、腹切るふりを付け、茶を飲むといふせりふあれば、其のふりを付け、それ／＼の文句に合はし、ふりを爲らるゝ事をわいてせられたら、どうもいへぬに、さりさは惜い事。

といへり。又、役者綱目にも、稍同じ意を二層明瞭に記して曰く、

一體、花ある仕内ゆゑ舞臺賑やかなり。其の上、いつまでも、衣裳花やかにてよし。然れども、此の人舞臺好ゆゑ、人のせらるゝ所をも推退けてせらるゝやうなる所あり。然れば時によりては、みそごき所あり。

と。謂はゆる、舞臺すきといひ、衣裳好みといひ、彼れは衣裳の選擇に重きを置きしあまり、屢々、其の役柄よりも立派なるものを用ひたりといふ。又、身振の頻繁にして動き過ぎるといひ、何ぞ近ごろの菊五郎(五世)と相似たるや、而して、斯の如き缺點を有せる彼れは、其の晩年に至り、一種自家の技藝觀を持して、之れを舞臺に實行せん事を試みたりき。即ち、天明四年の役者千兩箱に、彼れが死せる前年に演せし、非人仇討の春藤次郎左衛門の在來の式と異なるを評して、

獨りて戀の間から、誕生日の祝ひとて羽織の裏の紋付をヒツクリかへして着てのぼやき、骨桶などあしらうて餘り仕打過ぎたぢやないかい。 頭取 此の人は近年性根に申す事多く…… 初日講 サア、其の性根も、一場に三つ四つあるが、仕打の性根、一場皆變へて思入ばかりしらるゝわ。……

次に、其の「鬼」の大藏卿の在來のよれるを擧げて

頭取 イヤ、昔よりは仕來つた通りにて、此の場には性根がすくなうて立者らしうてよく、

と冷評せり。是れにより見れば、彼れが謂はゆる性根なるものは今日の謂はゆる「腹藝なるもの」と軌を同じし、即ち寫實を技藝の標準として在來の式を變更せんとせるなるべし。

彼れが俳優生活は前後五十五年にして、而も其の出身の京都たりしに拘はらず、最も江戸に久しく留まり、中村座に三年、森田座に三年、市村座に廿五年、合せて三十年間の生活を其處に送り。而して、彼れが妻は阪東彦三郎の女たりしが、後に二世廣次の女を娶りたり。實子に丑之助あり、此の丑之助、即ち二世菊五郎たりしが、幾くもなく夭折し、寧ろ尾上氏の門派は彼れが弟子たりし松助によりて盛んとなり、松助の事は次編に於て言ふべし。

菊五郎は平生天誦宮を信仰し、且「菅原」の菅丞相に願掛したり。
世俗に、彼の谷中の破戒僧、延命院日當を菊五郎が子なりといふは即ち此の丑之助に

當れど、眞偽詳かならず。

菊五郎よりは先輩にして、同く大阪より出身し、江戸に立役の名優たりしもの萩野伊三郎あり。伊三郎の事は既に第二章にいへり。而して、四世團十郎と二世廣次と助五郎と及び彼れを加へて、第二の四天王と稱すると同時に、菊五郎を第二の獨武者と稱したりき。尙ほ、此の他、同時代の主なる立役を左に列擧せん。

二世澤村宗十郎、諭子、正徳三—明和七。は富澤門太郎の弟子にして富澤長之助といひ、女方たり。享保十九年、始めて江戸の中村座へ下り、竹中歌川と號し、後に竹の字を忌みて瀧中歌川といひき。然るに、寛保三年、元服して立役に轉じ、名を歌川四郎五郎と改め、専ら色事師を勤めしが、終に初世宗十郎の知る所となり、寛延二年九月、其の養子となりて二世宗十郎と號せり。始めは和事のみをせしが、後には實惡を専らとし、其の和事には、曾我の十郎、左金吾頼兼、實惡には、工藤祐經、輝の意休など當り藝たり。其の他、濡れ事、武道、やつし、位事、いづれにも秀で、器量至つてよく、脊すらりとして、上品なる生れ、特に其の實惡は、こわき中に愛敬ありて、男女共に最負多かりきといふ。明和六年冬、京都に上りて尾上衆助座の旭丸源氏鑑に熊坂長範に扮

次に、其の「鬼」の大藏卿の在來のによれるを擧げて

六五六

頭取 イヤ、昔よりは仕來つた通りにて、此の場には性根がすくなうて立者らしうてよく、

と冷評せり。是れにより見れば、彼れが謂はゆる「性根」なるものは今日の謂はゆる「腹藝」なるものと軌を同じし、即ち寫實を技藝の標準として在來の式を變更せんとせるなるべし。

彼れが俳優生活は前後五十五年にして、而も其の出身の京都たりしに拘はらず、最も江戸に久しく留まり、中村座に三年、森田座に三年、市村座に廿五年、合せて三十年間の生活を其處に送れり。而して、彼れが妻は阪東彦三郎の女たりしが、後に二世廣次の女を娶りたり。實子に丑之助あり、此の丑之助即ち二世菊五郎たりしが、幾くもなく夭折し、寧ろ尾上氏の門派は彼れが弟子たりし松助によりて盛んとなり、松助の事は次編に於て言ふべし。

菊五郎は平生天竺宮を信仰し、且つ「菅原」の管丞相に願掛したり。世俗に、彼の谷中の破戒僧、延命院日當を菊五郎が子なりといふは即ち此の丑之助に

當れど、眞偽詳ならず。

菊五郎よりは先輩にして、同く大阪より出身し、江戸に立役の名優たりしもの荻野伊三郎あり。伊三郎の事は、既に第二章にいへり。而して、四世團十郎と二世廣次と助五郎と及び彼れを加へて、第二の四天王と稱すると同時に、菊五郎を「第二の獨武者」と稱したりき。尙ほ、此の他、同時代の主なる立役を左に列擧せん。

二世澤村宗十郎、翁子、正徳三—明和七は富澤門太郎の弟子にして富澤長之助といひ、女方たり。享保十九年、始めて江戸の中村座へ下り、竹中歌川と號し、後に「竹」の字を忌みて瀧中歌川といひき。然るに、寛保三年、元服して立役に轉じ、名を歌川四郎五郎と改め、専ら色事師を勤めしが、終に初世宗十郎の知る所となり、寛延二年九月、其の養子となりて二世宗十郎と號せり。始めは和事のみをせしが、後には實惡を専らとし、其の和事には、曾我の十郎、左金吾頼兼、實惡には、工藤祐經、輝の意休など當り藝たり。其の他、濡れ事、武道、やつし、位事、いづれにも秀で、器量至つてよく、脊すらりとして、上品なる生れ、特に其の實惡は、こわき中に愛敬ありて、男女共に最負多かりきといふ。明和六年冬、京都に上りて尾上衆助座の旭丸源氏鑑に熊坂長範に扮

し、頗る好評なりしが、病を獲て、翌七年八月三十日に彼の地にて歿したり。歳五十八。

宗十郎には二子あり。兄は澤村四郎五郎といひ、一たび三世市川八百藏となり、後に助高屋高助といへり。弟は澤村田之助といひ、後に三世宗十郎となれり。二人共に次期の名優たりき。

三世市川團藏(市江幸保四—安永元)は木挽町の劇場に關係せる又兵衛といふ者の子にして、狂言作者坂東田助に養はれ、又俳優坂東又九郎は實家の姻戚たりしを以て其の門下に入り、坂東次郎三郎と稱せり。然るに、後、初世市川團藏の弟子となり、市川次郎三といひ、元文四年十一月に至り、其の養子となりて團三郎と號し、翌五年冬、はじめて三世團藏となりたり。彼れは江戸根生の俳優たりしに拘はらず、屢京阪に往來し、殆ど其の生涯の大半を彼の地に送りたりき。團藏の長所は矢張武道事にして、男、小がらなれども、一體海老藏(二世團十郎)の藝風ありて、三が津修行の巧者。まかし、事によりては、餘り氣轉すぎて、こせつく所ありと、役者綱目に評せる彼れが伎倆の一斑を知るべし。

二世中村傳九郎(舞鶴、幸保四—安永六)は彼の元祿期の名優たりし、初世傳九郎の姪にして、後、又、八世勘三郎たりき。蓋し、初世傳九郎が一たび四世勘三郎たるを辭してより、三世勘三郎の子入りて五世勘三郎となり、而して更に、六世勘三郎の名は初世傳九郎の弟によりて襲がれき。六世勘三郎には二子あり、長男は即ち明石といひ、後に七世勘三郎となり、次男は勝十郎といひ、後に二世傳九郎となり、又八世勘三郎たりしなり。但し、彼れが勘三郎として太夫元たりしは、安永四年冬より其の死に至るまで、僅に三年間にして、其餘は單に俳優としての生活を取れり。然れども、彼れは此の社會に於ける名家といふに止まりて、其の實は其の名に及ばざりしが如し。只、朝比奈は初世相傳の藝として屢これを演じ、又舞踊に於ても當時の上手と稱せられき。而して、其の門下に次期の天才たりし、中村仲藏を出だし、は吾が演劇史に大書すべき事實たらん。

六世森田勘彌(殘幸、幸保九—安永九)は即ち森田座の太夫元にして、實は狂言作者中村重助の子たり。始め、瀧中重の井と號して女方となり、元文五年、宗十郎の門に入りて澤村重の井といひ、更に延享三年冬、澤村小傳次の名を繼ぎ、愈女方として好評

第九章 江戸の敵役等

市川宗三郎—中島三甫右衛門—二世大谷廣右衛門—道外方—
松島茂平次—嵐音八—鶴屋南北—中村吉兵衛—佐野川市松若
衆方

此の期の敵役にして最も頭角を現はせるを二世松本幸四郎とす。而して彼れが四世團十郎となりて立役に轉じたることは既に前に述べたるが如し。今、これに次いで主なるものを順次に言はん。
市川宗三郎、食幸四—寶曆二は初世團十郎の門下にして市川勝五郎といひ、初め市が谷八幡社内なる小芝居に出でたりしが、正徳の末、大阪へ轉じて漸く其の名を知られ、享保九年、更に京都へ上り、此の頃より愈地位を高めたりしが、享保十六年冬、江戸へ歸り、其處に勤続すること二十餘年にして死せり。『役者大全』に彼れが藝風を評して曰く、

▲問ふて曰く、此の人、出せめられてよりドツと人を笑はさるゝ、仕内なし、然ればナト

不自由な藝かき存する。▲答へて曰く、前の山中平九郎、早川傳五郎、藤川武左衛門、片岡仁左衛門、其のほか名人の敵役、笑はせて當りをさるゝことなし、實惡といふ所へ魂攝みたるたしなみ故、篠塚次郎、左衛門を呑込み、シツトリさせし仕内、上手さいふには折紙にても出しませう、殊に三が津を経ていつ方にも當てられ、別して江戸に久々つこめられ、いさゝか後れになられしばかりにて、此の人には功ありき、云々。

されば、彼れが藝はマジメなりしと見ゆ。而も、宗三郎が自ら語りし藝の秘訣にも「實惡は丁寧にするほど増し可笑みのなきがよし」といへり。

中島三甫右衛門、元禄十五—寶曆十三は初世中島勘左衛門の門下にして、初め中島勘四郎といひ、湯島天神社内小芝居へ現はれたりしが、正徳四年十一月、始めて市村座へ出で是れより大芝居を勤績し、一時は大谷廣次と相顔顔せり。男つき凄じく大きにして、聲に一流あり、悪王などにして、冠に鬚、凄じくかけさせては、つゞく人なしと、役者大全に評せるが如く、彼れは容貌魁偉にして最も公家惡を得意とせり。尙ほ所謂鬚鬚は此の優によりて創められたり。

二世大谷廣右衛門、延享四は初め大谷龍左衛門といひ、延享二年十一月より師名

を継ぎて二世廣右衛門となり、滑稽を兼ねたる敵役を以て其の専門とせり。
 ●二世坂田半五郎●彩●曉●享保十九―天明三は其の系統を彼の元祿の名優坂田藤十郎より引けり、何となれば初世半五郎は二世藤十郎の門下なればなり。蓋し初世半五郎は元祿後半期に實悪を以て江戸に稱せられしが、享保廿年、五十三歳にて歿し、二世の名は仙石彦十郎の子によりて繼がれき。彦十郎は仙石彦助の弟子にして、後に田川彦十郎といひ、道外方たり、其の子を仙國佐六といひ、始めは菅屋町の小芝居へ出でしが、寛保二年冬、はじめて市村座へ現はれ、仙國左十郎と號して敵役たりき。是れより次第に昇進して、延享四年春、中村座にて菅原の春藤玄蕃と奴宅内に好評を博し、寛延二年冬に至り、終に二世半五郎となれり。器用なる藝風にて、見物の嬉しがる人なりきと、役者綱目に評せり。

以上は敵役の主なるものなり。尙ほ道外方にては、松島茂平●次●元祿十三―明和二三あり。彼れは始め大阪に出身し、彼の百人一首、山田及び玉川の三優以後に於ける名手たりき。寶永三年、大阪の嵐三右衛門座にて、嵐喜代三郎が八百屋お七を演せし時、彼れは金子吉左衛門の勤むべかりしおてゝの役に代り扮してより好評を得

享保八年の評判記に始めて、上々吉の位に進められ、尙ほ同十八年には、極上々吉に昇されたり。されば、前の元祿期には京阪に於て既に一方の名優たりしなるが、元文三年、江戸へ下り、これより寶曆期の道外方として其處の劇壇に持囃されき。彼れが痴漢に扮する秘訣に曰く、

馬鹿は下前を下げて着るがよし。せい高き人は堅じま、低き人は横じま、鈍に見えらるなり、

と。尙ほ彼れが子に吉三郎あり、二世團十郎の門に入りて市川八百藏(初世)といひ、寶曆の初めに、立役として好評なりき。
 茂平次のほか、南北及び音八の二人あり、嵐音八(和琴元祿十二―明和六は京阪の出身にして、其の同胞は岸喜七、秋田彦九郎、小佐川清三郎、笹尾音十郎など孰れも俳優なりき。初世嵐三五郎の門に入り、音之助といひて大阪竹田の子供芝居に出でしが、享保十七年、江戸の森田座へ下りてより死するまで三十數年間、道外方の名手たりき。又、鶴屋南北(寶永五―寶曆十)は南北孫太郎の門下にして、其の江戸に於ける名聲は寧ろ音八に越えたり。而して、此の二人の外に中村吉兵衛(寶享元―明和二三)あ

り江戸に於ては茂平次よりも先輩の道外方にして、二朱判と異名せられ頗る有名なりき。

六六六

更に同時代の若衆方には、佐野川市松(盛府、享保七—寶曆十三あり。彼れは伏見に生れ、其の父は武士なりきといふ。京都四條南側芝居の出方甚藏といふものに養はれ、且つ女方佐野川萬菊の門に入り、始めて市松と呼べり。寛保元年春、中村座へ下り、高野山心中の小姓衆之助に扮し、當時彼れが袴として着せる石畳の模様は盛んに市井の婦女子によりて模倣せられ、今も謂はゆる「市松染」と稱するもの即ち是れなり。延享元年、京都へ歸りしが、其の冬再び東下し、寶曆の半ばに至りて又女方をも兼ね殊に、女方にては世話事に妙なりき。「中古戯場説」に彼れを評して、

盛府初町は名人にあられども、一代の上手なり。にくいほど面白き處のある藝なり。といへり。

第十章 東西の女方

瀬川菊之丞——長所の第一——彼れに對する褒貶——彼れが傑作——
「無間の鐘」——「道成寺」——「石橋」——「女鳴神」——彼れが技藝觀——「女方」
秘傳——佐野川萬菊——山下金作——三條勘太郎——霧浪池江——佐野
川花菱——三世あやめ——彼れが女捕——瀬川菊次郎——高實兼自然
主義——嵐小六——中村宮十郎——辰岡久菊——淺尾元五郎——三世あ
やめ——中村衆太郎——中村喜代三郎——二世菊之丞——二世吾妻藤
藏——中村松江

立役もしくは敵役の俳優が、京阪と江戸とを去來せるにかゝはらず、彼等は、大かた其の根據を或る一方に定め、例へば、大阪役者にして江戸に下る事あるも、そは一時限りにして、直ちに其の根據地へ歸るを普通となせり。茲を以て、余は叙述の便宜上、彼等を京阪と江戸との二つに分類せしが、而も、女方の俳優に至りては、屢此の分類に困難なる場合あり。何となれば、女方は立役よりも東西を去來すると頻繁に

して、殆んど其の根據の何地にあるかを決すること能はざればなり。而して、斯くの如き現象は此の時代に於いて愈甚くなりき。然れば、以下女方に限りて東西の區別を混じ、之れを一所に述べんとす。

さて、其の劈頭第一に擧ぐべきは瀬川菊之丞（路考元祿四—寛延二）ならん。彼れは中村十藏より長ずること三歳、二世圓十郎より若きこと四歳なり、未だ其の出所を詳かにせず、始めは濱村屋吉次といひて大阪道頓堀に色子として出で、正徳二年五月大阪の荻野八重桐座へ始めて女方として出で、瀬川菊之丞と號せり。此の改名に就いては最も興味ある逸話あり、菊家影（キクケガタ）の一條を左に抄出せん。

瀬川菊之丞の名は京都の俳諧師仙鶴（セウカク）が深く考付けしこや。昔瀬川采女（サイメ）といひし人、太閤秀吉に仕へ、朝鮮征伐の時、戦場（ウラバタ）に供せられしに、妻に菊といふあり、真女の操正しく、采女（サイメ）職守の留守を待ちわびて凱陣を待ちあかしぬ。折から、渡海の船便に皆家々よりの贈物我し、船へ積み揚げある處に菊ばかりは、只戀しゆかしく凱陣を待つとの文ばかり一つの包みとなして船荷に積みしこる、折ふし風烈しく、船危くして、盡く荷物海へ流捨りぬ。不審や、菊が一通の輕荷と雖し、眞に夫を慕ひし一念に

や、名賤屋の海邊へ流若く。大關これを御覽ありて、菊が真女の心を感じ給ひ、采女はすぐにお暇をたまはりて、唯一人先へ歸されけり。是れこそ女たるべき身の鑑なり、女方に比なき名なるべし、夫婦の名を一つに合せて瀬川菊之丞と名づけたり。

と。蓋し、瀬川といふは、承應のころ瀬川初太夫あり、其の門下に瀬川竹之丞あり、元祿に盛なりしかば、菊之丞は此の姓を冒し、而も彼の采女（サイメ）の故事によりて菊之丞といひしならん。是れより、享保五年三十歳の頃まで俳優としてさしたる名なく、一旦廢業して京都夷川通りに商家を營みしに、享保七年十一月、再び女方として現はれ、且つ同地都萬太夫座の座元となり、漸く世人に注目せられ、同十一年冬、己が實弟瀬川菊次郎を座元たらしめ、己れは翌十二年冬より始めて、上上吉の地位に進みたり。

享保十五年十一月、江戸へ下りて中村座に現はれき。是れを彼れが江戸に於ける最初の出勤とす。留まること七年にして名聲愈高かりしが、元文二年冬、京都へ歸り、五年を経て、寛保元年、再び江戸へ下り、是れより、寛延二年九月二日、五十九歳を以て病死するまで、其處に女方の極上上吉として持囃されき。

菊之丞が長所の第一は其の容貌の美はしき事と及び態度の女らしきにありたり。
『菊家彫及び役者大全』に曰く、

六十歳に今二三年たゝぬといふまで美しく、振袖の似合ふといふは合點のゆゑ程
の事。舞臺はさもあれ地で見ても其の美しき、世界の色を集めたるやうに艶ゆべき
と。而して其の美貌は、無論、彼れが天分なりきと雖も、而も態度の女らしかりしは
全く彼れが平常の素養に歸せざる可らず。彼の瀬川采女が妻にあやかりて其の
藝名を附せるが如き、彼れが用意を知るべきのみならず、延享三年、五十七歳の時、自
ら女方の嗜みを述べたる歌に、

おもかげの變らなでしこ秋ふけて

我が起臥しを人に知られな

といへる、彼れが漸く年老い色衰て自ら其の面影を耻づるの意は此の一句に見え
たり。而も、是れ宛然たる婦女子の情にあらずや。尙ほ、彼の芳澤あやめ若しくは
尾上菊五郎が女方にして立役を兼ねたりしに拘はらず、菊之丞は女人以外に扮す
るを以て無上の耻辱とし、之れを避けたりき。延享四年春、市村座にて、玉櫛粧會我

に、彼れの役は小姓吉三、實は木曾の若君清水冠者なりしかば、菊之丞は直ちに不服
を稱へ、我れは女方なり、女一道の役ならば勤むべし、若君とても男なり、よつて我れ
勤むるとならず、この事に、狂言作者は彼れが若衆方を其の作のヤマとせるだけに
大いに困じ、終に吉三の本體は山吹御前にて、源氏を憚り世を忍ぶ爲め小姓となる
といふ筋に變じ、始めて彼れの承諾を得たりといふ。要するに、彼れは男姓に生れ
ながら其の言行は常に女姓を以つて自ら居りしなり。

されば、當時の劇評家が彼れを褒揚したる第一義は其の藝風の女らしき點にあり
たり。延享三年の、役者三叶和に同時代の二世芳澤あやめと比較して、

あやめ殿の口上、春の水のやうにサツマリと致した武道事はよけれど、藝の踏を考
ふれば、極の字のすはりし菊股若衆形で當てるの敵役を取つて扱げ、きめつけて當て
るのさいふやうな姿は女子、心は立役であるさいふ事、みぢんなく、いつても女の情を
本として、ホンツヤリとしたホンの女子よりつりとる仕内、女形の形の字のいらぬは
此の御人、

といへり。而して、彼れに對する非難も亦此の點より生せり。延享元年の、役者子

住算に白く、

六七二

孫子にも手を引かるゝ時分に、ペタ／＼とした舌付、ヌラセリ／＼に至りては申々打越し

ては一句の譯が聞えかれ
る小音殊に、道成寺の石橋
のミ、飛んづ跳ねつゝの所作
事ではめ句いたさるゝは
マツツと初心の業の事、

と。蓋し彼れは音調の低く、
且つ専ら所作事得意とし
たればなり。尙ほ延享四年
の役者矢的詞にも、

此の人の所作は、三味線五
銚に地が五六人、芝居中ひ



(りよ「全大顔似」)「鐘問無」の丞之菊

びくばいりに、石橋、道成寺、などいふ事ならればハネ申さず、
云々といへり。

斯くの如く、菊之丞の最も得意なりしは所作事なりしが、而も彼れが傑作として著
名なるを「無間の鐘」と「道成寺」と「石橋」との三とす。「無間の鐘」は遠州小夜の中山の傳
説を脚色せるものにして、是れより先き、元祿二年、大阪荒木與次兵衛座の「傾城小夜
中山」に谷島主水が傾城裏棄に扮し、始めて無間の鐘をつく所作事を演じ、後、元祿十
四年、京都早雲座にて、芳澤あやめが此の狂言を演じ、當時、所作事だけは水木辰之助
が勤めたりき。而して、菊之丞が始めて之れを演せしは、享保十三年、京都の市山助
五郎座にて、庄屋六右衛門娘お島といふに扮し、手水鉢を鐘に擬して之れをうつ仕
打あり、次いで、江戸へ下りたる翌年、即ち享保十六年の春、中村座の「傾城福引名護屋」
に傾城葛城に扮して再び之れを演じき。傳へいふ、彼れは初日に舞臺にて金を包
むものなかりしかば、衣装の袖を引断りて之れを用ひ、其の思入よかりしより翌日
より其の通りに演じたりと。而して、此の藝は直ちに操りの浄瑠璃にも上せられ、
即ち、元文四年、大阪竹本座に於て、ひらがな盛衰記に無間の鐘の一節を加へしが、其
の地の文に、袖ひきちぎり三百兩、包むに餘まる悦び涙といへるは、菊之丞の彼の仕
草を其のままに寫せるなりき。尙ほ、彼れは、其後、寛保二年にも江戸にて之れを演

じたり。

六七四

道成寺は是れより先き、初世柳山小四郎が謡曲を改作して演じたるを嚆矢とし、當時其の節附けをなせるは元祿時代の俗曲家として名人たりし岸野治郎三なりき。而して二世小四郎は輕業にて之れを演じ、又水木辰之助に至りて始めて鐘入りの所作事をなし、後、初世萩野八重桐は是れを用明天皇の淨瑠璃に脚色して演せしが、菊之丞は彼の無間の鐘を演じたる享保十六年の六月、始めて傾城道成寺と題して之れを演じ、更に寛保四年五月、中村座にて百千鳥娘道成寺を出せり。而も後者は前者よりも一層謡曲の羈絆を脱して歌舞伎的の趣味多きを見る。

石橋も道成寺と同じく謡曲より翻案せられて、古來より歌舞伎に上場せられ、荒木與次兵衛、山下又四郎など立役によりて演せられしが、菊之丞は其を女方の役に改め、此の兩優の風を折衷して一機軸を出だせり。即ち享保十五年春、中村座へ下りし時、風流相生獅子と題して之れを演じ、當時謡曲家寶生氏に聞きたる秘訣に、自己の意匠を折衷せりといふ。而して此の後は享保十九年に一度、寛保二年に一度、いづれも之れを演じて喝采を得たりき。尙ほ其他、淺間が嶽、檜踊、萬の葉、羽衣な

ど、彼れが成功の藝たりし所作事は殆んど枚擧するに遑あらず。

彼れは斯くの如く所作事に妙なりしと雖も、彼の元祿時代の水木辰之助の如く、全く地藝に拙なりしものに非ざりき。即ち所作事以外に於ても當り藝の多きものうち、女鳴神の如きは最も彼れが藝風を代表するに適當なるものなるべし。此は例の二世團十郎によりて創められし鳴神上人を女姓に翻案せるものにして、寛保三年の春、市村座の春曙廓會我の二番めに之れを演じ、即ち彼れの扮せるは大磯の女郎屋三浦屋の後家お三輪、實は佐藤庄司が娘信夫にして、生付き嫉妬ぶかく、髪のたけ早く延びて一丈あまりになるゆゑ、切捨て、後家留にせりといふ筋にして、先づ一番めに、

會我の十郎に戀慕し、其の戀を叶へん爲め、葎人形の所作事、次ぎに、義經の若君を連歸り、蟬折の笛より事あらはれ、離儀するを頼頼に助けられ、五郎時致が海へ投ぜしヤサカリの珠を取揚げ

る件あり、二番めに移りて、

十郎が虎を觀賞するを疑み、兄忠信(彦三郎)が諷むれども、聽入れぬゆゑ、髪を切られて

雪ふりの中へ逐出され、門の屋根へあがり、祇言のさまを見ながら身をあせり、盃の酒
飲まさぬく、と氣ソッロミなり、薄ドロにて酒を吸取り飲干す

妻みの場となり、次ぎは其の大詰、即ち鳴神の件にして、

緋の衣、淺黄の花朝子、片手に水晶の珠敷、鈴を振り、殊勝に出で、壇場へ上り、暫くして、齊
藤五(菊五郎)の若衆姿、松虫の紐を打つて出で、其の餘は柏庭の鳴神の通りとは雖も、路
考も梅幸も充分の色氣あり、諸見物酔へるが如く見物したり。大切に大荒れとなり
て、曾我の五郎(龜藏)、篋笠大竹を持ちて、路考を本舞臺へ押し返して幕。

其のつぎは、曾我の夜討の場にして、

十郎に取りつき、懺ます仕内、六尺もある油氣しなき亂れ髪、白の紗綾にて空色の雲を
散らし、白無垢の五重れ、白縮緬のしごき帯、舞臺を暗くして薄ドロにて切幕より出で
し、氣候は五月節句過ぎなるに、寒けだつさいふ者多かりし

とぞ。尙ほ、其の大詰には、白衣観音となりて現はる、筋なりしが、當時或る人に對
つて彼れは其の用意を語りて曰く、

一鉢、鳴神は女にて、十郎にぞつこん惚れ、散工藤を討てば、十郎は討死すると知れし等
ゆゑ、男を殺しとなく、それゆゑ、逆澤湯の鎮を瀧に封じ込みしさいふが狂言の大筋

なり。我れは只其の大筋に反かぬやうにさばかり心得、比丘尼にはなりしかど、十郎
を片時も忘れぬさいふを專一に心づけしなり。切の幽霊、又、白衣観音などは、やはり
常の女方の顔の拵へに變はるこゝなし。さばき髪、の長きが故に、懐くも見えしなら
ん。幽霊なれば、若女方の顔の拵へに案じなどして、凄く見せんとするは、色淫の
仕内にて、女方の心氣氣にあらず、

と。彼れが技藝観は、畧これにて覗ひ得べきなり。又、菊之丞の「**女・方・秘・傳**」なるもの
あり、左に掲げん。

所作前に舞扇は要を水につくべし。足袋は皮足袋が真きものなり。最後、一中半太
夫、河東の所作は狂言をする心にて振りをつけるがよし。

番生の杖のだけは、乳より上にて切るがよし。人間のは乳より下がよし。是れ信田
妻の所作に入るこゝなり。

女の嘘に惚れて抱きつく時は、男の兩の手の上より抱きつき、顔を横へ向けるなり。
眞實惚れる時は、たゞ左の方の下へさし込み抱きつけば、眞のやうに見ゆるなり。

女の腹立つ時は、せりふより前に先づ泣くものなり。

家老の女房はすべて不器量なる氣持にてすることなり。

眉毛濃くは墨にてつくらぬがよし。つくりては恐く見えるなり。風俗よく見せるには、帯の腰の處へ小さき蒲團を入れて、布にて巻くがよし。年のよらぬは、堅紅なやき、藍さまに顔へぬれば、皺はよらぬものなり。女方が女のひいきあるは甚だわるき事にて、女房になどならんと思はれるは悪き事なり。男のひいき多く、あのやうな女があらばと思はるゝやうに望む事なり。又、女中のひいき受けるは、自分の物好きとする、櫛、簪、帽子、帯、女中方の氣に入るやうに風俗して、ち屋敷がた、女郎、娘も眞似致さるゝやうに願ふなり。然れば同じ女に思はれるが女中びいきなり。

是の最後の一節、殊に彼れが本領を見るべし。而して、彼れは死に臨める時、髪を結び、浴をとり、衣裳を改め、帽子をかけ、枕元にて百萬遍を繰らせながら、芝居の者共に暇乞して、瞑せりといふ。

菊之丞が身振り、右の手を右の足へ押し立て、左の手を前へつき出し、頭をふつて見ることが難なりきこと。

佐野川萬菊完三——延享四年が中村十藏の實兄たりし事、及び幼時より藤川繁右衛門が抱たりし事は、既に第一章にいへり。彼れは幼名を次郎三郎といひ、十六歳に

して初めて萬菊と號し、舞臺へ現はれて専ら若衆方なり。就中、篠塚次郎左衛門が赤穂義士の大岸宮内を演せし時、彼れは其の子力太郎後世の力彌に扮して大當りを取り、正徳三年より其の位附、上上吉たり。而して、翌四年十一月、大阪の姉川座にて、女三庄太夫の狂言に三男の三郎といふ實惡の役を若衆方にて勤め、大高評を得たりしが、翌正徳五年十一月廿五歳より初めて若女方となり、次いで、享保三年十一月、江戸へ下りて中村座へ現はれ、是れを最初として、彼れが江戸の出勤は前後三度合せて六年、其の他は大かた京阪の間を往來し、殊に、享保九年の冬よりは、京都に座元たること殆んど五年間なりき。寛保の初め、彼れは足痛を病み、舞臺の動作に憚めるを以て、是れよりは専ら白をいふのみの役をとりしが、延享三年冬より十吉と改め、延享四年七月十九日、終に五十八歳を以て死せり。

彼れは、菊之丞よりも先進の俳優たりしが、其の晩年には、聲名遂に後者に及ばざりき。而して、菊之丞が所作事に得意なりしと相反して、萬菊は地藝を長所とし、殊に女武道と辯舌とに秀で、いか程むつかしき白も、やすらかにいひ流せりといふ。蓋し、是れ菊之丞の及ばざる所なりき。

萬菊には養子ありて、彼れが死後、十吉の名をつぎしが、早世せり。又、門下には市松及び千藏の二人あり。市松の事は已に前章にいへり、千藏は女方なりしが後に廢業して長唄うたひとなり、富士田吉次といひき。

山下金作（寛延三）は初世山下京右衛門が弟子たりし山下又四郎（第二編第三章を見よ）が抱弟子にして、後に養子となれるものなり。初名を文五郎といひ、寶永七年、初めて大阪の舞臺へ現はれ、寶永八年十一月、江戸市村座へ下りて、同地に止まること六年、再び歸阪して、元文元年十一月より京都に轉じ、同三年、又も大阪へ歸りて養父の名をつぎ、二世又四郎といひ、立役となれり。而して、翌四年十一月、女方に歸りて金作の名に復せしが、寛延元年十一月、終に病氣の爲め舞臺を退き、三年七月二日に至りて死せりき。

彼れが養子又太郎の事は已に前章にいへり、而して彼れが妻は岩井半四郎の姉なりしが、實子なかりしにや、二世金作の名は中村富十郎養子又太郎の實弟が弟子中村半太夫によりて襲がれたり。

以上、菊之丞、萬菊、金作の三人を此の時代の前半期に於ける主なる女方とす。而し

て、是れと殆ど同輩にして、稍二流に位せるもの、三條勘太郎（元禄十）、寶曆十三、霧浪瀧江及び佐野川花妻の三人あり。勘太郎は江戸根生にして容貌技藝共に勝れたりしが、元文の初め立役に轉じ、更に、延享三年冬より二世花井才三郎と號せり。瀧江は殆んど京都を根據とせしが、享保の末遂に興行表中より見失はれき。又花妻は萬菊と同門下にして、寧ろ大阪の舞臺を専ら占領したり、而して、元文の末既に劇場を退き、佐七と改めて京都に住せりといふ。

さて、此等前半期の女方について、後半期に於ては、二世あやめと、嵐小六と、瀬川菊次郎と中村富十郎と、此の四人、相雁行して京阪の劇壇に榮えたり。左に順次に之れを述べん。

二世芳澤あやめ（春永元禄十五）、寶曆四は初世あやめの長男にして、初め崎之助といひ、京都に若衆方たりしが、享保三年十七歳より女方に轉じ、享保十四年廿八歳、實父あやめの死するや、其の冬より二世の名をつげり。延享二年十一月四十四歳、始めて江戸へ下り、市村座へ現はれて、曾つて亡父の當り藝なりし大根濱の狂言を演せしが、當時の評判記に、あま鹽に見えて氣の毒といへる如く失敗に歸したり。居る

こと七年にして漸く關東人士の喝采を博せしが、寶曆二年十一月、京都へ歸り、翌三年十一月より大阪へ轉じ、其の翌年七月、五十三歳に至りて死せりき。彼れは風采甚だ揚らず、又音調の悪しかりしを以て餘り俗衆に悦ばれざりき。而して、其の態度、藝風共に父の面影を存し、女武道を以て最も得意となせり。されば、當り藝には「淺間嶽」の三浦、雁金、文七の清川及び女楠等あり。例へば、寶曆元年十一月、讃岐の女御といふ女家老役に高評にして、而も其の二役なりし熊野御前に扮し、傾城姿の出端に失敗せる如き、彼れが長所と短所とを察し得べし。茲に、彼れが女武道の藝を代表すべく、寶曆二年十一月、京都嵐屋へ下りし時の目見え狂言「天下太平記」なる女楠の概略を記さん。

楠正成の妻菊水となり、夫楠(嶺山小四郎)のまへ妻奉公人に交り、春駒の姿に身をやつし來りて、暫く所作事あり。次ぎに、目見えに茶を持出で、夫が見ゆ願してゐるをあり、何がな氣に入らんとして、後より肩を揉んだりするを楠に告められ、親船田入道を訪れながら、敵を討たんとせしめて、去られたる夫の内へめぐり來りし、散々に耻しめられ、手持ち無沙汰に成りながら、敵を討たうも知らず、願も見知ら

れば、討つべき便なけれど、入道打たれし切帶せし左文字の刀を敵の盜みたるが手より、と首隠するところ少し可笑しみを加へ、次ぎに、勾當の内侍(嵐三右衛門)若衆姿にて尋來りしをかくまひ、討手の侍を是非なく切殺してこぼる件あり。陶山(藤三)今村七三郎が楠を味方につけん、種々謀る時、奥より出で、宮方の味方にせんと支え、藤三が下女と偽るゆゑ、斐れを出だして若し、宮方よりの使者なりと座を改め、楠が言葉に就れ、仁徳篤き方へ味方せんといふ故、火鉢に舞をたかせ、庭の柑子に水を打ち、懐中鏡へ火の明にてうつし、唐のひき事を言立て、柑子の数を覆み結せて楠へ返答せる時、柑にこまりし諸鳥飛び去りたるは、仁の道缺げしゆゑ、味方すまじき楠にいはい、それより藤三が蠅を押へるゆゑ、又我れも蠅をつまみ、藤三が手の内にて割りし木枕を投げつくるを扇にて叩落し、だまし討にせんとする刀を落し、己が手練を見する武道事あり。つぎに、夫に手籠めにあひ、内侍もるとも柑子の木へ纏られ、最前の火鉢舞にて繩を焚き、内侍の縛を解く時、藤三奥より出で來るゆゑ、灯を吹き消し、我れは船田が亡靈なりと身振りななし、娘と我れを一人しての白に、藤三が身の上危ふき事にいひなして、喪劔を柑子の下へ隠させ、其のうち、舞が再び燃え上るに、願見合せ、藤三が打ちかけし刀を鏡にうつし、親船田入道が所持せし左文字なりと見願し、遂に敵を討つて楠と元の夫婦になる。

といふ筋なりき。こは初世あやめが江戸にて演じたるものと同じく、只、大根漬の代りに春駒の所作を挿みしなるが、所謂、彼れが女武道の藝風は是れにて一斑を知るべし。

●瀬川菊次郎(仙魚正徳五—寶曆六)は實兄菊之丞より若きこと十四歳、享保十年十一月、初めて京都嵐十次郎座へ兄と共に出て、同十六年十一月十七歳、市川宗三郎と共に江戸市村座へ下りたり。同地に止まること七年にして、元文二年、京都早雲座へ上り、それより大阪へ下りしが、寛保三年十一月、再び江戸へ下り、遂に其處にて死したり。享年僅かに四十二歳。

彼れは菊之丞と相反して容貌甚だ揚らず、且つ所作事に大得意なりしも、地藝を以て名人と稱せられき。即ち、傾城によく、女家老によく、濡れ事と、愁嘆と、武道具を兼ね、殊に嫉妬の仕打をよくし、且つ、白の言ひほどきに巧みなりき。只、其の弱點は餘りに技藝の眞を穿ち、其の科白の微に入らん事を力めて、まゝ見物を倦ましめたりといふ。「役者大雛形」に彼れを菊五郎と比較して、

梅幸(菊五郎)は色深けれど、仙女といふ狂言の筋へかけての上手には及び難し。眞

實上手といふは此の人。何としてかは漏りけある(陰氣といふ意味)の噂。是れは、狂言の仕内、餘り細かに春する。草の宮十郎は細かな事は細かくはらり、花やしきゆゑ、端に至れり。此の人、今少し舞臺の賑やかなるやうにさへあらば、恐らくつらく人はなきなり、



(りよ「全大版似」)國おの露出の耶次菊

といひ。又、役者花双六に彼れが兄菊之丞と比較して、

此の人、狂言の眞實をして、少しも衰衰なき故、聊淋しきやうなれど、上手には極りたり。兄實は花を第一にする人ゆゑ、其の場へは行くべからず。昔の市川かほる、岡田左馬之丞へは、めなるものなり。菊次郎、三が津を経て何方にてもよきに定めし立者々々、

といひ又役者矢的詞に、

當時、若女方の上手といふは此の仙女殿に極まり、狂言の筋に無體の仕内なく何をさせても眞の女の仕内飛んだり割れたり立役のすることをして、無理あてに當てる茶と一目に見らるゝは頭取殿の誤り、

といへり。所謂「濡りけありといひ、淋しきやうなりといひ、是れ彼れが舞臺的効果に於ける弱點にして、而も筋へかけての上手といひ、眞實らしく表裏なしといひ、筋に無體の仕内なくといひ、即ち彼れは當時に於いて寫實・自然・主義を標榜せるものなりしならん。例の雪月花麻物語に此れに關して最も趣味ある彼れが逸話を載せたり、そは下の如し。

瀬川菊次郎、妻なきとき、塾師に藤十郎とて髮結の御座候。妻を持ちて通勤申候。菊次郎、深川に馴染者御座候、願はれ申し候ては、兄弟菊之丞むつかしく候ゆゑに、妻向き藤十郎方に文のとりやり仕申候。或時、妻文を見つけ、内々にて見候へば、末々女房に持つべきとの文体にて大きに腹立ち、濱村屋瀬川の届書へ参り申候。藤十郎、産所に居り候、妻より叫び入り申候て、文出し、罵り申候。其の文は已れでないさ申し候へば、宛名候とて出し、見せ申候。此の騒ぎに、奥より兄弟にて腹腹より覗き申され候處に、

右の文出で申候ゆゑ、菊次郎赤面して、中に出て、さまぐ、階び申候へども合點致さず候。ありやうに言はうと兩人致し候へば、腰籠の内は路考居り申候ゆゑ、申すもならず。菊次郎、中に入りて、それではない、已れとは言はれず、泣き出し申候。はたにて見申候と、菊次郎が女房に見え、女房が他人に見え、藤十郎には菊次郎が我が色いろの如くに見え申候なり。路考、中に入りて、女房をなだめ、是れは全く藤十郎にてなく候なり、其の證據は、身に覚えあれば、最前よりの悪口は男たるものが黙つてゐるやう苦なし。いふにいはれぬ事ありて、我身に引受け申候なり、此の上は私が仲へ入り候程に、今日の處はまあ、丁簡して歸り、曉に恨みを言やるがよからうと申され候なり。相手が路考どのなれば返答もならず、それなら願申上げますとて、上り口にて下駄を穿れ、穿きて歸り申候なり。路考どの兩人を奥へ呼び、重ねて嗜み候やうに申され候。菊次郎申され候は、女の腹立ち候を始めて見申候、女房始め参りし時は存じ申さず候が、内へ歸るさて履物を尋ね候と、片々は内にありて、片々は外にある。女は丁寧にて何時も履物を揃へ申し候ものなり、今日はよく、腹立ち候にや、妻にありしを踏足にて下りて、又内に入りて上にあがり履物を揃へて歸り申し候。踏足にて土のつきしは厭も致さず、座敷に上り、履物を揃へて穿き候ことにて、女の腹立解り申候と申され候へば、よき心がけとて路考の機嫌よく御座候よし。いふにいはれぬ離縁の場は

て候へば、氣もつき申まじきに、其處へ心を注げ申され候事、まことに、名人なりと
皆申され候なり。此の菊次郎後に町人の女房となり、脇道を右にさし、左にて物をさ
り、ソリ打ち申され候。まことに町人の女房なりと大繁盛にて候よし。

謂はゆる濱村家一家の家庭が如何に厳格なりしかを知ると共に、菊次郎が如何に
寫實に熱心なりしかを見るべし。又彼れが實兄菊之丞に女方の秘訣を問ひしと
いふ逸話を「中古戯場説」に掲げたり。

或る時、兄路考に向ひ、女形の心得は如何に會得すべきや、われも随分と心得て勤むれ
ども、兄貴のやう和らかに藝に臨みあるやうにならず、さういひしに路考答へて、尤もの
不審なり、故人芳澤あやめさういひし女形は、兎角傾城事さへ能く出来れば、他の事は如
何やうにもなるものなり、さういひしは如何にも名人の調感心せり。われは其れを忘
れず、其の他は數へる事もなし、其方は其方の得手たる所、これに吾が得たる所格別な
り。さりながら、女形の字に氣がつけば、甚下手になるべし。形の字に氣がつかねや
うにく、さ吾れは心かげるなり、さういひしに、仙魚も、成程尤もなりといひしなり。
もし、菊次郎をして春秋に富ましめば、其の功勞は舍兄よりも却て大なりならん
に、夭折せるは惜むべし。

「中古戯場説」に據れば、彼れは雲州の出生なりといふ。雲州の藩主南海侯が瀬川家を
非常に愛顧せられし等の事實より察して、此の腕眞を措くに足るべき。

●風小六(彩鳥實永五)天明は始め吉田小六といひ、京都、其の他の子供芝居へ出で、
立役に扮し、頗る名聲ありしが、享保十二年の夏十九歳、大阪の竹田芝居へ下り、非人
仇討を演じて好評を得、同年冬、京都の佐野川萬菊座へ若衆方として現はれたり。
これ實に彼れが大芝居に於ける初舞臺にして、同時に三世嵐三右衛門の門下に入
り、始めて風小六と號せり。これより愈々有望を以て目せられ、享保十四年の冬よ
り京都に座元たること四年、同十七年(廿四歳)より女方に轉じたり。次いで、元文二
年、尾州名古屋へ下り、元文四年は大阪へ赴きて、其處に留まること一年、翌年に歸京
して再び座元となり、此の時より始めて「上上吉」の位に進みき。

寛保三年冬、再び大阪へ下り、次いで延享三年冬三十八歳、始めて江戸へ來り、留まる
こと五年にして歸京し、これより京阪の間を去來せしが、寶曆十三年冬(五十五歳)大
阪へ下りて、女方と立役とを兼ね、更に、明和五年十一月六日(六十歳)に至り、改名して五世
嵐三右衛門と號し、女方をやめて専門の立役となり、幾くもなぐ翌年の春より舞臺

を退きしが、安永四年冬六十七歳、京都早雲座へ現はれ、一世一代として、山姥の所作事を演じ、其の實子雛助後に二世小六をして怪童丸たらしめ、これより永へに劇壇より隠遁し、剃髪して是心と號し、天明六年に至りて歿せり。歳六十七。彼れは、先づ容貌風采にすぐれて、而も其の技藝も頗る多方面なりき。寛保三年の「役者和歌水」に曰く、

洒事なり、武遊事なり、所作事は御家なり、三つ拍子揃うた御上手。外はあらしの小六さんく。

と。又、寶曆六年の「役者改算記」にも

小六殿の諸藝の数はどうしたら盛り知られようといふ人あり。……娘役、お姫様、奥様、女武遊所作事、女やつし、敷へて見れば七つ入子の如く、何を入れても七つらぬといふ事なく、殊に木地は檜の木のみしなし、吉野漆の溜塗堅地、請合の入子、何と申分は御座りますまい。

といひ、寶曆十二年の「役者年越草」にも、

時代事にはノツシロミ位あり、世話事に自由に小手き、然ひ一段と真なり、立入太刀打は立派に身がるく、

といへり、彼れが多藝多能なりしを見るべし。而して、其の缺點を擧ぐるものは即ち曰く、



(りよ「備前首庄旦」)「姥山」の小六

第一の難は、アツタラ器量に色事がうつらいて氣の毒。此の人の諸事は長春の花と同じ事で、花は美しいが、ハリがあるやうな仕内。さて、第二は、驕自慢が鼻の先きへ顯はれ、せりふ狂言こまかならず。第三は、藝にキツミがありて時によつて女形と思はれぬ事多し。只ヤラ〜ヤラ〜と女らしうして欲い。「役者和歌水」

又曰く、

まりとは、こなれた仕内、上手は上手なれども、上手に少し過上ありて見物の心と算用のあはぬ所あり。これ期が悔めての仕内にあらず。

器用過ぎて、何をさせても苦にたならぬから引こなしてせらるゝやうに見ゆる。〔役者
大全〕

要するに、其の非難は、舞臺に不忠實なりといふ事と、且つ技藝に和かみの乏しきと
いふ事に在りたり。然れば、彼れは其の非凡なる才能を有せるに拘はらず、世人の
爲めに憎まれたりしが、晩年には、此等の短りを免るゝと共に、藝風の淋しきに過や
といふ非難を聞くに至りたり。而して彼れは女方として謂はゆる、キツミのあり
しだけに、彼の江戸へ下りし時の目見えには、女方にて大喝采を得しも、次いで、忠臣
藏の勘平、菅原の櫻丸等に好評を博し、終に老後に至り、女方を捨て、立役に轉じた
りき。されど立役としての彼れが経歴は、菊五郎の如く長からざりしを以て、其の
方面に於ては餘りにいふべき事なし。

彼れが江戸へ下りし時、其の初に扮せし時の衣裝の模様を、小六（小六郎）と呼びて市井に
流行したり。又同時に二世（四世）より難助（小六郎）といふ俳號を譲られ、子孫代々の藝名と
して其の家に傳へき。

小六に實子ありて、難助といひ、後に二世小六となり、父と同じく女方より出で、又

立役を兼ね、次期に於ける名優たりき。
●中村富十郎（慶子、享保四十一年）は初世芳澤あやめの三男にして二世あやめの弟
たり。蓋し、初世あやめには四男あり、長男は即ち二世あやめにして、二男は立役た
りし山下又太郎、三男は富十郎、四男は後に三世あやめたりし芳澤崎之助なりき。
富十郎は幼にして中村新五郎に養はれ、享保十四年冬、養父と共に江戸へ下り、十六
年春市村座に於て子役として初舞臺をつとめたり。其の冬、京都へ上り、初めて女
方として舞臺に現はれ、是れより三都の劇場を去來して俳優たること五十五年、而
も寛延三年、僅に三十三歳にして、極上々大吉に上り、天明六年大阪に死去するまで
少しも名聲を損せざりき。

〔役者大全〕には、彼れが京都へ歸りし享保十七年を十二歳の時とせり。されば享保
年の生れならざるべからず。又、安永六年の〔役者舞臺論〕には、當年五十三歳なりとあ
り。此の歳に依れば、享保十年の生れならざるべからず。此處に享保四年とせらば、
〔芝居細見通〕及び〔名人忌辰録〕等に據れるなり。

彼れは新五郎が四子のうち最も優れたるものにして、且つ此の時に於ける女方を

しては、瀬川菊之丞と共に諸優の上に抽でたりき。即ち菊之丞をして前半期を代表せしむれば、其の後半期は彼れによりて代表せらるるといふべし。彼れが俳優としての資格は無形に於ても、又有形に於ても、殆んど間然する所なく、容貌と風采とに優り、且つ其の技藝も多能なりしなり。明和六年の「役者花鼎」に彼れを評して、
いかにしても女めいてよし、殊に打上りたる奥様、又手入らすの娘風、腰元、傾城、武道華、所作は申すもある、何一つ不足ない上手、

といひ、寛延二年の「役者花双六」には、

地が唯かで、所作専一で、なめげなく、高尙で愛があつて、いつでも此の人の場は當つて、人柄がようて、此の上他に不足あらん、

といへり。蓋し、彼れが實父あやめは地藝に秀で、且つ所作をも兼ねたりしが、其の長子たる二世あやめと末子たる三世あやめとは、唯地藝の方面に於て父の藝風を継ぎ、而も富士郎は地藝と所作とを二つながら継げるなりき。斯の如く、其の兩方面に涉れるは、猶菊之丞と同じかりきといへども、菊之丞は所作を先にして地藝を後にし、富士郎は地藝を先にして所作を後にし、即ち、彼れは寧ろ花を以て尙ばれ、

此れは寧ろ實を以て重んぜられたり。されば、富士郎が少壯時代に於ては、其の藝風の陰鬱なるを批難せる劇評家あり、延享二年の「役者福壽想」に彼れを女方の巻頭に掲げながら、長岡久菊と比較して、

第一、じりり豆な藝で
わつさりめかぬ。久
菊様はせりふの内に
鯉口を混せて笑ふと
らんする巧者、殊に年
かさといひ、巻頭は久
菊様にまさりんせ。

といひ、翌延享三年の「役者三叶和」にも

此のち人の藝は不断五月空の如く、濡れ事のしつぽりさしめり過ぎて、強がぶつたやうな氣になります。ちぎ打晴れた仕打が見たいまで、



(りよ「備前書生且」)「葉の葛」の那十富

といへり。然れども、こは彼れが三十歳前後の時なり。其の後、かゝる非難を聞かざるは、伎倆の圓熟して漸く其の弊を脱したればならん。

所謂娘方によく傾城によく、又奥方によく、長少、尊卑、悉く之れに扮して成功せざることなかりしうちにも、其の第一の長所は女武道事なりき。されば、當時の評者は彼れを淺尾十次郎に比較して其の偉ありといへりき。而して、彼れが此の如く女武道に成功せる結果は、女朝比奈、女由良之助、女非人仇討、女景清、等在來立役によりて演せられし仕草を女性に翻案して連りに舞臺に上せたりしが、晩年に至りては、更に一步を進めて、自ら男子に扮し、大阪に於て、揚羽の蝶吉といふ若衆の俠客となり、大喝采を博せしかば、當時、江戸にありし瀬川菊次郎が之を聞きて、

慶子は狂言は上手、武道の心掛は下手なり。慶子ほどの上手にて、女方の操を守らず、しばしにて、も強められぬと心淋くなり何とぞして、當りを取り、見物に遊められんと思ふ心ある故に、若衆方として、人を投げたり切つたりして、當てなくなるなり。せめて一度か二度かにて止めれば、まだしもなれど、それが當るとつい辭になりて、又して當てなくなるものなり。此を以て、女方一通りの眼で見れば、下手なりといふべし。

と嘆じきとぞ。然るに、富十郎は江戸へ歸りてよりも、果して此の長吉に扮し、而も四世團十郎の音調をさへ模倣したりしが、次いで、明和六年の秋、京都に於て、大藏卿に扮し、又同九年の春、江戸の森田座に於て、藤屋伊左衛門となり、本名は團三郎にて、對面の場に四世團十郎の身振をなし、尙ほ大切に竹拔五郎の荒事を演じ、又、其の翌年は琵琶法師の景清など、頻りに立役もしくは荒事の役に扮したり。

更に、他の方面なる所作事に於て、彼れの當り藝は先づ、石橋を以て第一とす。蓋し、石橋が女方の藝として、菊之丞によりて創められし事は前に述べたりしが、富十郎は亦其の餘流を酌みて、元文元年、始めて之れを演じ、以來、屢、三都の舞臺に於て繰返したるのみならず、同く菊之丞によりて中興せられし、娘道成寺も彼れによりて頻りに演せられき。今、役者一口商より其の發行年表を抄出せんに、

- 寶曆二年、京都、嵐三右衛門座。
- 同 三年、江戸、中村座。
- 同 五年、大阪、三折他入座。
- 同 十年、大阪、中山文七座、九州、釣鐘座。
- 同 十三年、京都、傾城、巖山。
- 同 八年、大阪、小川座。
- 明和三年、京都、小川座。
- 安永六年、江戸、中村座。

次いで藤州宮島にてし。
天明三年、京都、中山來助座。

次いで尾州名古屋にてし。

今も俗間に傳へられたる「京鹿子娘道成寺」は、彼れが寶曆三年に演じたるものにして、其の鞠唄及び山盡しの條は此の時より挿入せられたりといふ。されば、彼の菊之丞の「傾城道成寺若しくは百千鳥娘道成寺」と比して愈歌舞伎化せられし妙味を見る。當時、或る人彼れに問ひて、鞠唄、花踊り及び戀の手習など、今少しむつかしき振にてあるべきに、さもなきは如何に、と言ひけるに、彼れは答へて、

身不肖の私なれど、なるほど今少し込入りの工夫も有るべく候へども、私が自由
にむつかしき振いたし候へば、其れ限りに相成り、大切の道成寺なり申すべくと存
じ、右腹の振つけ置き候。されば、未にまで誰も致しよくすたり申さず、
といひきとぞ。其他、葛の葉、七變化、等皆彼れが所作事の尤なるものなりき。

彼れが居常及び性行は、役者穿鑿論に、大概を盡せり曰く、
住居、木挽町六丁目、天王寺屋。俳名、辰子。年五十三。給金千兩。妻あり。女子二
人。大阪の産なり。古今天下無双の女がた。第一温順にして、風流なり。殊に繪に

妙あり。其のほ、琴、三味線、香、茶の湯、就中、俳諧が造者、手取しよ、番かれます。又、茶
内の從僕などいかにほどの賑あつても叱るなぞする事なく、物に凝滞せざる所、類稀な
る氣質。此の人、極端の淺き難きにも汗一滴もいれませぬ。

右にいへる如く、彼れには女子ありて男子なく、其の一女を門人中村野鹽に嫁せし
めしが、野鹽は富十郎に先ちて夭折したりき。

一説には、此の野鹽と同年同月同日、安永六年十一月十九日に死せる二世中村新五郎
を富十郎の實子なりとあれど疑ふべし。

辰岡久菊と、淺尾元五郎と、此の二人は孰れも富十郎より年長者にして、其の伎倆は
遂に彼れに及ばざりき。久菊は養父を辰岡染右衛門といひ、大阪天満の市人たり
しが、柳山小四郎の門下に入りて遂に立役の俳優となりたり。久菊は其の養子な
り。又、元五郎は淺尾十次郎の門葉たり。當時、此の二優を評して、巧者は元五郎、派
手は久菊といひ、久菊は色あり、元五郎は立役がはりの一しまりしたることよくと
いひ、又前に引ける、役者福壽想に久菊を富十郎と比較して、白のうちに輕口を混せ
て笑をとらすといへる、彼等が技藝の一斑を知るべし。三人亦がら、残年を詳にせ

すも雖も、寶曆の末か明和の始めに死せるならん。又、久菊は作者をも兼ねたりといふ。

三世芳澤あやめ(一風、享保五—安永三)が初世あやめの第四子にして、二世あやめ及び富十郎の弟たることは前に述べたり。幼名を萬世といひ、元文元年、大阪にて初めて舞臺へ出で、同三年、京都にて兄の名たりし崎之助を継ぎ、更に明和元年の冬より三世あやめとなりたり、彼れは地藝に妙なりしかど所作事に巧ならず。其の當り藝としては、累「板額」等あり。

三世あやめと同じ専ら京阪に據れるものに、中村榮太郎(龜長、享保九—安永六)及び中村喜代三郎(拿保六—安永六)あり。榮太郎が父は二世三右衛門が門人にして、嵐門十郎といひ、中ごろ中村吉三郎といひしが、終に俳優をやめて京都宮川町に住せり。榮太郎は其の子にして、享保廿一年、中村富十郎座へ若衆方として現はれしが、次第に名聲を高め、寛延二年、始めて江戸の中村座へ下り、小野の小町、油屋お染、清盛の小姓及び小姓の吉三等に好評を博し、更に菊之丞の當り藝たりし、無間の鐘を市村座に演じて成功し、寶曆五年、同座に、夕霧を丹前若衆、鎗踊、傾城、花笠踊、狸々等の五

種所作を演じ、之れを名譽として西歸し、以來、京阪の間に往來して益その地位と聲望とを上げたり。彼れは第一に所作事を能くし、又娘方及び傾城を得意としたりき。

喜代三郎は榮太郎よりも第二位に在り。享保の末より色子として京都に現はれしが、次第に昇進して女方の「上々吉」となりたり。寛延三年冬、始めて江戸へ下り、女團七に好評を得後、一旦西歸せるも、又屢江戸に來りたり。彼れは女使もしくは傾城に扮するを最も其の長所とせり。

同時に、江戸には二世瀬川菊之丞(餘考、寛保元—安永三)あり。彼れは武州王子の産にして、幼名を吉次といひ、幼時より初世菊之丞の養子たりき、而して實は初世が其の家婢に通じて吉次を生み、婢の父は王子の農夫たりしを以て其處に養はしめ、終に己が家へ迎へたりともいふ。世に其の生地を呼んで「王子路考」といふは、即ち此の二世の事なり。寛延三年九月、中村座に初舞臺として出で、父の追善に「石橋」を演じたり。これより久しく子役として名ありしが、寶曆六年十一月、はじめて菊之丞と改め、若女方の部に入りて、市村座に、娘道成寺を演じ、以來一生の當り藝は彼の「石

橋のほか、無間の鐘、八百屋お七等あり。役者綱目に彼れを評して、

第一、美しく舞臺花やうにて仕内にいやみなく、すなほなる藝風にて眞實つよし、

といひ、菊家彫にも、

一、体きりやうよく、風俗よく口跡よく、



(りよ「全大傾似」)「橋石」の丞之菊世二

例へば、其の宅は三が處にあり、妻妾合せて三人を蓄たり。曾て自ら戯れて曰く、越後屋の者はア、といふ子供までが其れ〜に儲けて出す大身代なり、我れは唯一

人の稼ぎにて五十三人のくらしなりといひきとぞ。されば、彼れが葬送の儀式の華美なりしは實に當時の眼を驚かし、菊家彫及び市場通笑が見聞筆記に其の盛觀を叙せり。又平賀源内の根なし草は戯作の書といへ、彼れを編中の人物に用ゐたるにても、如何に其の當時に盛名ありしかを知るべきなり。

二世菊之丞よりは稍劣れるものに、二世吾妻藤藏、拿保八、安永四、及び中村松江、屋好寛保二、天明六、あり。藤藏は中村清七といふ狂言作者の實子にして、清七の兄は即ち道外方たりし初世吾妻藤藏なりしが、其の養子となり、享保十五年、子役として市村座に出でたるを初舞臺とし、若衆方より女方となり、中ごろ、生島大吉、または總角林彌、など、改名せしが終に舊名に復し、専ら武道事と地藝とを得意とせり。松江は大阪の出身にして、中村歌右衛門の弟子たり。子供芝居にて、平がなの船頭松右衛門に好評なりしかば、遂に藝名を松右衛門といひ、寶曆の初年には、滋芝居に現はれたり。同十年冬、京都の大芝居へ女方として出で、翌十一年冬、東下して森田座に出で、はじめに松江と稱し、後に俳號の里好を藝名とせり。役者穿鑿論に彼れの私事と技藝とを叙して曰く、

住居塚町、屈前(操り芝居)の向うら。堺屋。俳名をすぐに名さす。年廿八(安永六年)。

七〇四

容色形、音まで、三つ拍子そろひしは此の人なり。一ころは故人路考二世菊之丞(たし)とせせし租の人でござるに、さいつころ、丁子屋の丁山(谷時、吉原の名妓)を羨せし、歸ありて離別せしが、それより、あかしな氣を發し、舞臺に身にしみす。その中りも、ござりませぬが、此の人、出精いたさるゝならば、誰か此の人に及ぶべき。ある時、巫來りて、松江さいふ名は性に、あはぬと申せしより、俳名をすぐ名に、あはれました。

茲に謂はゆる失戀の悲みの果して其の因をなせるか否か、彼れは僅かに四十五歳にして夭折し、且つ其の地位は、上々吉に止まりたりき。

第十一章 脚本と其の作者

京阪作者の二様の別——俳優と淨瑠璃作者——並木正三——並木丈助と永助——並木十助——茶河龜助——彼れが作風——江戸——津打治兵衛——彼れが作風——作劇上の意見——二世治兵衛——津打半右衛門——藤本斗文——中村清三郎と中村重助——遠越二三次——金井三笑

當時、京阪に於ける歌舞伎の作者は自ら二様の別ありき。其の一は俳優にして作者を兼ね、若しくは俳優より作者に轉せるものにして、彼の松永六郎右衛門及び佐渡島三郎右衛門に次いで、此の期には、既に第二章にいへる如く、市山助五郎(作名志山)あり、又藤川半三郎(作名茶谷)あり、松島松太郎(作名百花)あり、市山ト平(敵役にして助五郎の門人)あり、辰岡久彌あり、櫻山四郎三郎あり。其の第二は淨瑠璃作者にして歌舞伎作者を兼ね、若しくは淨瑠璃作者より歌舞伎作者に轉せるものにして、即ち爲永千蝶(爲永太郎兵衛の門人)あり、長谷川傳治(長谷川千四の門人)あり、竹田

日本演劇史 第三編 寶曆期 第十一章 脚本と其の作者

七〇五

治藏竹田出雲の門人ありき。就中、助五郎が作には、延享元年十一月、大阪姉川座の「花情枕軍談」、同二年十一月、大阪市山座の「女武者浮洲合戦」、翌春、同座の「中納言存櫻」等あり、又、千蝶が作には、寛延二年春、京都、都半太夫座の「契情錯振山」等あり。

されば、京阪の劇壇脚本家に乏しからざりきと雖も、彼等によりて佳作を得んは到底望む可からざりき。「言狂作書」に此等俳優が作劇に従事せるを難じて曰く、

此等は文盲なる役者なれば作意ある答はなけれど、幼稚より古名人役者のせし狂言を、こゝかしこ見覚え居るを思出し、我が役のよき事を一番に見込み、容、衣裳、談のあがきまで勝手よきやう書くが故、狂言の趣意はわからずとも華美なり。譬へば、自ら所作事に得手なれば、狂言の中に最事やうの事を書き、我が能辨なれば狂言のくりに長詞をいひ、又、小男にて小手利なれば、盛ながら立廻り、或は鳥眼を隠して詰合などが常に得たる事にて仕組などするがゆゑ、相手の女形敵役などには念頭にも付くれど、我が休みの場の狂言、又、中廻り役者の詞は一向放曠になるものなれば、一日の趣向は立ちがたきものと知るべし。

と。而して、又、一方に於て淨瑠璃作者にして且つ歌舞伎の作者たりしもの、場合は如何にといふに、既に第二編第十章にいへる如く、當時、操芝居の全盛なりし結果

は、操觚者としての奇才を其處に吸收せるを以て、其の歌舞伎に獻を通せるものは大かた操芝居に地位を得ざる泛々の徒のみなりしなり。されば、京阪に於ては、近松以來、殆んど作家といふべき作家なかりしが、此の期に至り、この天才の顯はれたるあり。そは實に並木正三（享保十五—安永二）これなりき。

正三は大阪道頓堀宗右衛門町に住し、高砂屋平右衛門といふ老舗の菓子屋（以上言狂作書）の說に據る。「戯財録」には道頓堀和泉屋正朔の伴幼名久太郎、寛延二年、和泉屋正藏と名乗り、歌舞伎へ出勤とあり。にして、且つ町年寄をつとめ、幼時より劇を好みて遂に淨瑠璃作者並木宗助の門人となり、専ら歌舞伎の爲めに狂言を作り、傍ら操りにも筆をとれり。寶曆三年、諸國に疫病大に行はれ、其の呪にもて家毎に「キノニノヤノハノモノ」北川總左衛門宿といふ張札をせるに、彼れは是れを材料にして、けいせい天羽衣といふを作り、翌四年春、大阪三條座にて上場せしめたり。即ち、北川總左衛門は本名足利義村にして、赤松四郎と謀りて足利家を覆さんとし、四郎は疫病神によそほひて天下を徹行し、互のあひ言葉に「キノニノヤノハノモノ」と呼びかはす趣向にして、總左衛門に中山新九郎、赤松四郎に中村歌右衛門、細川勝元

に中村十藏なりき。又寶曆五年冬、京都布袋屋座へ中村十藏が上りし時、彼れは、女文字平家物語、十藏の教經を作し、尙ほ同七年十一月、十藏の爲め京都へ呼上されて「大社結納三番續」十藏の岡部六彌をものしたり。翌八年冬、大阪、中山文七座にて「藤原系圖」中山新九郎の淡海、翌九年春、同座、三十石燈始、新九郎の花滿憲法と文七の進藤源八を作り、是れより以後も専ら同座の爲めに筆を執り、同十二年冬、同座に、太平いろは行列の作あり、而して、明和七年冬は、大阪の小川吉太郎座に、桑名屋徳藏入船物語、歌右衛門の桑名屋徳藏をものし、翌八年冬、市山助五郎座へ轉じ、中睦龍宮島臺、次いで、三千世界商往來を作り、翌々安永二年春、中村歌右衛門座にて、和布疋神事を上場し、其の興行中なる二月十七日、樂屋にて急に胸部に奇音を發して卒倒せんとし、ア、南無三、モウ死ぬかと叫びしまゝ、絶命したり。されば彼れが碑銘に題して、南無三寶、正三の墓といへり。

其の他、彼れが作に、霧太郎天狗酒、あり。又、後に、岩井風呂と稱せる、宿無圍七時雨傘、正三が作と稱せられると、言狂作書の説によれば、然らずといふ。蓋し、此の作の下巻に、主人公圍七茂兵衛を正三が異見する件あるあり、彼れが作の如く、謬傳せ

られしならん。左に、言狂作書の本文を引用せん。

是れは、明和五年の頃、太左衛門橋北詰の床屋に、茂兵衛といへる、毛剃、女郎菊を殺し、翌日、若大夫（前はゆる濱芝居にして、大芝居にあらず）の芝居にて、急作の一夜附にて、敵役中山卯八といふもの、其の茂兵衛に、面体格好のよく似たれば、則ち卯八に茂兵衛をさせ、大當りを取りしなり。尤も、岩井風呂の狂言は、此、眞島部山、小菊、牛兵衛、永樂屋孫太郎の古き狂言の名前、或ひは阿彌陀池の開帳を、堺の魚市場に直したとして、前にいふ譯物なり。此等をハメ物の中にも、活取、唱へ、濱芝居の作者仕事にて、血木正三の作に非ず。其れより、始めて此の狂言をいだし、時には、高砂屋平左衛門、正三の通稱と正本にも、書き道具の飾付も、菓子屋、腰履など掛けあり。宗右衛門町、年寄を勤めて作者にはあり、太左衛門橋近所にはあり、幸ひにしてつかひしものなれど、正三は、甚だ迷惑がられし由、處の老人に聞けり。

正三は、又、舞臺の建築、及び裝飾に、意匠を凝らし、見物の目ざはりにあらぬやう、舞臺及び場内の柱を撤せしめ、又、せり上げ、せり下げ、廻り道具、三段かへりのがんどう、其の他種々の装置を工夫し、當時の説に、作は近松門左衛門に並木正三、才智は櫻田宗庵、竹田近江、並木正三、此の三人あるゆる大阪中、恐るゝといへりぞ、以て彼れが一

代に虚名の高かりしを知るべし。正三の傳記を記せるもの並木正三代嘯あり、而して正三が一度並木氏を冒して歌舞伎作者たりしより、其の門下に並木五瓶を出だし、此の後、其の一派は淨瑠璃以外なる脚本家として維新前まで東西の劇壇に勢力を振へり。

七一〇

正三と同じく宗助の門下より出で、操りと歌舞伎との作者を兼ねしもの、並木丈助及び並木永助あり。丈助は正三よりも寧ろ先輩なりしにや、寛保元年既に大阪の中の芝居に上場せられし、粧武者いろは合戦、忠臣蔵の改作あり。又、彼等の門下に並木翁助、並木十助及び並木利助ありて、各歌舞伎の作者となり、就中、十助は明和年中に榮えて、傾城陸玉川、天竺徳兵衛開書往來、敵討巖流島等の作あり、安永に至りては五瓶に助作せられしが、そは次編に於ていふべし。又、翁助は後に千柳と改め、俳諧の點者となり、今宮に閑居せりき。

正三が門下、更に奈河龜助あり、師に次いで安永天明に榮えたり。彼れは、奈良の産にして、放蕩の爲め家業を捨て、河内の縁家に食客たりしが、終に大阪に出で、作者となれり。其の奈河と呼べるは、奈良と河内に身の納らぬといふ意なりとぞ。當

時すべて作者の權力は俳優の進退などを其の意のままに決せしのみならず、特に彼れには好き資本主のありしを以て、一座に畏敬せられき。其の際、作として今に傳はれるもの、就伊勢物語、安永四年四月、大阪嵐座、伊賀越乘掛合羽、安永六年春、大阪嵐座、加賀見山廓寫本、天明元年春、大阪藤川座、殿下茶屋聚、天明元年冬、大阪藤川座等あり。而して、天明四年冬より永長堂と改名して大阪の中村榮太郎座に見えしが、以後、その名を逸せるは、幾くもなく死せるならん。言狂作書に彼れが作風の常規を逸しながら、尙ほ後世にまで盛んに行はるゝを賞揚して曰く、

都て京攝の狂言には、四季時候によつて狂言にも又規矩あり。春、二の替りには、陽氣に華やかなる事を常とし、世界も時代を用ゐる所明、大名の若殿放埒より謀反人幻術をつかひ、或は遺棄にて反逆人を亡すなど、眼はしく有べき事。三月狂言は、永日の頃なれば、時代世話を交へ、御家復讐の仕組にして、五月狂言は、前には、脚本の時代、玉代、切狂言を眞世話とて、心中角力の世界を分ち、永日の頃は、看客に見飽かぬ心得。盆替も五月に同じく、唇の比ゆる、狭容の水試合など、いさぎよきを専一とし、九月十月は、陰氣に赴く時節ゆゑ、怪奇の脚色をつまやかに、御家の敵討を取組み、顔見せは、一年の終りなれば、道外交りに種々を替へ入込ませ、所作事やうのめざましきを常法とす。

するなり。しかるに、此の龜助が伊賀越は復讐なれば、三月又は九月に出すべきを三替りに仕組み、大序の扱預殺しより中入の團扇寺まで、足利時代に取りなし、狂言を手廣く書きたるは自在を得たりといふべし。
といひ、尙ほ、彼れが作の缺點は、餘りに綿密に過ぎて、とどき所ありとて、下の如き實例を挙げたり。

樂掛合羽の傳法院殿下茶屋の人形屋、又伊勢物語の春日野、加賀見山の菊酒屋、各正本にて百餘枚あり。此の中に略せんといふ所もなく、詞にて省く所なし。是故に、正本にて讀む時は、當時の神史にまさり、面白きこと限りなけれど、此の後の役者は、氣衰へ下根になりし、紙數多き場は、來賓より仕手方の飽くもの、短き場を好んで處々を略するが故に、自と狂言も通じ兼ねる事多し。

龜助に至り、全く歌舞伎を専門として操りに關係せず、而して、其の門下には、奈河七五三助及び晴助あり、是れより奈河一家は、並木氏と相並びて、歌舞伎作者の門閥たりき。傳言ふ、龜助は、居常唐物を愛する癖あり、遺言して、其の送葬には、一切舶來の器財を用ひしめたりと。

さて、此の期に於て、江戸に於ける脚本界は、如何にといふに、京阪に正三が出でしよ

りは些し前に津打治兵衛(英子天和三)實曆才現はれて、謂はゆる江戸作者中興開山と稱せられき。蓋し、彼れが死せるは、實曆十年正月廿日にして、當時七十八歳なりといへど、一説には、又八十二歳ともいへり。茲に暫く前説に據りて、天和三年の出生とせるなり。治兵衛は、大阪の俳優にして、親仁方を専門とせる津山治兵衛の子にして、元祿十四年二月、市村座にて、岩井左源太が演せし、傾城乳母櫻は、實に彼れが京阪の脚本を江戸風に翻案せるものなりし事、當時の評判記に見ゆれば、夙に江戸へ下りて作者たりしならん。而して、彼れが作者として最も著はれたるは、實永七年三月、中村座に上場せられし、一心二河白道に始まる。其は清水清玄と丹波與作とが事を脚色せるものにして、是れより先き、土佐淨瑠璃に同じき標題にて、丹波國子安地藏の縁起をうたひしものあるを、彼れは即ち之れに應用せるなり。又、此の作より始めて、江戸の歌舞伎狂言は、四番積きとなれりといふ。以後、彼れが作として知られたるは、式例和會我、

享保元年正月、中村座二世團十郎第二回目に扮せし助六の狂言にして、會我の時代物に、揚巻助六を仕組みしもの。

「大角力藤戸源氏」

享保十六年十一月市村座、門入津打九平次との合作にして、盛綱、藤戸の先陣、及び累殺しの奥右衛門を仕組みしもの。初世坂東彦三郎の盛綱にて先陣物番、三條勘太郎の累殺、中村新五郎の奥右衛門、等。

「忠臣いろは軍談」

享保廿年九月市村座、赤穂義士の事を脚色せり。是れより先き、澤村宗十郎、同じき眼目を自作して大當りなりしゆゑ、治兵衛は更に坂東彦三郎の爲めに此の稿を起し、なり。

「寶會我女謹島臺」

元文三年正月、中村座、寶會の狂言に八百屋の七を挿めり。一番めは、初世市川宗三郎の鬼が島の船頭、月小夜に頼まれ、島工藤となりて遊廓へ來り、初世萩野伊三郎の寶會五郎に打擲せられ、實を明かし、其の家來となりて鬼王新左衛門と名のる。又宗三郎の工藤が頼朝に命ぜられて蝦夷へ渡らんとするを、五郎、跡より追ひ、初世中島三郎右衛門の朝比奈三郎に七里が濱にて引止められ、籠引きの敵あり。二番めは、三條勘太郎の結成、女隠島へ渡り、女殺して鬼が島の十郎姫と稱し、島の奉行れんしやう女と

満事、次ぎに鳴海五郎四郎の釜屋武兵衛が山本宮藏の七を引立てんとするを、五郎、元服妾にて出で、櫻づくしの白など。

「初世通會我」

元文四年正月、市村座、藤本斗文と合作、寶會狂言に、景清助六、累を挿めり。一番めは、老藏の景清、精實に妾を懸し、娘人丸を三世團十郎の寶會五郎に妻はさん、と魚葉牡丹の紋つけたる黒小袖を與へ、後に、五郎が此の小袖を着て、伏見助六となる。二番め、宗三郎の鬼王新左衛門、寶會兄弟を養はん爲め、箱根の清左衛門といふ盜賊となるを、伊豆の次郎に與まれ、打擲せられて十郎結成の難儀となるゆゑ、鬼王が妹實は景清の妻たるも、身を賣りて傾城高尾となり、景清と再會して、以呂波短歌に擬して互に志を言ふ。三番めは、全く鍋巻助六の狂言にして、助六は即ち寶會五郎の變名せるものなり。四番めは、累解脫の狂言にして、奥右衛門即ち景清の變名せるもの、仁田四郎に擔たせられ、終に鎌倉にて賊を破る。

「淡島榮花盤」

寶曆三年、淡島の狂言に、清玄を挿めるもの。

尙ほ、延享二年、市村座、向う五か年の約にて聘せられたりといへば、當時、同座に上

塙せられしは大かた彼れが作ならん。

士一六

彼れが一代の當り作は八百屋お七の狂言にして、寶永五年正月、中村座にて演ぜられし「傾城風曾我」これなり、と踏書にあれど、柳亭種彦の「還魂紙料」に考證したる説によれば、當時お七を仕組みたるは「風曾我」であり、其の次に興行せられし「追替彼岸櫻」なりといひ、且つ作者は中村清五郎にして、治兵衛に非ず、治兵衛の榮えしは寧ろ享保中なれば、享保三年、市村座にて演ぜられし「富士高根曾我」の同じお七の事を題目とせしが、即ち彼れの作には非ぬ、云々、といへり。

彼れが作風は「太平記」の真中へお花半七を出だし、曾我の五郎が國姓爺となり、十郎祐成が平野屋徳兵衛と名を變ふるなど、巧みに時代物に世話物を取合はして一派の風をなせり。而して、彼れが當時の劇壇に勢力ありしは實に愕くべきものなりき。曾て二世團十郎が座頭にて治兵衛は其の立作者なりしが、元來不和なる間がらなりければ、本讀の當り、治兵衛が一通り狂言を讀みしを聴き、團十郎不滿の様子なり、さらばとて、別なる狂言を取出して讀みけるに、愈不滿の氣色なり、三たび別なる狂言を取出し、將に讀始めんとせしを團十郎暫しと押し止め、さて一驚入りたる

名作者かな、本讀納まらずとて三通りまで用意し給ふこと餘人の企及ぶ所にあらず、此の上は何事も御身の心のまゝに任せ、御差圖次第、早々譬古にかゝるべし、あらぬ我が儘を申して大きに手間取らせたり、とて深く己が罪を謝し、其のまゝ、稽古を了りて初日を出だしけるに、其の狂言果して大當りなりきと。淺草觀音の額堂へ治兵衛と團十郎とが首曳し、治兵衛の勝てるさまを描きて奉納せりといふは此の時の事なるべし。又、一説には、或る立者の役者互ひに己が役争ひて、六度まで彼れが作を斥けしに、六度ながら別なる狂言を書きしが、七度目には故と最初の狂言の名ばかり改めて讀聴かしぬ。役者も根氣に負けて其のまゝ承諾せしに、彼れは冷笑ひて、此れは己が第一番に綴りて御身等に非難されたる狂言なり、さて一耳も眼もなき人かな、とて二人に異見を加へて仲直りをさせ、其の時、雜子が谷の鬼子母神へ繪馬を奉納して、地獄の秤の一方には治兵衛一方には座中の役者一同を載せ、治兵衛のかた荷は重きさまを描かせたりとも云へり。

役者に狂言をついたる時、腹を立つは作者の心が狭き故なり。狂言は取つて置い

ても破れ朽るものに非ず。しこより作者は役者の氣がれをするが家業にて昔々の氣に入るやうに作つてやるが即ち作者なり。古き本にて間に合へば作者は要らぬ事なり。是れまでつかれたる狂言にて大入を取りし事たびくなり。

と。又曰く、
狂言は二番めの詰より作り跡にて、一番め、三番めを案じたるがよし。恐れながら、源氏の物語が狂言作りの秘密にて須磨明石の巻より出来、跡より前後六十帖出来たるなり。又狂言を案するに、其の年の座頭のみき事を案じては出来兼ねるなり。座頭のするうちの區分わるい事を案じて、除けくすれば佳きこと殘るなり。

と。彼れ、又當時の脚本家を罵りて曰く、
今どきの作者、趣向の案じかた合點ゆかず。立役を女方に直し、或ひは後室を奴になし、いろく變するゆる、狂言ハキツキにして混雜し、山の奥に隠きの三粒を鳴らし、或ひは庭などの井より何時の間にやら敵方の抜穴を掘り、姿を隠さんとして井へ入り、或ひは井へはまりて濡れたる氣色なく、たくみ露はれて、エ、無念やな、といふやうなる趣向多し。歌舞伎の案じかたは然にあらす例へば、當り役者にて時の人ほむるも、一體の藝仕込みなきは金取りでは無し、此等は立消するなり。是を以て、金取りの

役者の身の上を案じ、其の金取りを仕損じますは作者の誤りなり。其の役者の氣だてを察し、其の體を以て狂言一部に仕組むなり。

と。更に俳優に一針を加へて曰く、
五百兩さる役者と二百兩さる役者、三百兩は斷違ふやうに見えず。三十兩さる中通り、二十兩とる小詰とは大きに違ふなり。高金さらば心がけあるべき事なり。立役は愛嬌敵役は憎いが愛嬌、女方は美きが愛嬌なり。

と、此等の言、以て彼れが本領を知るに足る。
寛延三年(或ひは寶曆三年とも)より、俳優の英子を其の名とし、又晩年には龜井戸なる瑞龜山の大海和尚に事へて、禪學を究め、鈍通禪學咄五卷の著あり、又此の頃より、太鼓堂、泥築、鈍通などの別號を用ひたり。彼れが辭世に曰く、

玉の糞のありたけ嘘を書きつくし、今そ冥土の道つくりなり。
彼れが門人に津打傳十郎あり、別號を一河齋といひ、寶曆三年冬、或ひは十年とも、十二年とも)より二世治兵衛(明和八)と號せしが、明和二年、更に鈍通與惣兵衛と改め、明和六年より業を廢して津打の家名絶えたり。彼れは淨瑠璃の趣向に妙を得、矢

の根、帶引、業平東下り、田舎娘、菊相撲、石橋等の作あり。尙ほ同じく治兵衛の門下に津打半右衛門あり。別號を沉訂といひ、もとは鈴木平左衛門といふ立役にして、狂言の標題を面白く綴る事は此の人より始められたといふ。正徳三年、彼の二世圓十郎が始めて助六に扮せし、花館愛護櫻は實に彼れが作なりき。此の他、次期の作者に、津打九平次、津打五左衛門、津打又左衛門、津打菅新、津打圓次、津打三郎八など見えたるは皆初世治兵衛が門葉なるべし。

治兵衛が子七藏は初世松本幸四郎に養はれて俳優となり、二世幸四郎と稱し、後に四世圓十郎となり、此れより津打氏の名跡は市川家に存して、四世の門下に、津打門三郎ありしは其の爲めなりといふ説あり。然れど、四世圓十郎の出身に就いては既に第七章に叙べたる通りなれば、此の説疑ふべし。又いふ、津打氏の名跡は狂歌師として有名なりし紀の眞顔が許に保存せられたと。

治兵衛と同時もしくは些く後れて、藤本斗文あり。生死の年月及び閱歴を詳にせずと雖も、始め俳優、津村宗十郎の門下にして長作といひ、享保の末より作者となりて、澤村斗文と稱し、又藤本と改姓せり。元文寛保の頃は、いまだ治兵衛の下に屬せ

しが、延享元年春、中村座の碩末廣源氏、五世圓十郎の文覺廣次の幡隨院長兵衛に漸く立作者として其の名を署せり。(一説には、元文五年冬、市村座に始めて立作者たりともいふ) 此れより以後の當り作には、男文字會我物語「寛延二年春、中村座、二世圓十郎三度めの助六」頼朝軍配鑑「寛延二年十一月、市村座、河津侯野の相撲」初花隅田川「寶曆元年春、市村座、二世圓十郎の粟津六郎」男達初買會我「寶曆三年正月、中村座、富十郎の女對面、廣次の梅の由兵衛」百千鳥曲輪會我「寶曆四年正月、中村座、二世圓十郎の蓮生坊と矢の根五郎」女夫星浮名天神「寶曆五年十二月、森田座」等あり、就中、男文字會我物語の助六は、津打が「八百屋お七」と共に、當時の傑作と稱せられき。而して寶曆の半ば既に其の名を見ざるは死亡せるにや。一説には、暫く澤井註藏と變名せりともいふ。彼れが長所は脚色にあり、且つ標題の句に意匠を凝らせり。

同時にまた中村清三郎(寛保三あり、清三郎は別號を藤橋といひ、後に連音といへり。彼の元祿期の作者たりし、明石清三郎が次男にして、且つ二世七三郎が弟なりともいふ)。

又、中村重助(一、元禄十六—寶曆五)あり、重助は五世勘三郎の三男にして、主に大道具に意匠を凝らしたりき。然れども、治兵衛及び斗文に次げる作者は、下にいふべき塚越二三次及び金井三笑とす。

塚越二三次、桑陽、享保六—安永七は、始め初世澤村宗十郎の門下にして、姓を澤村といひ、延享二年治兵衛の死する十四年前はじめて市村座へ出で、四年を経て、寛延三年より立作者の地位に昇り、此の時より始めて塚越と改姓せり。標題の割書に最も意匠を凝らし、また、常磐津文字太夫が淨瑠璃に當り作多くして、一狂言のうち必ず一幕づゝの淨瑠璃を加ふること、及び藪屋の道具立は彼れによりて創められたりといふ。其の作の概略を擧ぐれば、

- 〔初野伶人袖〕。寛延三年冬、森田座。立作者としての初作。富士淺間の篇。
- 〔船越馬系圖〕。寶暦元年春、同座。二世宗十郎の萬屋芳兵衛。
- 〔本領鉢木染〕。同年冬、中村座。初世宗十郎の佐野源左衛門。
- 〔曲輪商會我〕。寶暦二年春、同座。助五郎の鳴神坊。
- 〔精練奥州題〕。同年秋、同座。幸四郎の貞任。

〔冠被和黒玉〕。寶暦三年冬、市村座。彼れが上京の暇の作。

〔早番會我橋〕。寶暦四年春、同座。幸四郎の工藤。

〔三代源氏六條通〕。同年五月、同座。頼光四天王の狂言。

〔由其千軒蟬鳴港〕。同年八月、同座。幸四郎の三莊太夫。

〔契情遠草履〕。同年冬、同座。廣次菊五郎の濱成竹成。

〔強愛護會我〕。寶暦五年正月、同座。菊五郎の工藤廣次の諸壁。

〔戀染隅田川〕。寶暦八年三月、市村座。龜藏の富士太郎。

〔願見世極數高〕。同年冬、同座。富士十郎の女鉢木。

〔初買和田酒盛〕。寶暦九年春、中村座。團十郎の景清。

〔岡山女敵討〕。寶暦十一年三月、同座。傳九郎の太申坊。

〔東山殿戲場朝日〕。明和三年冬、市村座。菊之丞の出雲のち圖。

〔其名月色人〕。明和四年秋、中村座。富士淺間の狂言。

此の作、不入にして、其の名もつきたりといふ標題自ら職を爲せりとの評あり。これより四年間、彼れが作を絶てり。

〔葦換月吉原〕。明和八年十一月、森田座。團十郎の男之助。

此の時より彼れは作名を榮陽と改め、寫換へて月も吉原と前年の不祥に懲りて、極めて吉兆ある標題を撰めるなり。

〔初陽鷄會我〕安永元年正月、森田座。團十郎の景清と結成。

〔伊豆原田芝居元日〕同年十一月、同座。増山金作と合作。助五郎が、辰野の相撲。

〔色時給會我羽筋〕安永二年正月、同座。金八と合作。團十郎の景清と結成。

〔宮柱腰舞臺〕同年八月、同座。金八と合作。團十郎に築五郎にて聖徳太子傳記。

蓋し、當時、湯島天神にて太子の開帳ありしゆゑ、三座とも其の傳記を演せしが、彼れの作最も大當りなりき。

〔知主野世界〕同年十一月、同座。金八、喜助と合作。女鉢木。

〔著始初買會我〕安永三年正月、同座。金八、喜助と合作。佐野次郎左衛門と八百屋やせ。

〔見櫻十三幀〕同年十一月、市村座。中村故一と合作。三世菊之丞の愛蔵者。

〔福平郎紅葉〕安永四年九月、同座。山本勘助と翌月、仇討梅川忠兵衛、初徳兵衛。

〔咲、此花顔聞〕安永五年十一月、中村座。金八と合作。玉藻の前。

●金井三笑は通稱を金井筒屋半九郎といひ、累世、中村座の手代たりしが、彼れは廿二歳にして帳元となり、頗る俗才に長じたるを以て一座に信用せられ、更に、寶曆四年

年の冬、始めて作者として出で、三平と號しき。されば、二三次よりは九年後れて折道へ入りたるなり。降つて、寛政の初年まで稀には此の人の作あれども、其の最も榮えたるは、安永五年、即ち二三次が歿せる三年前までなりき。斗文の風を學びて最も世話物に長じ、狂言を廣く仕組みて締括り納るをもて得意とせり。又、この作者も舞臺裝飾に苦心し、當時の大道具は大かた、籠張か割書の遠見かにて極めて粗製なりしを、彼れは、道具幕、背割幕、遠見の景色の打返しなどを創めて悉く見物を驚かしきといふ。作の主なるものは、左の如し。

〔菜花隔田川〕寶曆九年春、森田座。助五郎の粟津六郎と釣鐘彌左衛門。

〔梅紅葉伊達大門〕寶曆十年冬、市村座。奥州政と紅葉狩。

〔江戸榮根元會我〕寶曆十一年春、同座。菊之丞の亂れ髪をせん。

〔會我鼻瓦二本櫻〕寶曆十二年春、同座。仲藏が「忍波」の所作事の始め。

〔百千鳥大磯通〕寶曆十三年春、中村座。團十郎の景清。

〔色上月三組會我〕明和二年春、市村座。仲藏の法界坊。

此の作、大當りにて、悉名を高め、且つ、此の時より三平を改めて三笑と號しき。

「富士雪會稽曾我」。明和七年春市村座。増山金八と合作。
 「経相馬救日」。同年七月、同座。増山金八と合作。
 「女夫南伊豆若綿」。同年冬、同座。増山金八と合作。
 「和田酒宴納三組」。明和八年春、同座。増山金八と合作。
 「けいせい名越帯」。同年八月、同座。金八と合作。不破名腹屋。
 「梅花副鉢木」。同年冬、同座。金八と合作。鉢木と紅葉狩。
 「振袖著曾我」。安永元年春、同座。金八と合作。
 「江戸春名所曾我」。安永二年春、同座。曾我と八百屋と七。
 「四天王寺轡供養」。同年八月、同座。聖徳太子傳記。
 「花相撰源氏張隠」。安永四年冬、中村座。仲藏の爲朝と俱野。
 「御膳しく存曾我」。寛政二年春、市村座立作者は金八、彼れはスケ。
 彼れは脚本の草稿を細字に書く癖あり。自ら其の故を語つて曰く、本讀の時、見臺に載せたる向うより役者共が必ず見たがるものなり、文字あらければ讀まるゝがうるさゝに細かく書くなりといひき。又本讀の席へは常に長き刀を帯びて行き、

一幕を讀了るや否や、その刀の柄を握りながら役者たちの批評を尋ね、もしあし、といふものあらば一刀にも切捨てん勢ひゆゑ、大かた其のまゝ可決せられきといふ。彼れは俗才に長けたれば當時威勢比ふものなく、俳優と雖も大かたは彼れに膝を屈せしなり。彼の名優尾上松助を下廻りより抜擢せるは實に彼れなりしが、中村仲藏を忌むこと仇敵の如く、展兩者の間に衝突を生じ、又五世團十郎に阿りて奸物と稱せられし事、等は更に後編にいふべし。彼れには二子あり、一は同じく金井筒屋半九郎とて劇場の奥役を勤め、一は松井由輔とて作者を業とせり。三笑の年齢よりいへば、寧ろ次ぎの寶曆期にいふべきが當然なれど、其の二三次と相並びて同時に立てるを以て暫くこゝに編叙せり。

第十二章 劇場的音乐の發達

七二八

大薩摩節—半太夫節—一中節—河東節—豐後節—徳教と藝術
との衝突—豊後節の廢止—常樂津節—富木節—義太夫節—操
りの歌舞伎に於ける影響—辰松八郎兵衛

第二編第十一章に述べたる如く、淨瑠璃の各派が勃興すると共に、彼等は此の期に至りて愈劇場的音乐として歌舞伎に輸入せられき。即ち、江戸の劇場に於て、彼の外記節、肥前節、語齋節、永閑節が加味せられ、其に次いで、此の期に於て江戸の歌舞伎に用ひられし主なるは、大薩摩節、半太夫節、及び一中節の三つなりき。
大薩摩節は彼の薩摩外記の流派が名を改めたるものなり。既に第二編第十一章に述べたる如く、初世外記直政の門下より出でたる薩摩文五郎（寶曆九）後に二世外記直勝と號し、正徳二年、堺町に薩摩座の操り芝居を再興せしが、故ありて更に大薩摩外記と改め、享保元年より歌舞伎に現はれ、同十四年に至り、更に大薩摩主膳太夫と改稱して、當時、二世團十郎の矢の根五郎に其の淨瑠璃を演奏せり。之れを大

薩摩節の祖として今日に至るまで尙ほ劇場に其の餘韻を保てり。

●●●半太夫節は江戸肥前掾より分かれたる一派なり。其の創始者たりし江戸半太夫は始め半之丞といひ、修験者の子にして説教祭文に巧みなりしが、後に淨瑠璃を肥前掾に學び、江戸半太夫と號して一家を成しき。舊記に、正徳年中、彼れが堺町に操り芝居を起し、事を記せと、同三年、二世團十郎が始めて、助六を演せし時、彼れが其の淨瑠璃を語りしを見れば、當時より既に歌舞伎に聘用せられしならん。

以上、大薩摩及び半太夫の二つは江戸に生ぜし流派たれども、第三の一中節はもと京阪の産物たりき。蓋し都一中（享保八）が京都の出身にして、且つ山本土佐掾の門下たりし事は既に第二編第十二章に述べたりしが、彼れは本願寺末派の僧侶が遊俗せる者にして、初名を須賀千朴といへりといふ。其の江戸に下りしは實に正徳五年にして、同年十一月、市村座に於て、市村竹之丞が演せし最明寺入道の道行に彼れは、笠物狂ひといふ淨瑠璃を語りき。而して一中は、享保八年九月、京都にて死し、其の男二世一中と號し、其の女婿三中、更に三世一中たりき。聲曲類纂には江戸へ下りしを三世一中なりとし、初世は江戸へ來りし事なしとあれど疑ふべし。

尙ほ、大薩摩半太夫、一中の三派が江戸の歌舞伎に行はれし間に、半太夫より出でたる河東節、一中より出でたる豊後節、亦歌舞伎に入りて却て其の宗たりし半太夫もしくは一中を凌ぐに至れるは、恰も彼の大薩摩が外記より出で、却て外記を壓せると同じかりき。

蓋し、河東節の祖は、品川の魚商、天満屋藤左衛門の子にして、藤十郎(貞享二—享保十)といひ、半太夫の門下にして又手品及び式部の流を折衷し、終に一家を成して藝名を「一寸見河東」といひき。享保二年、始めて半太夫と分離して獨立し、市村座の「傾城富士高根」、松の内「淨瑠璃」を語り、以後、屢劇場に現はれしが、享保十年七月廿日、四十二歳にて死せり。生前、門人夕丈を養ひて家を襲がしめ、之れを藤十郎といひ、又二世河東の號は門人河丈に與へたり。而して二世河東も享保十九年に死し、更に三世河東の名は其の門下たりし河洲によりて襲がれ、以後、河東の一派は連綿として今川と雖も微かに其の名跡を存せり。

又、豊後節の祖たる豊後孫完(十六—元文五)は都一中の門人にして其の流派は一中節と同じく、もと京都に於て興りしものなり。始め都國太夫、半中と號し、後更に

宮古路國太夫と改め、享保三年十月、大阪の竹本座へ現はれてより、國太夫節として諸國に開こえしが、享保十五年、江戸へ下りて始めて宮古路豊後孫と稱し、葺屋町河岸なる播磨といふ歌舞伎の小芝居へ出で、名古屋心中の淨瑠璃を語り、同十七年春に至り、市村座へ聘せられ、松竹梅根元會我、瀬川菊次郎の八百屋お七に、其の吉祥院の場を語り、此れより豊後節は大いに世衆に悦ばれ、劇場の音楽としても、又普通の俗曲としても殆ど其の宗たりし一中節を壓せるの

みならず、又江戸に土着たる、大薩摩、半太夫、河東をも凌ぐに至りき。想ふに斯くの如く、豊後節が一たび京阪に行はれてより、江戸にまで蔓延し、遂に其の劇場にまで入りて急に全盛を極めしは、此の一派が當時の俗曲に於て最も進歩せるものなりしに因るべしと雖も、こゝに於て藝術と徳教との衝突は起りぬ。太宰春臺は其の獨語に於て非難して曰く、

都路といへる淨瑠璃師、浪遊より來りて悲しき聲にて卑しき腔の淺ましく取亂れたる事どもを唱り出す程に、江戸の人、是にうつりて興じもてはやすこき限りなし。下さまの人は言ふに及ず、階侯、貴人、霞の上なるやんこなき人にもひたすらに是を好

みて年の始にもいかなる目出度吉事の座敷にても其の悲しき聲にてうればしき事
共を語りいづるを、あかしを聞きていまはし共思はず、日にくらし夜を明かしてあか
す聞けり、

と又曰く、

其詞の鄙俚猥褻なる事いふ計なし。士大夫のきくべき事にあらず。親子兄弟並居
たる所にては面をそむけ、耳をたはふべき事也。されば此淨瑠璃さかりに行れてよ
り以來、江戸の男女淫奔する事敷をしらず。元文の年に及びては士大夫の族はいふ
に及びず、貴き官人の中に下人下女に通し、或は妻を盗まれ、親類の中にて姦通する類
いくらさいふ敷しらず。是正しく淫樂の禍なり、

と。更らに「普々物語」には、

今の豊後節といふ文句を聞けば好色に主親をたほし、或は金銀を盗み取り、果は心中
して親に嘆をかくるを手柄とす。さるにより、聲音を聞くに一としていまくし、
らざるはなし、

といひ、江戸節根原記には、

宮古路淨瑠璃はやりてより新に色事墮落多くなりき、

といひ、賤の小手巻には、

此の樂次第に行はれて其の弊淫奔野死なども多かりけり、

といひ、要するに、豊後節の攻撃せられたる要點は、其の曲風の淫靡なりといふ事、其
の詞章の不徳に涉れりといふ事、且つ此等の影響は事實に於て人心を墮落せしめ
たりといふ事にありたり。蓋し彼の春臺の如きは明かに其の儒學の見地より説
をなせるならんも、其の他に至りては、在來江戸に土着せる彼の大薩摩河東等の諸
流が新に他より來れる豊後節に壓倒せらるゝを快しとせざる一種の排外兼守舊
的の感情より此の言をなせる傾きなしとせず。然れども、斯くの如く非難多き豊
後節を當時の政府が如何にか厭過すべき、享保十六年十一月、江戸町奉行は劇場に
令を下して曰く、

此の頃より市中に於て、都路節淨瑠璃又は豊後節と唱し、指扇等をかまへ、男女相集
ひ候儀にも、いばり立しからざるにつき、停止せしめ候、右につき、其の方共、芝居並び
に小芝居等に至るまで、右淨瑠璃等のものども出て候儀以來相成らず、

と。然れども前にいへる如く、彼の豊後掾が始めて市村座へ現はれたるは其の型

年の春なり、近々一二月の間に於て既に此の令の馳みたるは如何に豊後の勢力の大なりしかを知るべし。次いで元文元年の春に至り、豊後掾の養子たる宮古路文字太夫が市村座に現はれて、淺間嶽の曲を晤れるや、町奉行稻生下野守は急に其の淨瑠璃興行を停止し、更に九月に至り、宮古路淨瑠璃太夫共芝居興行の儀は苦しからず、自宅に於て稽古相成らずと令せられ、尙ほ元文四年九月に至り、再び命あり、こゝに於て豊後節の淨瑠璃を一切嚴禁せられき。當時の落首に、豊後米ハツドニシヨウと觸れられて菰をかむらる宮コシキメラと嘲りし如く、此の禁令は彼等一輩に大打撃たりしが、更に其の翌年、豊後掾が情死を遂ぐるに及び其の家全く廢絶に及びたり。

〔音曲源話〕元文五年九月一日、豊後掾旗下の士米田氏の女と淺草奥山茶店明店にて情死あり。更に又「享曆間記」には、是れより豊後節停止せらるゝとあれど後の説は疑ふべし。

豊後節と豊後掾とは斯の如き最期を取りしと雖も、其の曲風は却て世人に渴望せられしかば、更は豊後節は常磐津節と名を改めて再び現はれたりき。實に其は豊

後掾が養子たりし彼の宮古路文字太夫（安永世によりて創められたりしなり。文字太夫は京都寺町の佛具商にして俗稱を駿河屋文右衛門といひ、豊後掾が京都に在りし時其の門人となり、羽前と稱せり。）一説には豊後掾が師たりし一中の門人なりともいふ。享保十九年、始めて江戸へ下りて豊後掾が養子となり、寄屋町河岸の小芝居に出で、小供手踊の爲め淨瑠璃を語りしが、元文元年春、市村座へ現はれて興行中に停止せられしとは前に述べたる如し。同年、豊後掾と隙を生じ、去つて都千中に從ひ、暫く宮古文中といひしが、翌春再び和睦して文字太夫の名に復し、後養父の情死してより己が本姓を名乗りて土岐豊中と改め、屢其の曲風を再興せん事を政府へ嘆願せるに、延享三年、之れを許可せられ、更めて關東文字太夫といひき。然れども、關東の二字忌諱に觸るゝを以て更に常磐津文字太夫と稱し、是れより常磐津は此の一派の通稱となりて再び盛んに市井に流行し、且つ劇場に用ひられたり。安永の初め、門人大和太夫を養ひて子とし、自ら剃髮して本所小松川に隱居し、駿河屋文中といひ、安永十年二月一日、七十三歳（六十七歳とも）にて死せりき。

〔江戸節根原記〕に常磐津といふ名は、藤のたり志斐太夫、道酒太夫等、當時常磐津の正